

都城

一四〇

開城は高麗時代歴世の王都にして京城を北に距ること十六里許の所にあり城壁は砂礫を雜へたる土を以て築き其上に小廊を構へ山形に隨ひ高下之れを築き以て外郭を作れり其宜義門は宋の使臣出入せし所なるを以て特に之れを築大となせしものゝ如し。

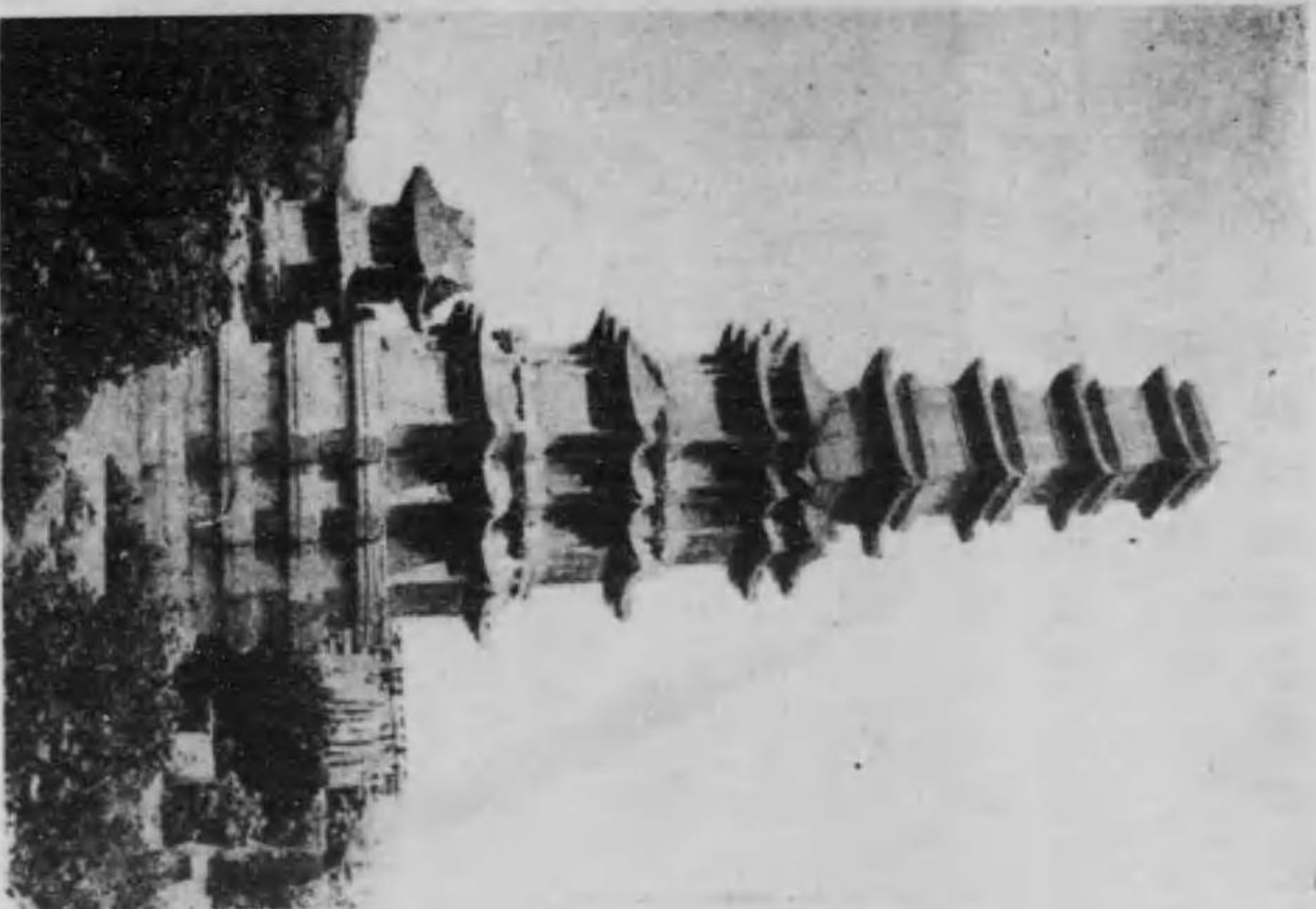
王宮

王宮は北松嶽に據り南平野を俯瞰する高臺の上に營まれたるものにして其遺趾に就て見るに周二千六百間、四面に二十門を開き規模頗る大にして制度整正輪奐の美を縦にしたりし者の如し、遺址は今滿月臺と稱し高凡五十尺、前面及左右側面は石築にして正面に稍急峻なる石階三あり、其壇上は即ち殿宇並び立ちたる所にして會慶殿の礎石纔に存するを見る。

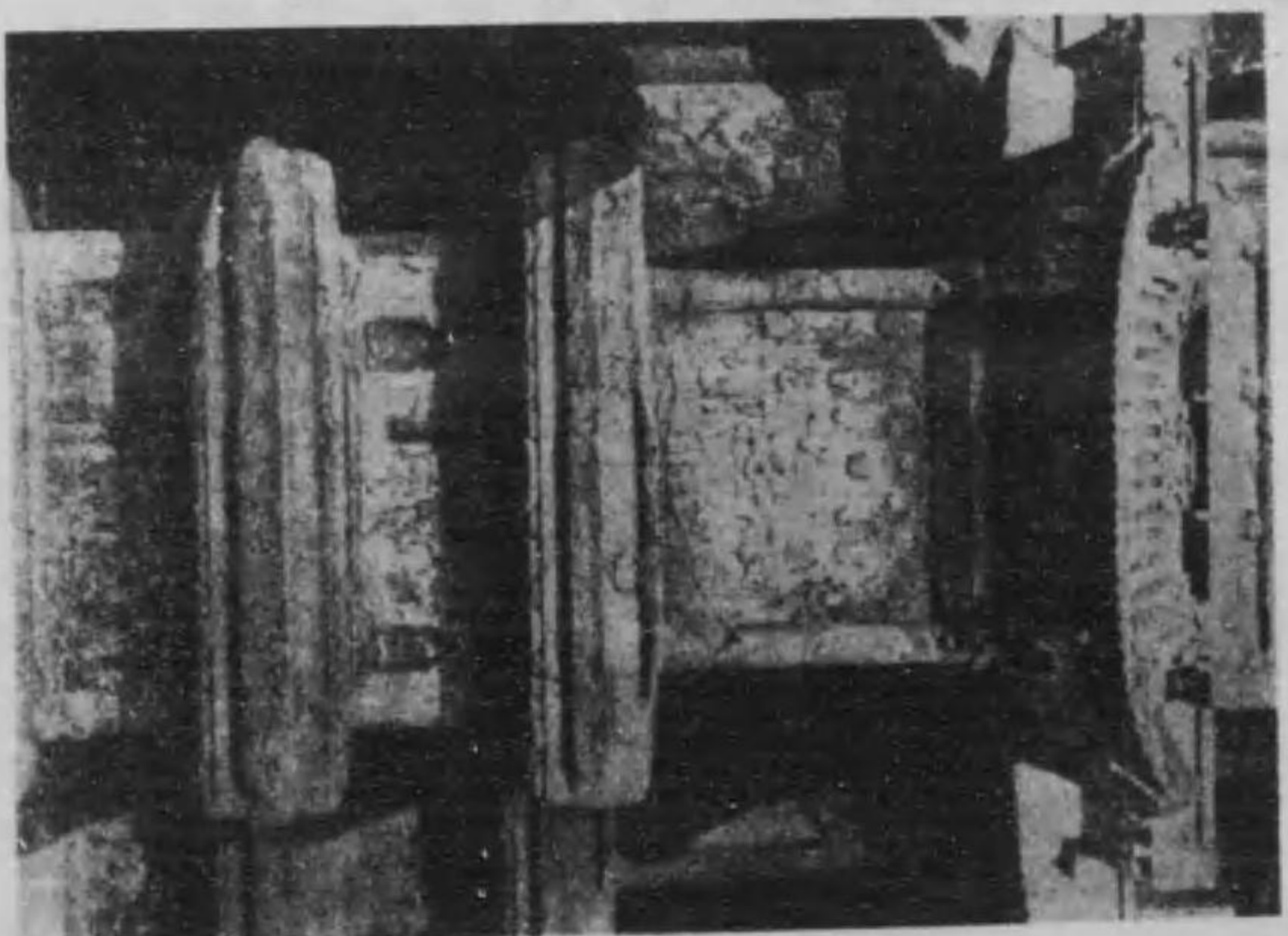
寺院

佛教は高麗時代を通じて隆盛にして太祖は法王、王輪等の十寺を都内に創立し又英宗の興王寺を起すや五晝夜燃燈大會を設け其金塔の如きは銀を以て裏と

廢國覺寺大理石塔婆



廢國覺寺大理石塔婆の一部



圖一十八第

圖一十八第

し金を以て表となせりと云ふ寺觀堂宇の壯麗は實に半島に於ける空前の偉觀たりしなるべく建築繪畫彫刻の美麗を極めしこと想像に難からず斯の如くに



廢圓覺寺大雄殿前石燈

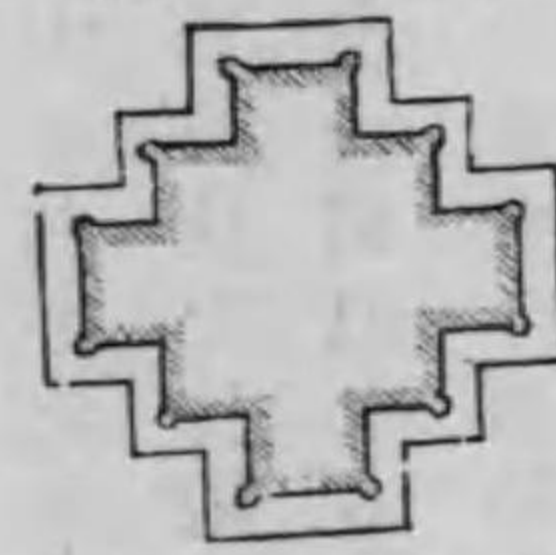
して域内に創建せられたる大伽藍極めて多かりしものゝ如きも今は悉く廢滅に歸し殘趾餘影の微すべきもの甚だ鮮く唯開城の東十町許に七重の石唯開城塔一基田中に立ち満月臺の附近に石佛像の残れる演福寺の梵鐘の南門樓上に懸れるが如き重なる遺物とすべし、

第十八圖 (乙)

されば當時の佛殿の形式は勿論其配置の如きも之を的確に知り難きものあり廢大圓覺寺大理石塔婆

此塔婆は京城塔洞大圓覺寺廢趾にありて豐徳なる敬天寺の塔婆と殆んど同一

廢大圓覺寺大理石塔婆 同平面圖



第十八圖



第十八圖

の手法より成る其建立に關しては不明なるも元朝より來りし工匠の作なるべしと云ふ構造は十層にして三重の基壇の上に立つ故に俗に十三層の塔婆と稱す(第八十一圖參照)今上部の三層は側に下ろしあり(口碑によれば壬辰の役加藤清正我國に送致せんと欲し之を下ろしたるも其重量の過大なるが爲め捨て歸りしなりと)基壇は方形にして各面斗出する事第八十二圖の如く其大さ徑十一尺六寸あり塔身は上下の二部に分れ下部は三層にして其平面は基壇と同様の形を有し上部は七層にして各方形の平面を有す其項には寶珠露盤ありし者の如くなれども今は其形を止めず全高目測五十尺許第三層軒までの高さ地盤より十八尺七寸あり

熟ら其外觀を檢するに基壇は三重にして塔身中下方の三層は四面に斗出する面を有するを以て各層の屋根及高欄と共に外觀に變化を與へ、其初層の屋根は四面各平葺にして第二層は入母屋造となり、第三層は二重屋根にして上を三面（正面及左右側）入母屋造となし入隅の所に龍を刻み出し以て上層を負ふの狀を整へたるが如き巧妙の技を示せり、更に第四層以上は其平面單純なる方形をなし下部の複雑にして變化に富めると相照應して優美の姿勢を呈し其周圍には精巧なる半肉彫を施せり、組物の形式は唐様にして隅を扇垂木となし屋根は瓦葺を模し大棟及下棟には虫物を置き、破風には第八十三圖の如き懸魚の形を刻みたり其手法何れも雄麗にして我鎌倉時代の者に類似せるを見る、我鎌倉式は宋の形式を傳承せるものにして元も亦遼金時代を経て宋の形式を傳へしに依り彼此相似たるは偶然にあらず、實に此塔姿は其技巧の精妙なる點に於て韓國に存在せる遺物中第一に推すべきものにして同時に元朝美術の精華を傳へたるものと云ふべし。

廢敬天寺大理石塔婆

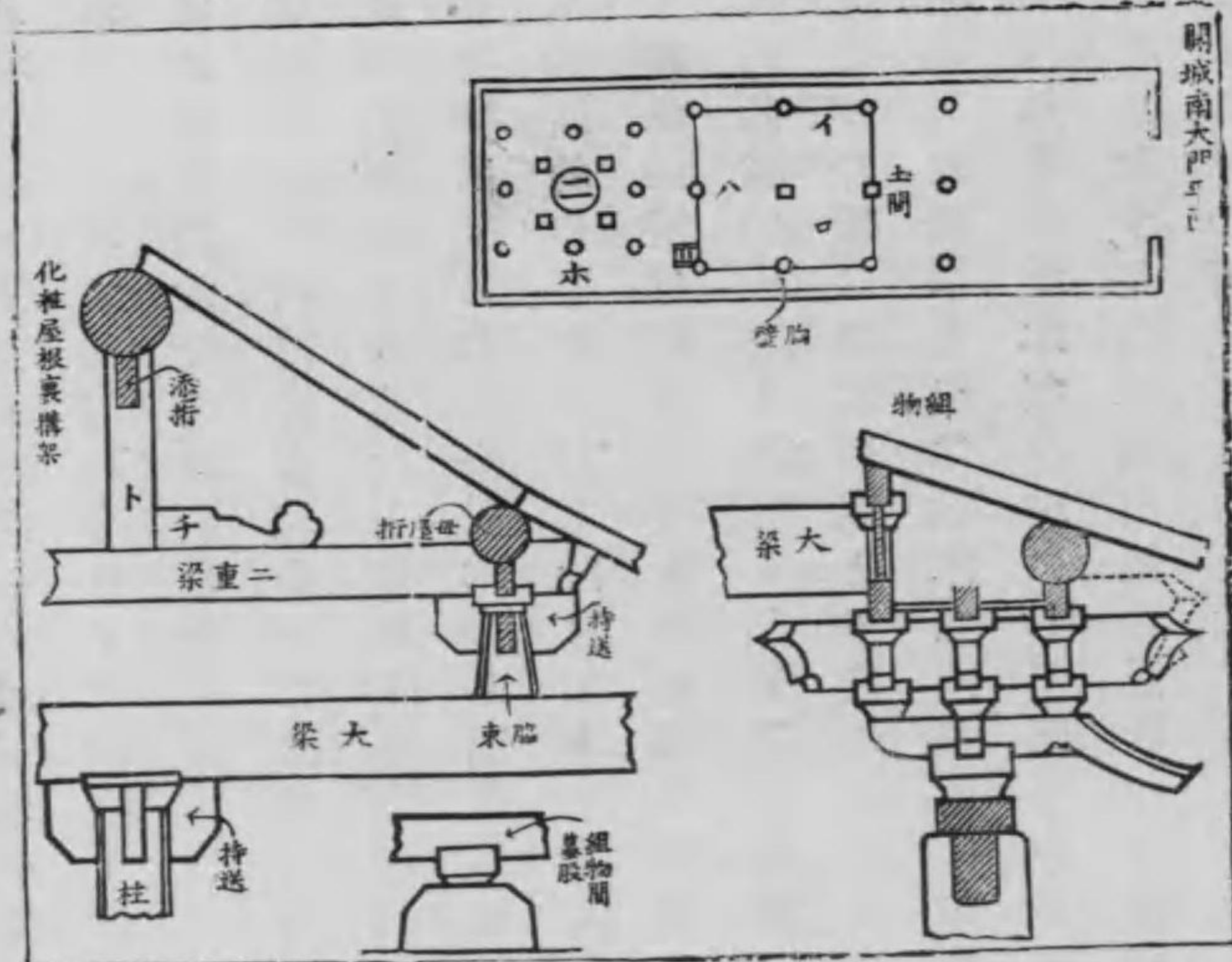
敬天寺は豐德郡扶蘇山中に在りたるも寺は今廢滅して唯石塔婆一基を遺すのみ、此塔婆は元朝より渡來せる工匠の作にして、灰色大理石を以て築造せられ、其大さ基壇の徑十尺三寸あり、形狀意匠殆んど京城大圓覺寺の塔婆に符合し、唯彼れに比して高さ稍々低く且最上層寶形にして其上に露盤を有する點に於て聊か相違し、又細部に於ける彫刻の手法も多少趣を異にせるも彼我の形式大體に於て相一致し同時代に於ける同一工人の手に成りしものなるが如く、其全形殆んど完全に保存せられ秀麗の觀を呈せりと云ふ。

以上の外開城に於ける七重の塔婆、觀音寺七重石塔婆、華藏寺七重石塔婆、興敬寺五重石塔婆等は高麗時代石塔の重なる實例にして何れも其外觀輕妙を極め、彼新羅時代の石塔か雄大の氣象を帯べるに反し優雅の性質を帯びたるものなり

陵墓

高麗時代の陵は稍高き丘の中腹にあり、太祖の顯陵は開城を距ること一里余松岳山麓にあり、陵の前面低き所に紅箭門あり、恰も我國の鳥居の如くにして、木割甚細く門の右に離れて碑閣あり、又正面に十字閣と稱する拜殿あり、其先に石階

圖 四 十 八 第



チ 墓股  
ト 棟束  
○ 鐘  
ホ 鐘閣  
ハロイ 床板張分

城壁及門樓の宏大秀麗なるものは開城及京城を以て最とす。  
開城内城  
開城の内城は高麗の末年恭讓王始めて築造に着手せし所なるも幾もなく中止し、朝鮮の太祖二年癸酉其基礎に因りて其工を嗣げり。城壁に四門あり南正面を南大門と云ひ韓國に於ける最古の木造建築にして創建當時の儘今日に殘存せり(第八十四圖参照)

圖 三 十 八 第



陵 顯 祖 太 麗 高

二あり、上に石人、石燈、石床、望頭石等を配置し其後に陵を安置す、陵は断面半圓より稍低き土饅頭にして周圍は十二面

形の基壁によりて保護せられ四隅に石獅を置けり、此陵は新羅時代の者とは大に形式を異にせるものにして後世の陵墓は多く之と相同じき配置を有す、此形式は恐らく支那の制に則りたるものなるべし。

(3) 朝鮮時代

城郭

韓國の都邑は其大なるもの若くは形勝の地に當るものは皆其周圍に城壁を築き、處々に闕門を開けり。又險要の地には往々山城を築きたり、而して其

其構造は單層入母屋造にして東の一間を土間となし中央及西の間即方二間を板張りとなす其四面繞らすに勾欄を以てし天井は通して化粧屋根裏にして柱間は總て開放せり。

側柱は長四尺許の石柱の上に立ち断面圓形にて頂部を稍圓く落し内部梁受柱は方形にして少く面を作れり。

組物は出組にして枅肘木の外面には更に尾垂木を作り出せり蓋し尾垂木は元來構造的の者なりしも此に至りて全く裝飾的となり第二の枅肘木が過大にして構造的堅牢の者となり其兩端の線形は美ならずと雖も雄健の性質を帯び丸桁は比較的大なり而して其下更に添桁を有し大斗方斗及卷斗は一定の割合を有せず斗線は單に斜面より成れり。

軒は二た軒にして地垂木丸く飛檐は角なり木割は組物に比して甚大に且兩者の關係なく垂木割は疎にして隅のみを扇垂木とし茅負の上に直に瓦を葺き裏甲を有せず是れ韓國建築の通法なり裝飾は内外とも彩色塗にして屋根は本瓦葺とし棟の兩端に蚩吻を載す。

關野博士は此建築を調査してより到底當時代と時を同ふせる我足利初期の建築に比するに足らざれども之を當代の後期の者に比すれば猶多少構造の誠實を留め勁健簡樸の手法の觀るべき者なきにあらず況んや全體の權衡は靜穩にして側らに附着せる鐘樓と相待ちて優雅の姿致を生ぜるは頗る多とすべきなりと云はれたり又以て其概要を察するに足る。

#### 京城城郭

京城は即朝鮮朝五百年間の王都の在りたる所にして漢陽又は漢城と稱す朝鮮の太祖王位に即くに及び大に此に築き大廟及宮闕華麗を極め城壁の樓門は正南を崇禮(俗に南大門)と曰ひ北を肅清と云ひ正東を興仁(俗に東大門)と曰ひ正西を敦義(俗に新門)と曰ひ東北を惠化(俗に東小門)と曰ひ西北を彰義と曰ひ東南を光照(俗に水口門)と云ひ西南を昭義(俗に西小門)と曰ふ皆石築にして闕門を開き上に二層樓を建つ就中崇禮、興仁の二大門最壯麗なり。

城中白岳の麓に景福室あり、應峰の下に昌德宮あり、共に舊王宮にして呼て西闕、東闕と稱す、景福宮は太祖の創建せし所後壬辰の亂に火け先王即位の始めに再

第 八 十 五 圖 (甲)

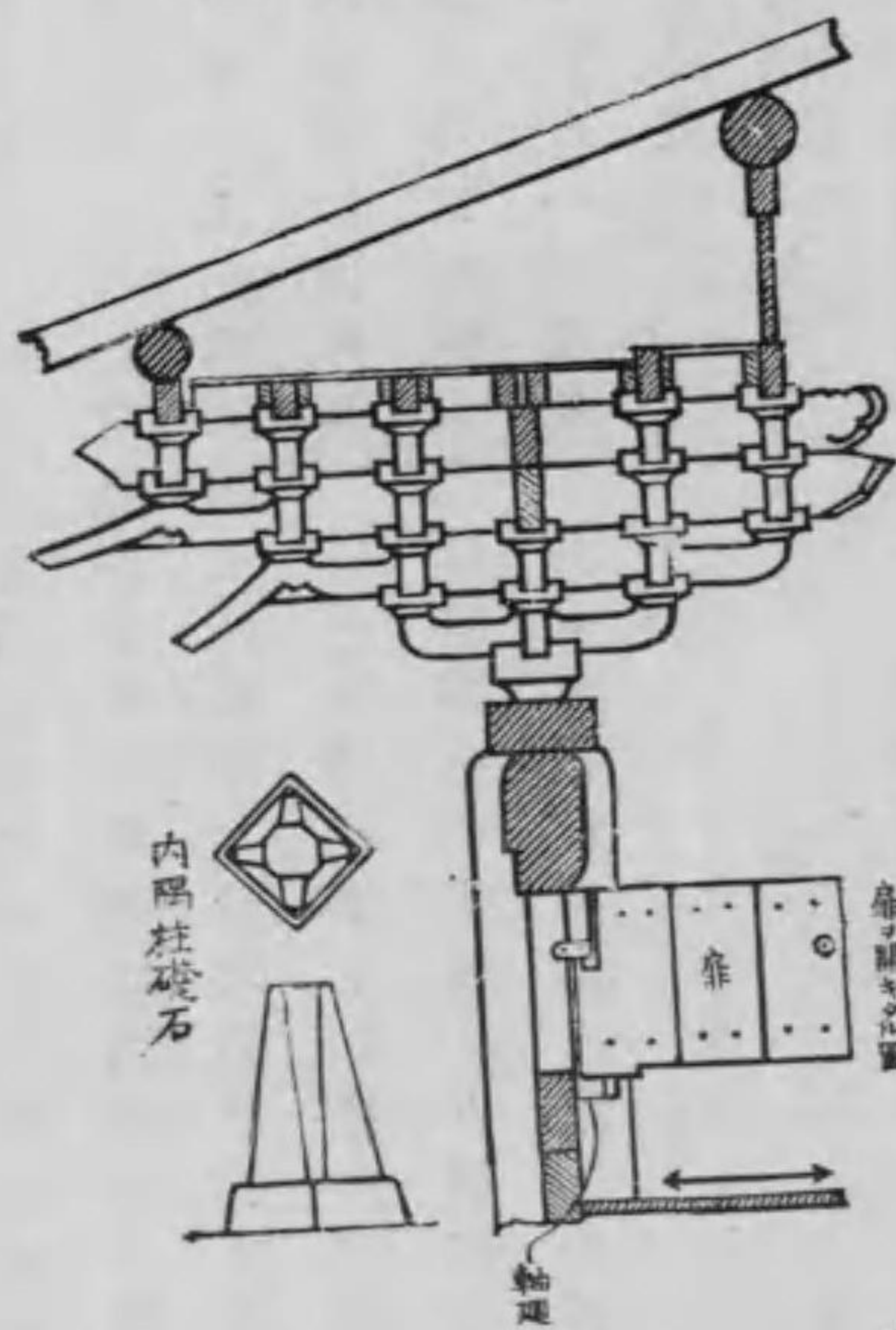


京 城 南 大 門 前 面

興せし者、昌德宮も亦國初の草創にして壬辰兵火の後光海元年重修せし所なり其昌德宮の東南に昌慶宮あり成宗の十四年建てし所なり、其南に接して大廟あり、又京城の西に偏して敦義門内に慶熙宮あり、光海の朝建てし所其北に社稷壇あり、又慶熙宮の南に當りて慶運宮あり先王の皇宮なりしが往年祝融の災に罹り後改築して今日の觀を呈せり、崇禮門(南大門)

此門は下層は花崗石を以て築造せるものにして中央に闕門を開き外觀甚堅實なり、樓は五間二面重層に

第 八 十 五 圖 (乙)



京 城 南 大 門 構 造

して屋根四注なり其初層は東西七十五尺五寸南北二十五尺六寸五分四面開放にして中央一間を板張りとなし左右各二間を土間とす又周圍には煉瓦を以て築きし胸壁ありて東南各一門を開けり構造は初層組物二手先軒二重垂木にして上層は組物三手先軒初層に同じく床は板張にして天井は化粧屋根裏なり又四面の柱間には扉を設け簡單なる軸廻しにより開

閉すべく全體の權衡は下部の堅實なると上部の莊重なると相待て頗る雄大壯麗なり(第八十五圖甲及乙參照)

柱は断面總て圓形にして其礎石は單に柱下に當れる所を高く作り出せるに過ぎざれとも別に隅柱の内に立ちて上層の隅柱を支ふる礎石は第八十六圖の如く長くして踏張りを有し頭部八角形底部方形なり又柱の頭部には多く粽を作り頭貫大にして膨みを有し組物は其大斗は柱より著く小く枰肘木は堅牢の度を増さんが爲め相重ね其端を肘木の形狀に造り更に外方に尾垂木を作り出せり裝飾は内外共に彩色を施せるも赤緑の二色多し。

要するに此南大門は其構造の主義より細部の手法に至る迄彼の開城の南大門と互に一致する所ありて後世の如く虚飾を弄し纖巧の弊に陥りしもの、比に非るなり。

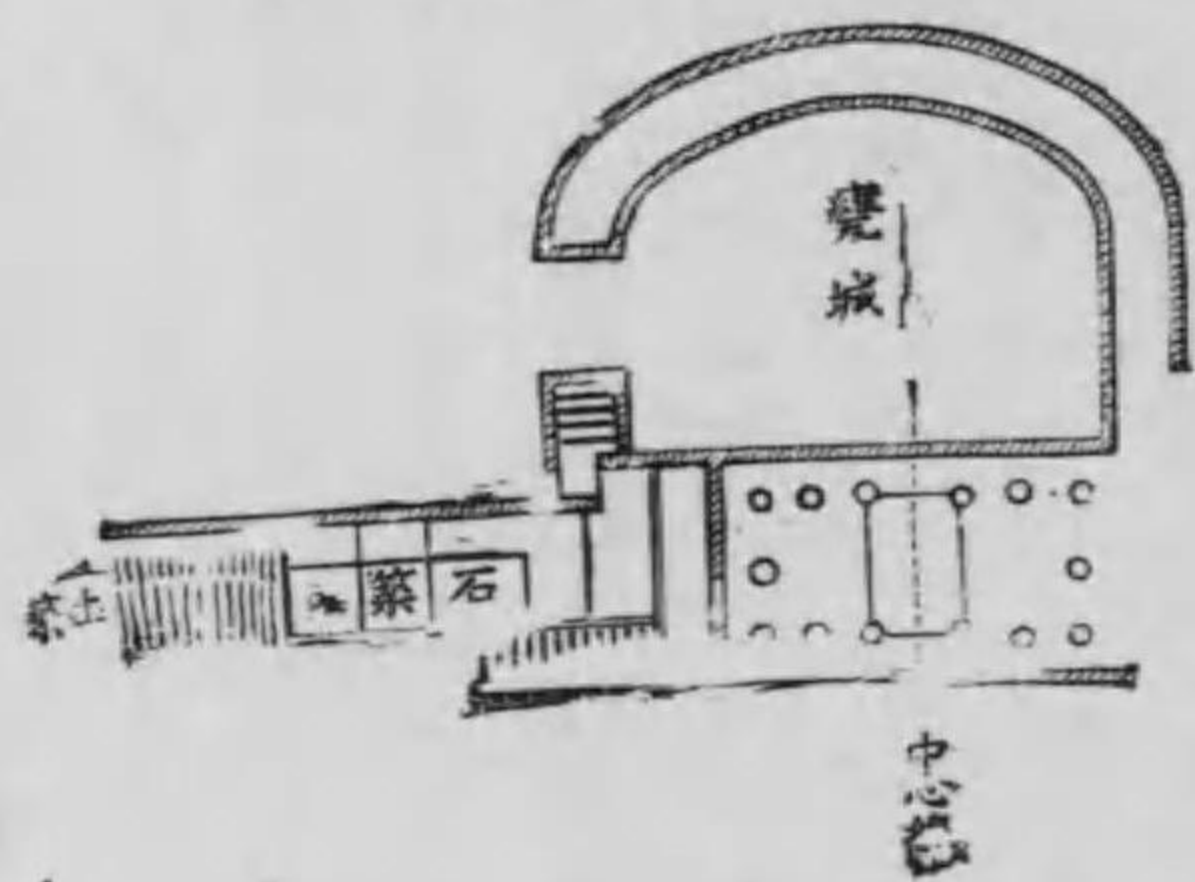
興仁門(東大門)

此門は下層は石築にして闕門を開き上に二層の樓ある等南大門と同様なれども唯だ前面城壁の一部右方より外に出て彎曲して左側に至り左方より少く斗出したる城壁の一部と相對して第八十七圖の如く甕城を作れるは他に多く見ざる所なり又城壁の外面及此甕城の内外兩面には女牆を築き銃眼を穿てり。

王宮

京城内王宮の主要なるもの三あり即ち景福、昌德、及昌慶にして前兩者は太祖の時創建せし所、後者は成宗の時造營せし所にして皆壬辰の亂に焼け何れも重修

第八十六圖



京城東大門平面圖

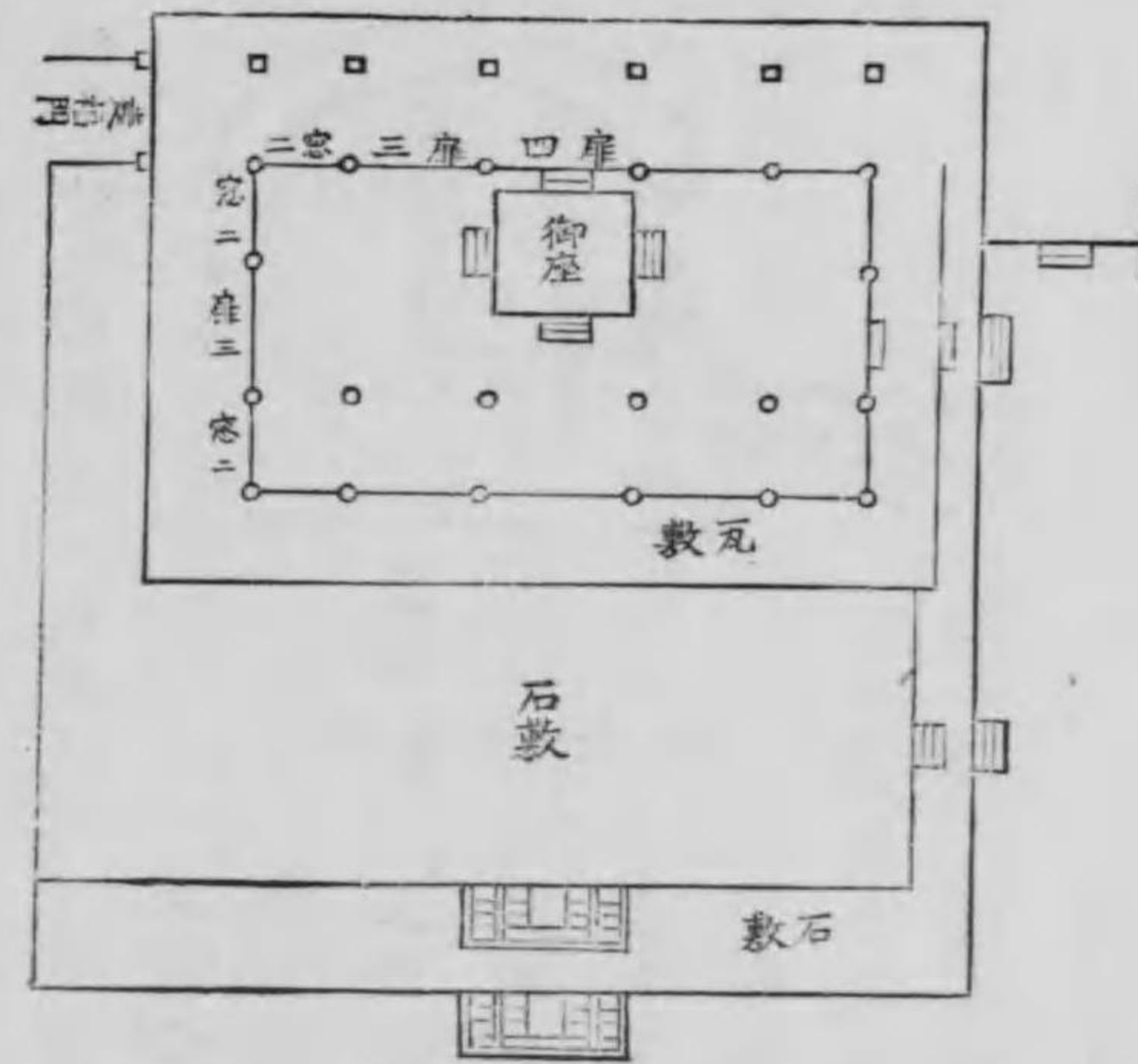
再建なれども昌慶宮の一部明政殿の一廓は壬辰の災を免れし者の如ければ當代初期の手法を窺ふに足るべく、昌德宮に因りて中期の形式を徴し景福宮に因りて最近の構造を詳に爲し得べし又景福宮の堂宇殿門等の配置は悉く舊礎に據りたれば復以て國初經營の規模を推想するに足るべきなり。

昌慶宮

昌慶宮中明政殿の正門は弘化門にして門を入り

て進めば玉川橋あり次て明政門に達す歩廊左右に走り外庭と内庭とを包み明政殿は此内庭の後にあり其制景福、昌德、兩宮と殆んど相一致し猶ほ清國北京紫

第八十七圖 (甲)



昌慶宮內政明殿平面圖

第八十七圖 (乙)



昌慶宮明政殿

禁城に類し更に我平安京の朝堂院に比するに彼此一致する所あるを見るべし  
明政殿

此殿は五間三面單層入母屋造にして第八十七圖の如く後面別に廂一間あり稍  
廣き基壇の上に立ち桁行六十尺四寸梁間三十二尺二寸八分内部中央に寶座を  
設け組物は三手先の詰組にして其手法京城南大門に類す内部は瓦敷にして天  
井は草花模様を彩繪せる格天井にして中心飾は密接せる小なる組物を二重に  
折上げて作り内部に隻鳳寶珠及雲紋を彫刻せる者を吊下けて飾りとなせり要  
するに此殿は景福及昌德の正殿か常に重層なるに反し單層にして全體の形狀  
能く整備せり。

昌德宮

太祖の創建せる宮闕は壬辰の亂に烏有に歸せしも尋て再興せられ爾後近年に  
至る迄王宮として各年代に造營せられたる種々の建物を包容し殿堂門廊の壯  
麗なるのみならず内部は垣牆房屋相接し樓閣小亭の丘陵池泉に沿ふて散在せ  
るありて乾燥無味なる韓國に於ける一の仙境なりとす。



(甲) 圖 八 十 八 第



階石前殿政仁宮德昌

(乙) 圖 八 十 八 第



殿政仁宮德昌

昌德宮は昌慶宮と相隣接し數廊に分たる而して其正門は敦化門にして之れを  
入りて右折し進善門を入れれば仁政殿の一廊に達す此先に宣政殿の一廊誠正閣  
の一廊東宮及東宮妃の居る所と云ふ承華樓の一廊樂善齊の一廊王妃の居る所  
と云ふ文政殿の一廊歡慶殿の一廊通明殿の一廊國王常住の殿なりと云ふ其他  
宙合樓書香閣等數多の樓閣門廊等あり。

此殿は昌德宮の正殿にして其建造の年代は光海君の朝にありし者の如く彼明  
政殿に比して規模壯大裝飾絢爛實に季朝後期の手法を表はすものにして最近  
の再興にかゝれる景福宮勤政殿の模本たりしものなり殿は五間四面重層にし  
て二段の石壇上に立ち屋根は入母屋造にして瓦を葺き蛸吻及鬼龍子を上げ其  
構造殆んど勤政殿と同じく寶座の上には天蓋を懸け建物の内外總て藻彩を施  
せり。

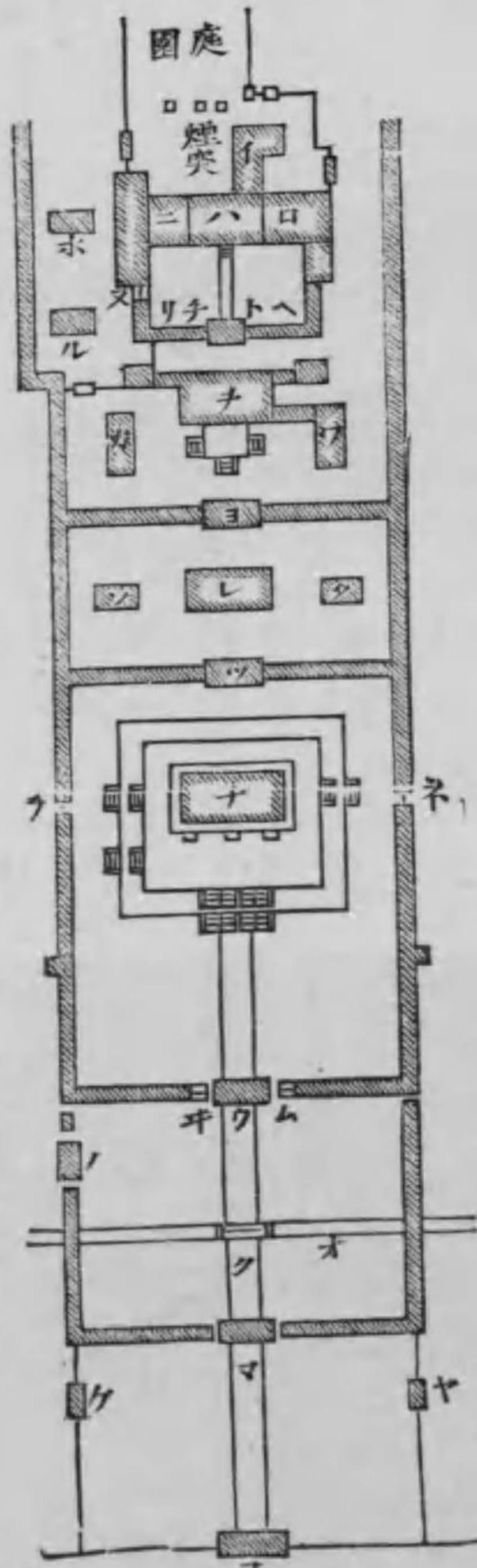
樂善齊  
王妃の殿と稱し數棟の建物を連接し自由に計畫したるものにして多くの房室

を有し後に庭園を構へ前に廊下を繞らし頗る變化に富み韓國に於ける居住的  
 宮殿の模範となすべきものなり。

此建築は内外素木造りにして色彩の裝飾を施さゞれども障子建具の如き其施  
 工實に精巧にして他に比類なく本邦人の賞賛する所にして余も亦先年此殿を  
 一見し其輕快なる風様を賞せり。建物の主要部には必ず廣間を設け床を板張に  
 なし高き格天井を設け居住の室は防寒の爲め必ず土床とし温突より導きし煙  
 道を其下に通し且つ暖められたる空氣の散逸を防がんが爲め成るべく室を狭  
 くし多くは方一間にして大なるも一間半を出でず天井を成べく低くし窓戸を  
 二重若くは三重となせり。

此他承華樓も亦奇巧を極めたるものにして、不規則なる平面を以て土地の高低  
 に配せられ、各種の建物を自在に連結して、高低長短大小皆宜しきに適ひ其の變  
 化縦横なる魚水門の織麗にして其の權衡の珍奇なる何れも觀者をして轉た屋  
 氣樓に對するの感あらしむ。

第 八 十 九 圖 (甲)



景福宮平面圖

此宮殿は太祖三年に創建せしものにして後壬辰の役兵火にかゝりて荒廢せし  
 を先帝即位の初め大院君が舊趾に就き再興せしものなり。  
 舊景福宮は太祖の王城として築きし所にして規模の大、制度の嚴、固より昌德、昌  
 慶諸宮の比に非らず而して今日の殿宇は當初の舊礎に據りしを以て其の平面

慶會樓

- イ 健順閣
- リ 乃順堂
- レ 思政殿
- キ 月華門
- ロ 元吉軒
- ヌ 財成門
- ソ 萬春殿
- ノ 雜和門
- ハ 交泰殿
- ル 欽政殿
- ツ 思政門
- オ 御溝
- ニ 含光閣
- フ 康寧殿
- ヲ 協義門
- ク 錦川橋

修政殿(議政府)

- ホ 含元殿
- マ 勤政殿
- ヤ 四脚門
- ヘ 林仁堂
- カ 慶成殿
- ラ 啓仁門
- マ 興禮門
- ト 順承堂
- ヨ 德五門
- ム 日華門
- ケ 用成門
- チ 輔宣堂
- タ 千秋門
- ウ 勤政門
- フ 光化門

は殆んど昔日の平面と同様なり。

第八十九圖(乙)



景福宮勤政殿

景福宮勤政殿内部寶座天井中心飾



第八十九圖(丙)

景福宮の周圍には高さ石壁を繞らし隅角に城樓を置き四方に門を開き南の正門を光化門と云ひ北を神武門と曰ひ東を建春門と曰ひ西を迎秋門と曰ふ光化門内に興禮門勤政門ありて正殿なる勤政殿は二段の石壇上に立つ此殿は國王の朝賀を受け大儀を擧ぐる所なり其後方思政門内に思政殿あり國王每朝萬機を見るの所なり又其後方なる康寧殿は國王の居所にして交泰殿は王妃の居所と稱す(第八十九圖參照)

備考 國王及王妃の常住殿は大棟を置かず他と區別すと云ふ昌德宮の通明殿及景福宮の康寧殿交泰殿等には大棟なし他に意味ある者か。

勤政殿の東方に當り別に修政殿あり又交泰殿の東方に慶會樓あり規模甚だ壯大にして蓮池之れを繞れり此は國王の郡臣に饗宴を賜ふ所なりと曰ふ其他醉香亭乾清宮集玉齋國王の學問所等あり。

光化門

景福宮の正門にして三關重層なり其石壁は高さ二十餘尺闕門は厚さ四尺一寸許の迫持より成り天井は鏡天井なり又樓の組物は外二手先内三手先手法勤政

殿の如く屋根は四注にして蚩吻鬼龍子を置き内外共華麗なる色彩を施せり。要するに全體の權衡甚美にして森殿の外觀を呈すれども細部の手法佳ならず勤政殿

景福宮の正殿にして前面の内庭には悉く石を敷き勤政門より殿前に達する迄の路を一段高め其左右に白大理石を以て位標を立つ正一品より正九品に至る凡十二にして昌德宮の仁政殿前にも同一の制を行ふ。

殿は五間五面重層にして二段の石壇上に立ち其周圍を繞りて石欄を設け石階は正面一所側面二所あり屋根は入母屋造にして瓦を葺き蚩吻を置けり又内部組物其他構架の方法凡て仁政殿に類し多少裝飾を増加せるのみ要するに此殿は全體の權衡宏壯森嚴にして遠くより之を望めば其偉觀に感ずべきも近接して其細部を見れば拙陋に失望せざるものなく其手法遙に仁政殿に劣り仁政殿は又更に明政殿に及ばざる遠し故に韓國の建築術は漸次四百年來退化の淵に沈みつゝあるを徴するに足る。

## 佛寺

李朝排佛の結果佛寺の多くは荒廢に歸したれども其最著名にして規模の大なるものに慶尙道の通度寺、海印寺及梵魚寺、江原道の金剛山寺等あり猶平壤附近にも長安寺、金光山寺等ありと云ふ。

## 通度寺

慶尙道梁山郡にありて新羅時代の創立なれども壬辰の役一山悉く焦土となり其後再建せられしも制度は悉く舊に據らず朝鮮時代の方法に則りしものならんとは關野博士の鑑定にして僧徒猶七八百人の居住するあり其の殿宇坊舎の盛なる其所屬僧菴の多き李朝佛教排斥の裡に在りて能く其勢力を維持し自治自營府郡の干渉を受けず山水幽邃の境に別天地を開けるは恰かも昔時の我叡山高野の盛時を追懷せしむるものあり其現存せる佛殿及諸菴を擧ぐれば左の如し。

佛殿 極樂殿、靈山殿、藥師殿、觀音殿、龍華殿、光明殿、影子殿、地藏殿、應真殿、藏經殿

山靈殿、獨聖殿、慈藏殿、大雄殿、

僧菴 (南方)吹雲菴、白蓮菴、玉蓮菴、修道菴、瑞雲菴、泗溟菴、

(北方)寶相菴、慈藏菴、極樂菴、毘盧菴、白雲菴、普光菴、華嚴菴、

本寺内に奉する宗門の種類は教宗、禪宗、華嚴宗、法華宗、阿彌陀宗等なりと云ふ諸殿僧庵等の配置は甚不規則にして殿正を缺けり。

高麗時代のものと大差なく一定の制度を有せしが如し即ち太祖の妃神德王后の貞陵及大院君の陵墓の如きは好實例にして何れも石人、石馬、石羊、望石等を有し高麗朝の顯陵と殆んど同一の制に則り且つ支那に於ける明陵の軌模を縮小したるの感あり。

## 第八十二節 日本建築史

### 國勢一斑

我大日本帝國は太平洋中に横はる數多の島嶼より成り一方は大洋に面し一方は大陸に接近せり故に風俗政教、工業等に其影響を蒙り特に支那、朝鮮との交通は最盛んにして佛教を輸入し唐、宋、明、三韓の如き能く我文華の先導たりしなり

而して人民は萬世一系の皇室を戴く爲め鎌倉幕府以來將軍には興亡數々ありしも更に大革命なく制度文物の破壊を被らず且つ外國の侵略を受けし事なきを以て忠君愛國の心深く宗教に熱中し風景佳良なるより美術心を養成し風流雅趣を好み又木材の産出夥多なると數々地震に逢遇するより木造建築の發達を來たし石材の如きは石壇、石階、敷石、礎石の外使用する事なかりしが故に建築は比較的小規模にして彫刻には精巧緻密なるもの多く遂には纖巧の弊を生ずるに至れり又我國は温帶に位し比較的雨量多く寒暑中和なるを以て窓大に壁薄く屋根の勾配急にして殆んど防寒の設備不完全なれども至つて快活なり又天氣は晴朗にして空氣乾燥せるを以て木造建築の保存に適し寧樂には千二三年前以前の寺堂を完全に保存せるが如き他國には其例甚稀なり。

### 建築總論

我國石器時代の人種は堅穴に住居し冬季の寒冷を凌ぎしが之れを驅逐したるアイヌ種族も亦舊俗を踏習し冬期の居住に當てしが如く其後天孫人種の世となりても尙ほ土蜘蛛と云ふ種族多く住す土蜘蛛とは土籠と云ふ義にして皆穴

居の民なりし也而して此等の民族も亦深二三尺位の堅穴に住し其上を小屋にて被ひしが屋根の端は地上を幾ばくも離れざれば出入の爲め穴の縁を斜に穿ち或は短梯子を架し其處より這ひて出入せし故に後世家の入口を尙這入口と云へり其後漸次深さを減じ遂に地上に建設するに至りしなり其小屋の構造は口碑及び記録等に依れば匠家に傳はる天地根元の宮と稱する造りなりしが如く母屋桁は地上に接せしかば後世軒桁を地廻りと云ふ其後小屋は漸次進化して柱を應用するに至れり而して天孫人種は殿宅を造營するに釘桁を用ふる事稀にして柱は桁梁を支承する様切組みタテマ種は葛藤或は殼カウシの皮を晒して綯オビたる繩にて結び上中の區別は大略等しと雖も上級は床の高さ六尺乃至八尺ありて階子を掛けて上り中級は床甚だ低く一二尺に過ぎざりしと云ひ恰かもアイヌ種族の倉に髣髴たるものなりしならん其後下級人民も漸次中級民族に類似せる建築を爲すに至りしかば雄略の朝には穴居の民は殆んど跡を絶ち中級人は屋根を柿葺又は重大なる草葺となせしが其後佛教傳來して瓦の製造法を傳へしより五位以上は瓦葺にし平民の有力者も之れに倣ふを許されたり。

古代の宮殿も亦人民一般に用ひし小屋造の宏壯なりしものにして今尙ほ其遺風を神社建築に残留せり抑神社とは祖先又は國家に功勞ありし人を祭る所に於て太古のものは其時代の宮殿に異なる所なかりしなり而して今日に傳るものの中に於て最古の形態は伊勢大廟にして之を唯一神明造と云ひ又大社造住吉造の二種あり此三つを古式とす其後佛教傳來して建築の風を一變し春日造流れる造等起り次で僧行基が本地垂迹説（或は權化）を立てし以來神佛融和し各大社は神宮寺を建て大伽藍には鎮守を置き神社の建築に佛寺の風を加味するに至りしを以て八幡造（宇佐八幡宮）伽藍造（加茂下上）權現造（日光）八棟造（北野）等の數式を生ぜり。

神社の特質は鳥居（華表）の存在にして或る學者は之れを古代に用ひられたる普通の門より進化したるものとし中央の額面は居住者の姓名を記したる遺風なりと云へり印度のトールン支那の牌樓（牌坊）は其形體の類するより學者をして疑を挿ましむ。

佛教は欽明天皇十三年百濟より傳來し蘇我稻目宅を擧げて寺と爲せしより寺

院の建立せらるゝもの多く南都に六宗を生じ法相華嚴律最盛にして有名なる法隆薬師興福の三寺は法相宗に屬し東大寺は華嚴宗唐招提寺は律宗にして其建築風は専ら唐の影響を蒙りしなり。

此時代は佛教最隆盛にして寧樂の都は大伽藍寶塔雲霄に聳えて輪奐相映じ其美觀思ふべく特に總國分寺即ち東大寺には金銅盧舍那佛の大像を鑄造安置せられたり實に我國工藝の黄金時代にして希臘に於けるペリクルス時代と對比すべきなり其後桓武天皇平安に奠都ありて宮闕堂宇の製大に備はり専ら唐風に模せられしが藤原時代に至り大陸との交通絶へ人民の氣質は全く島國的となり貴族は其權力を恣にして競ふて宏大華美なる邸宅を經營し遂に其規模を唐の四阿造に取り折衷して華美なる純日本風住居建築即ち寢殿造を發達せり又佛教には天台眞言の二宗を生し加持祈禱及び修法を行ひ神秘を尊べり此等を稱して密教と云ひ之れに對して南都六宗を顯教と云ふ平氏時代に至りては藤原氏の政權一轉して平氏に移りしも平氏は久しく京都に住せしかば工藝風俗優美にして藤原氏に異らず又佛教には淨土宗及び融通念佛宗を生じたり鎌

倉時代に至りては源賴朝の幕府を鎌倉に開くに及び前轍に鑒み甚しく華奢懦弱を誡めしかは武士的建築即ち武家造起りたり又佛教には淨土眞宗法華宗時宗を生じ宋より新に禪宗を傳へ最隆盛を極めたり故に建築の風も亦簡疎淡泊のものとなれり足利時代に至りても禪宗のみ盛に行はれ武家造り變化して書院造りとなり茶室建築も亦萌芽せり桃山時代に於ては豊太閤の豪邁なる氣性自から建築彫刻等の上にも顯はれ雄大なる城堡宮殿等を造營し寺院にも大なるもの起り茶室建築も亦進化せり徳川時代に至りても其初期には桃山時代の遺風たる雄大の氣韻を存せしも漸次鎖國主義の爲めに民心を委縮し工藝振はず徒らに織巧華麗となり特に木割の法行はれ技術家は悉く之れに束縛せられ工藝の不振最甚しきに至りしが其末期に至り海門の鎖鑰を解さしかば外國人は俄に入り來りて鼎の沸騰するが如く西洋建築も亦必要に逼られて其端を啓く事となれり然れども何れも木製にして和洋折衷に過ぎざりしも次でフォートルス(英人)ポアンビル(佛人)コンダー(英人)等來朝し純然たる西洋式の建築を紹介せり其後工部大學校建築科卒業生中海外に留學せしもの續々歸朝し其指導に

依り工科大学よりも多くの俊秀を出し外人の設計を待たずして種々の建築に従事するととなれり要するに日本建築の歴史は恰かも基督教のゴート式に於ける回々教の大食式に於ける佛教の印度式に於けるが如く宗教の影響多大なるを以て概して神社と佛寺の建築沿革に過ぎず尙ほ君主專制なるより奈良若くは京都に大内裏の建築發達し藤原時代には寢殿造り鎌倉時代には武家造豊徳時代には書院造、城堡、茶室等の建築發達せるなり。

#### 建築式の分類

我國の建築式は希臘クラシック式の如く楣式にして唯一種の方法の時代に依りて變遷進化せるものなり。

年代に於て日本建築を分類すれば左の如し。

- (甲) 佛教傳來以前の建築
- (1) コロポククル時代
  - (2) アイヌ時代
  - (3) 神統時代(純正日本式時代)

#### (乙) 佛教傳來以後の建築

- (4) 飛鳥時代(推古時代)(三韓直寫時代)
- (5) 寧樂時代(唐直寫時代)
  - (a) 白鳳期(天智期)
  - (b) 天平期(聖武期)
  - (c) 弘仁期(嵯峨期)
- (6) 平安時代(藤原時代)(日本化時代)
- (7) 鎌倉時代(北條時代)
- (8) 室町時代(足利時代)
- (9) 桃山時代(豊臣時代)
- (10) 江戸時代(徳川時代)
- (11) 明治時代

備考 日本古代の事蹟も考古學者の研究せる結果漸明瞭となりしを以て茲にコロポククル時代アイヌ時代を設けたり或は魯莽の誹を免れざる可しと雖も已に遺跡に依



て其實跡を推知し得たる今日尙ほ暗黒時代として之れを捨つるに忍びざればなり又或る學者は推古時代を以て寧樂時代に編入し弘仁期を以て藤原時代に編入せるも關野博士は永年寧樂地方を研究せるの結果推古式の特質に鑑み別に一時代とし飛鳥時代と稱し弘仁期は所謂變化時代なるを以て之れを寧樂時代の後期とせられたり余は同氏の分類法に従ふ事とせり。

### 建築の例證

#### (1) コロボククル時代

コロボククルとはアイヌ語にして常に落の葉の下に隠るゝ人種即ちコロコニ(落)ボク(下)ウン(の)グル(人)の約言なり此人種は重に石器を使用せしを以て人類學者は此時代を稱して石器時代と云ふ而して其の遺跡分布區域は頗る廣く南は臺灣より北は千島に至る迄にして恰もエスキモー人種に酷似したりし證は土偶を見て知るを得べし此時代の人民は冬季堅穴に住し木の枝を組みて小屋と爲し茅草の類を以て之れを葺き夏季は粗雅なる假屋を造り涼を山川に求めしなり其の遺跡としては堅穴、貝塚、土器塚等ありて堅穴内にてはアンペラの如き編物を敷き重に獵狩漁業を事とし多くの土器類を製作し其遺物に依て面貌風

俗等を窺知するを得るなり此の種族の冬期居住する堅穴の大きさは二間四方以上及び大小ありて一定せずと雖も形狀は方圓の二様ありて數室連合のものと單一のものと混淆せしが如し又繪畫としては短線及び幾何學的紋様、渦巻き及び唐草、動物、植物の形狀等を用ひたり。

#### (2) アイヌ時代

コロボククルに次て我國に棲息せる種族をアイヌとす此の人種も今や北海に餘喘を保ち殆んど絶滅に瀕せりと雖も古代に在ては其勢力強大にして數々皇軍に抗せしは古史に明かにして畿内、山城國乙訓郡の如きはアイヌ語のヲタクンネにして所謂砂黒村と云ふ義なりと云ふ其他アイヌ語の本國に存するもの多く其の古蹟としてはチャシコツあり。

#### (チャシコツ)

チャシコツとはアイヌ語の砦若しくは館と云ふ義にして我天孫人種の間にも古く柵館を設けしと雖も右は後世に遺留するもの少なく反てアイヌの遺蹟に其の現存を見る其の所在地は陸奥北海道の如き僻遠の地に過ぎずして形狀は

高丘の低地に突き出でたる鼻の上部を土手にて繞らし其の土手下の外側には空濠を作るを常とし土手中には堅穴あるものと無きものとあり。  
 (住家)

住家は之れをチセと云ふ穴居を脱したる古代の方法は知るに由なきも其の幼稚にして簡易なる現今存在せるものと大差なかりしなるべく其の構造は先づ地上に家屋の位置を定め桁を置き梁を載せ之れを結び止め扱を建て棟木を取附け順次垂木を掛け渡し桁梁に沿ひ内部に傾けて柱を建て其の枝の出でたる股の所へ小屋全部を昇せて置き据付け屋根及び家の周圍を皮剥の葦にて被ひ雨露を免かる又棟飾にも第九十圖の如く枝付の丸材を用ひ棟木其の他を置き皮剥の葦にて被ふを通常とす。

備考 宗の義としてアイヌ語のチセ朝鮮語のチビ日本語のチン相似たり。

(倉庫)

倉庫は之れをプーと云ひ雪解の際洪水を免るゝ爲め床を高くし丸太を割りたる儘にて床を張り柱と梁の間へは必ずシナ或はヒョーと稱する木皮を挿みて

屋 家 ヌ イ ア

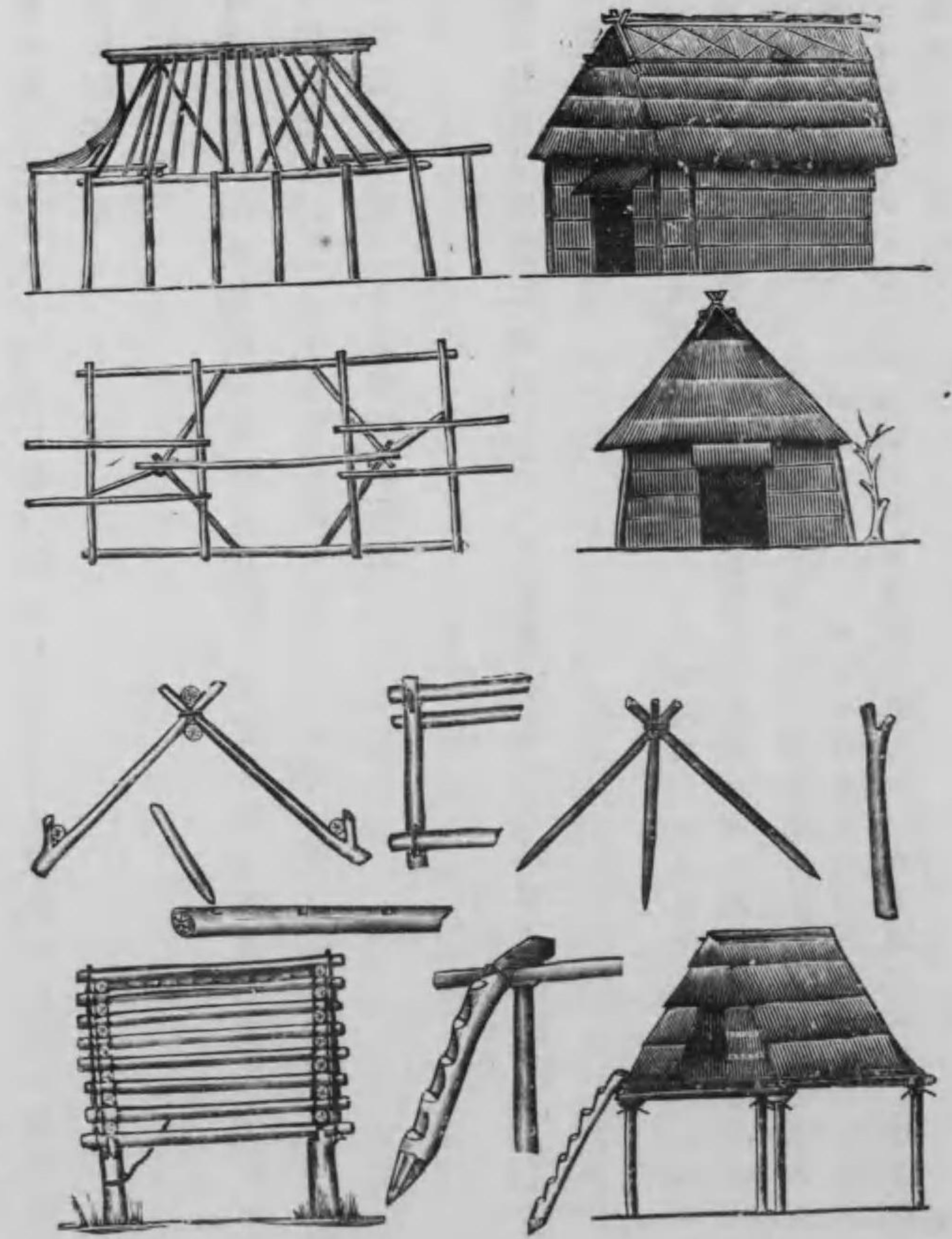


圖 十 九 第

鼠族の床上に登るを防ぐは漸注意すべき點なり又入口の所へは丸木に段を付けたる梯子を架す。

(熊小屋)

アイヌは祭神の際犠牲に供する目的にて多く熊を飼養し其の小屋は第九十圖右下段の如く地上より床を昇ぼせ丸太を蒸籠キイロウに組む其方法第一圖と同一にして又畔倉に髣髴たり(上卷挿圖參照)

(墳墓)

古代に於ける墳墓には石を並べたるものあれども多くは槍形の木柱を建つるもの多し。

備考 アイヌ種族と混じて棲息せる土蜘蛛種類は堅穴に住し特種の土器即ち彌生式土器を使用せしは明かなれども其紋様は石器時代のものと神統時代の埴輪に類せる刷毛目などを施したるもの及び石器の外に焼米有り又糶を印せし品あるを思へば兩時代の中間に位するものなるべしと雖も他に建築的特種の點なきを以て之れを省くコロボクウングル土蜘蛛等の事蹟考證に付ては近來新發見に伴ふ新説多し其専門の書籍に就て參照するを要すべし。

(3) 神統時代

古史に溯りて稽ふるに伊弉諾伊弉册イサナガ、イサナミの二尊國土を開き天孫統を垂れ給ひて以來聖子神孫前後相承け以て神武天皇に至りて辛苦經營して遂に皇統千萬世の基を啓き給ひ綏靖以後長く祖業を遵守し無爲の化に浴すること九世五百六十二年崇神の朝に至り海外との交通漸く繁く人智開發の端緒を萌し爾來年を経ること殆んど三百年應神の朝に至り戰勝の餘威に乗じ朝鮮の文化を移植し制度文物の革新を圖らんとし給ひしも時運未だ至らずして甚しき變化を見ず應神元年より欽明十三年(千二百十二年)初めて佛教の傳來する迄年を歴ること三百五十二年なり猶考古學者は遺物に照し神武以前を算せば七八百歳を加ふるに至らんかと云へり此時代を稱して神統時代と云ひ獨り神道のみ行はれ他に宗教と認むべきものなし。

備考 神道は元來祭祀にして宗教的分子を含まざりしも後世に至り宗教趣味を加へしなり。

此時代の初期には神籬ヒモコヤを樹て神殿に代へ神社宮室の別なかりしも崇神の朝初

めて皇室と別かちて神社を建立せり而して上は皇帝より下は國造等に至る迄人々高大なる墳墓を築造し死者の靈魂を慰めしを以て考古學者は此の時代を目して古墳時代或は高塚時代と云ふ。

宮殿

宮殿の構造は匠家に傳はる天地根元の宮なるものに胚胎すと云ふ其の方法は先づ長方形の穴を掘り其前後に柱を建て其上に棟木を置き左右より二本の材を掛け渡し母屋桁を載せ更に垂木を置き昔くに茅草を以てし其頂上には別に茅草を重ね其上に一本の棒を置き更らに横に數本の丸太を並へ置けり第九十一圖參照次に柱を應用するに至り之れに椽を張り階段を設け遂に方今に於ける神社の古式に酷似せるものとはなりしなり。

第九十一圖



古史に徴するに諸冊の二尊淡路の小島磯取盧島に降り八尋殿を立て給ふとあり其築造方法は山に據りて地下均を爲し地を掘り岩層或は巨石の上に大なる柱を建て根固めを爲し之れを天御柱と云ひ其周圍に小柱を立て廻らしたるものにして其遺風は出雲の大社に存せり。

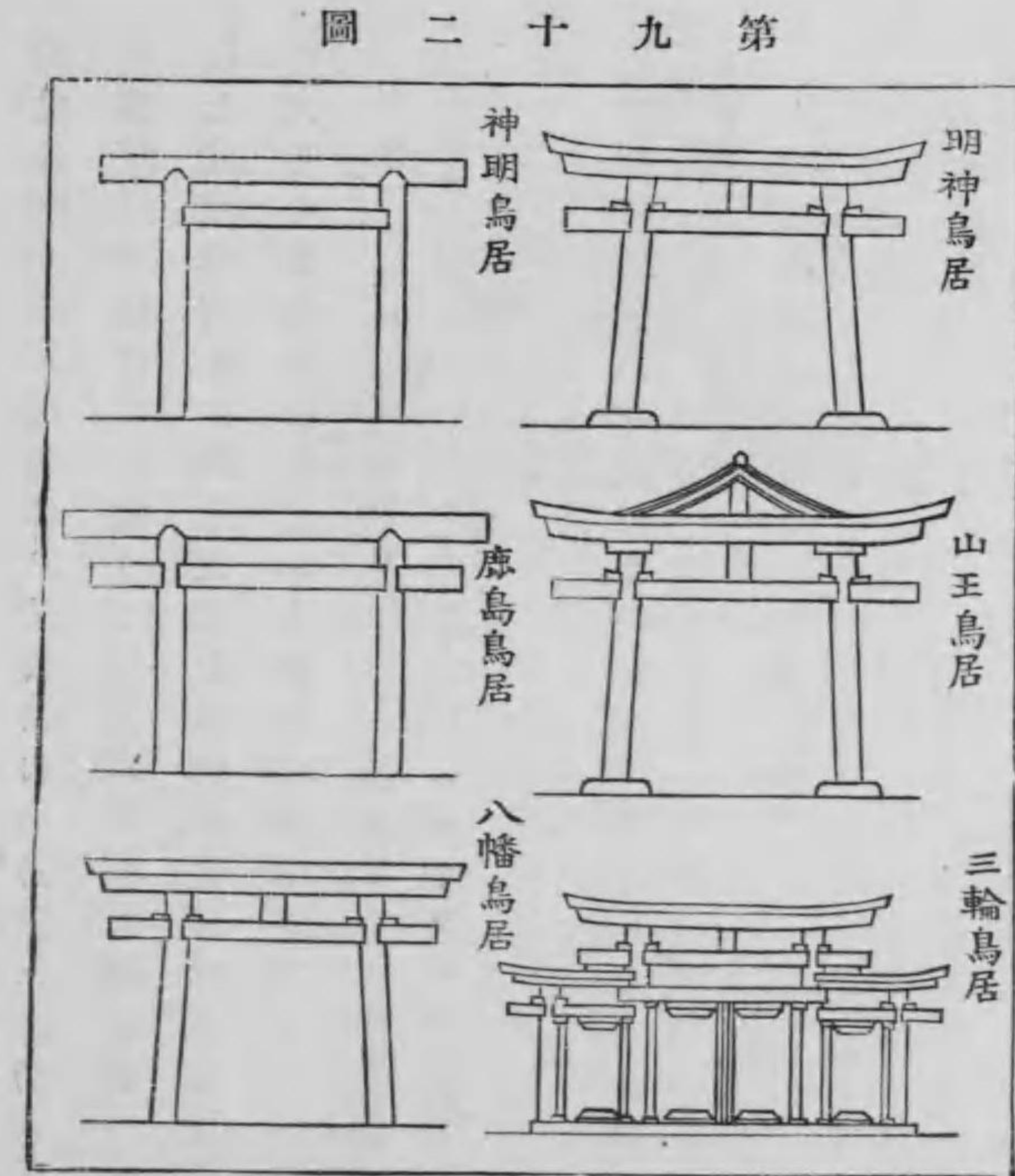
備考 八尋殿の八は彌の約にして唯だ重なり多きを云ふとは本居宣長翁の高説にして或は大なる形容詞ならんと云ふ人あり尋は人の兩手を伸たる長なり。

神社

此時代に於ける神社の今に残存するものなしと雖も其當時を想像し得べきものの四種あり。

- (イ) 神籬及磯城
- (ロ) 大社造
- (ハ) 大鳥造
- (ニ) 住吉造
- (ホ) 神明造

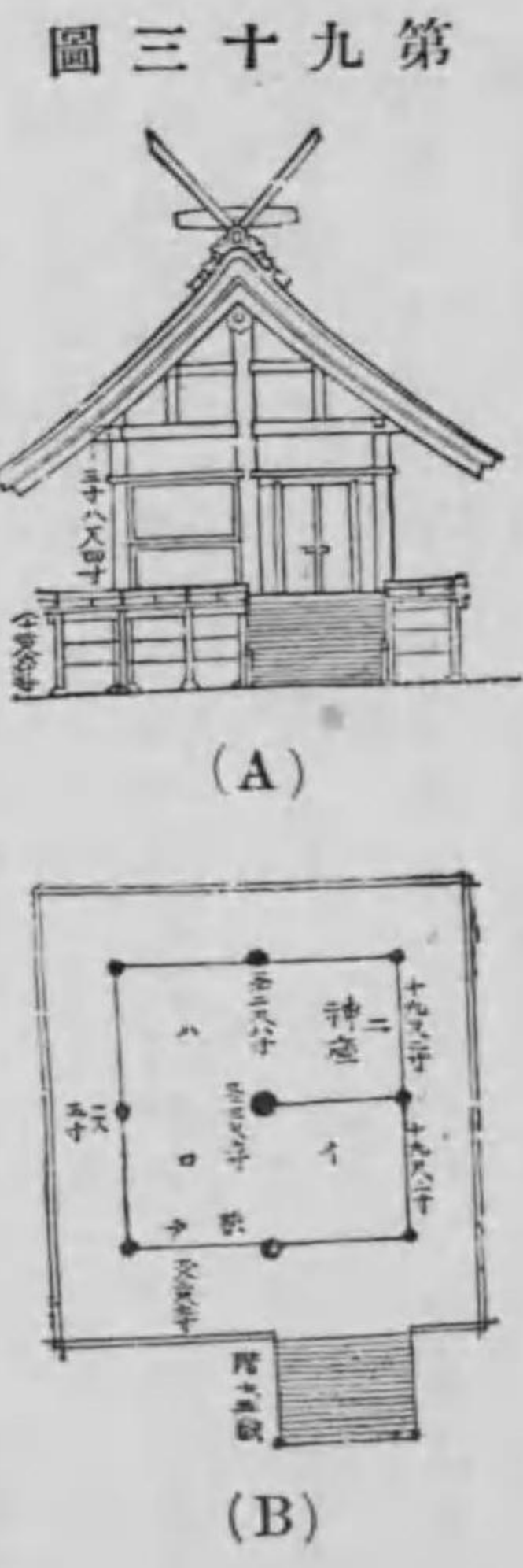
(イ) 神籬及磯城



太古は神の爲め社殿なく清淨なる地を選びて丘を築き神籬(生諸樹の「オ」を省けるもの)即ち樹林を造り祭祀の式場は石を以て境域を區劃し之れを磯城と名付け又は磯城を築き神籬を其中に植へて祭場とせし事あり大和の三輪神社の如き現今に於ても鳥居と拜殿を存するのみなり。

(ロ) 大社造

崇神の朝社殿を造るに至りても尙皇居其儘を移し別に神社宮殿の別なかりしなり出雲の大社は其最古の様を存せる適例にして天地根源宮造より進化して大成せる最初の様式なり天孫瓊々杵尊が大國主命を祭るが爲めに建立せるものと稱し大和の三輪神社に次で我國最古の建築と云ふ此宮は六十年毎に改築せられ多少形式には變化を來せしならんも其平面の如きは古制を存して屏及び神體の位置より見るに最も住居的なりと云ふべし第九十三圖(B)は住家と比較するに殆んど一致



し居りて(イ)は玄關(ロ)は客間(ハ)は居間(ニ)は奥の間と云ふ趣あり又此大社に類するものに同國八東郡神魂神社あり其平面は大社に酷似し二間四方にして眞の

御柱あり、唯規模の小なると内部の界壁が心柱より左方に在るとの相違あるのみ。

備考 出雲の大社正殿の平正面は方形にして四周皆二間なり中央には太柱ありてこれを「心の柱」と云ふ其前後には之れに次で太き柱あり之をうづ柱と稱し其外は何れも通常の柱なり按ずるに中央の柱は後世の所謂大黒柱なるべし。

(ハ) 大鳥造

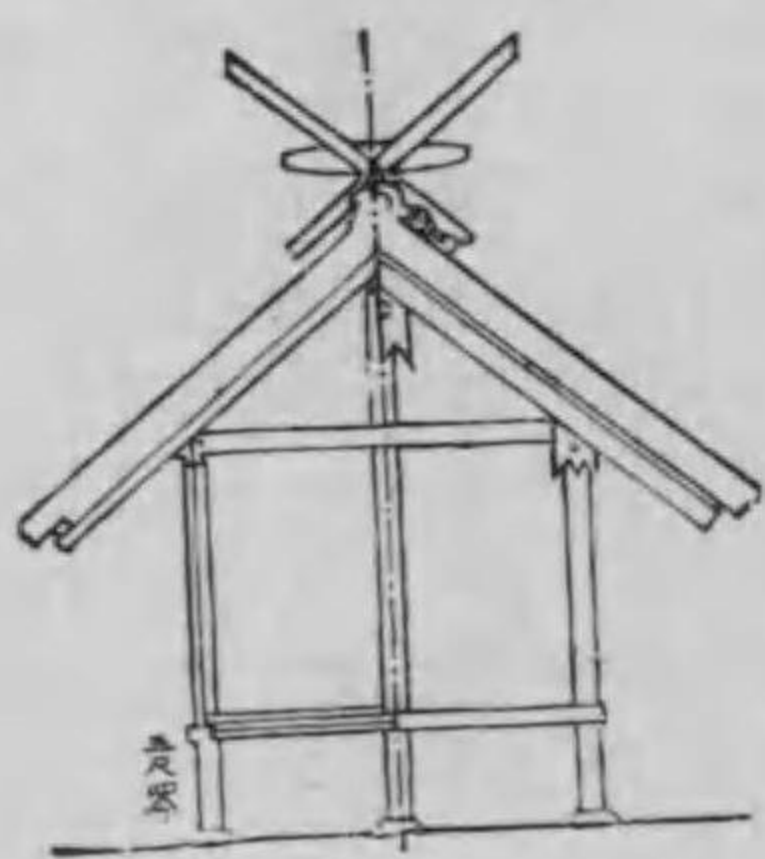
大社造より一轉せるものにして其のプランは外形に於て殆んど全く大社造と相違なく唯大鳥造は前面一間なるのみ。即ち最古の住家的性質より進化して稍儀式的性質となれるものと認むるを得べく周圍に椽を回らざるも亦古式なり。内部には心柱なく中央に横に界壁を通じて内外陣を區別し内陣を神座とせり。立面は入口の右方に偏せずして中央に位せる外は全部大社造に同じ。和泉國大鳥神社の神殿に其の適例を見るを以て大鳥造の名あり。

(ニ) 住吉造

大鳥造りの更に變化したるものにして攝津の住吉神社本殿に於て觀るを得べ

く此建築も舊時廿一年目に改築せられ多少の變化を來せしならんも古式を存するは明かにして椽を設けず大體の平面圖は第九十四圖(B)に示せる如く大鳥造の内外兩陣前後に其深さを増し各二楹となりたるの形にして正

圖四十九第



(A)



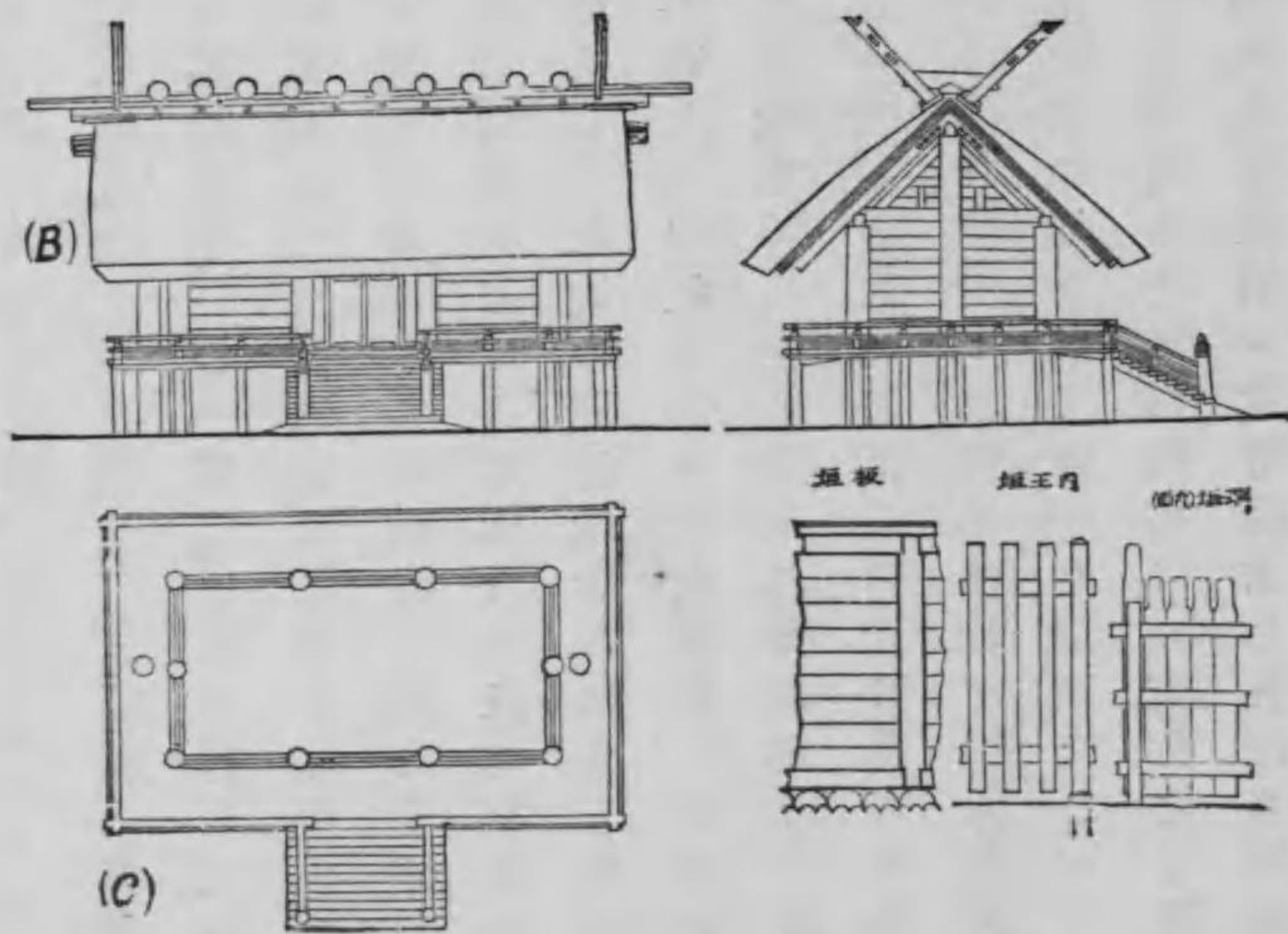
(B)

面二間側面四間なり又第九十四圖(A)の如く破風軒及屋根も直線形にして千木の勾配急に勝男木は五本にして斷面方形なり。

(ホ) 神明造

垂仁天皇は皇女倭姫に命じて伊勢の内宮を建て神鏡を奉じ又日本武尊は神劍を尾張に止められ爰に熱田神宮を創建し雄略天皇の朝に丹波の豊受大神を伊勢の度會に遷して外宮を造られしが此等は何れも所謂神明造りなりしなり而

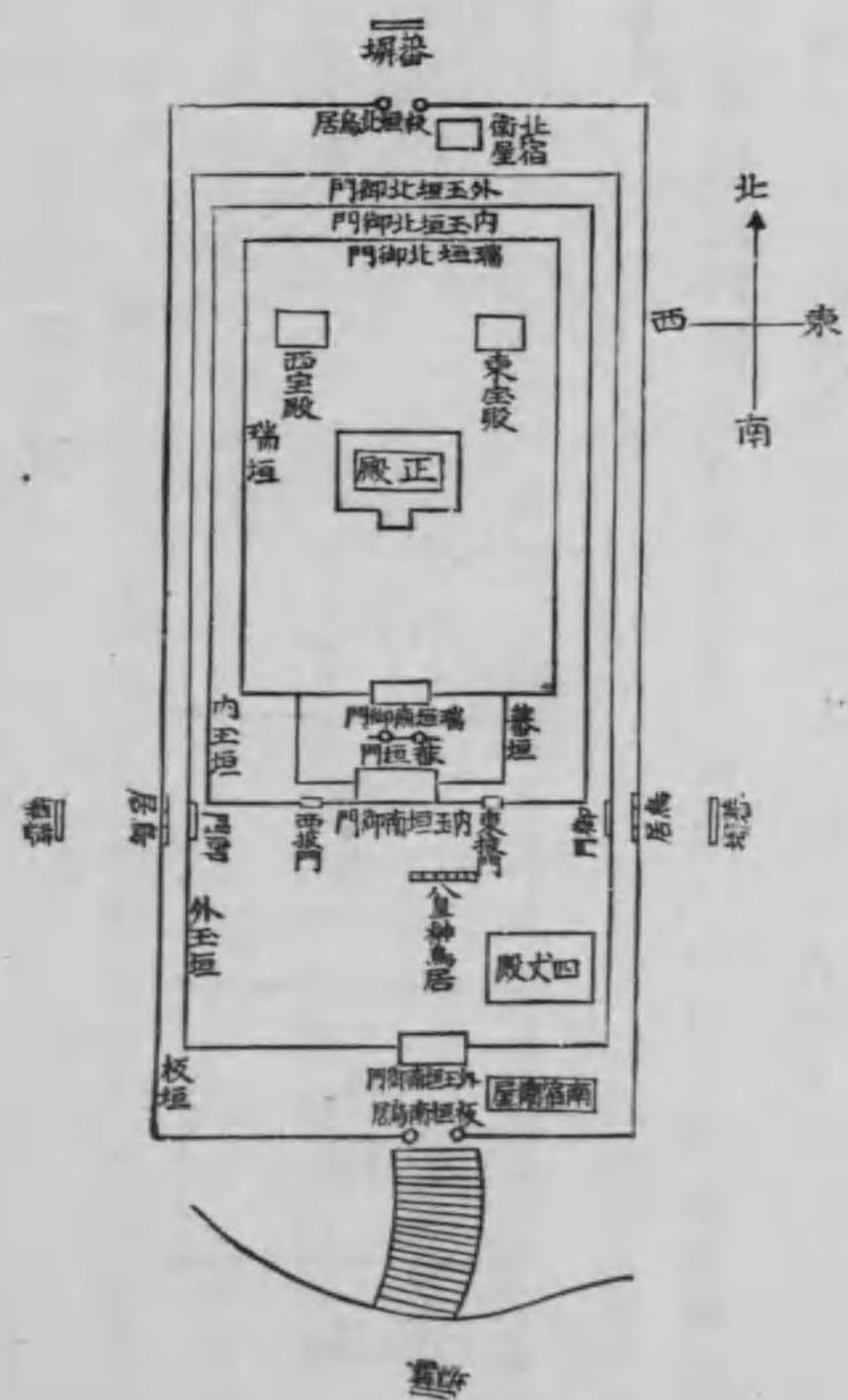
神明造  
伊勢内宮



第九十六圖

らし鳥居を四方に建て其前に藩塀と云ひて目隠し様の短かき塀を設け尙外玉垣門内右手に四丈殿と稱するものあり此外雑舎の離れて散在せるもの多し今此配置を熟覽するに後世に於ける神社の如く本殿の前に祝祠殿幣殿拜殿の類を置くことなく唯幾重にも垣を繞らし森嚴雄大の風を爲せり此建築物の中に正殿は最完備せるを以て神明造の標本として説明せんに正殿の平面は

第九十五圖



に門ありて其外に内玉垣と外玉垣と稱する二重の玉垣あり又其外に板垣を繞

して其形式は今日の伊勢大神宮を以て推すべく大社造の如き住家的の風を脱し全體の考按儀式的となり森嚴なる外觀を保つに至れり伊勢兩宮の建築は天武の朝以來二十年毎に改築せられしも大體に於て古式を存す而して其構造を論ずるに當りて外宮は内宮と殆んど同一なるを以て之れを略す。

内宮は第九十五圖に示せる配置にして先づ中央に神座の設ある正殿を置き其後に東西寶殿あり之れを繞れる瑞籬には南北

第九十六圖(c)の如く三間二面なり。

備考 三間二面とは正面三間にて側面二間なるを云ふ。

而して其正面中央の一間には扉を付し入口とし其他は凡て板壁にして周圍に椽及び高欄あり又前階段には登り高欄あれども何れも創建當時のものには非るべく左右切妻にして棟持柱を建て千木は下より茅葺屋根の上に突出す。此建築の要點を擧げんに大社造及び往古造の如く妻より入らずして平より入り神社として尊嚴の風を増せるにあり又棟持柱は古代の構造法の幼稚なる所を示し若し此の柱なかりせば突出したる棟を支ふる能はざりしなるべく又凡ての柱及椽束等に至る迄何れも底部より上るに従つて漸次細小となり頭部にては凡一割減となる是即ち古代に於て天然木を使用せる證據なるべく又千木は屋内より突出せしめ拜マヅメの所にて二本面を一樣となさず段違となしたるは古代丸木を重ね繩を以て縛せし遺風なるべく又鞭掛け或は「オサゴマヒ」と云ふは小舞の痕跡なりと云ひ内部には天井なく屋根裏を表すも古風なり。又寶殿其他も正殿と式を同ふし板垣も堀立柱にして何れも古式を存す斯の如

き純正なる様式は伊勢兩宮にて用ひらるゝものにして特に唯一神明造と名く、熱田神宮は略これに等し。その他破格なる神明造は隨所に多し。

#### 神明造の變態

今日神明造と稱するものは伊勢の構造に後世の手法を加へ變化したるものにして九段坂上靖國神社の本殿芝神明の本殿の如き其一例なり而して現今にては左の條件を備ふるものは一括して神明造とは云ふなり。

一屋根の上に千木勝男木あり棟は覆木を冠し一種の特色を爲し全體白木造りにして床高く正面に階段あり。

一屋根は直線形にして茅、檜皮、銅板、柿等を以て葺き瓦を用ひず。

一必ず切妻平入造りにして妻に懸魚を附さず妻飾其他の各部に多く曲線形を用ひず。

一斗組マシクミを用ひず。

故に古來我國の工匠は純正の神明造りを唯一神明造と云ひ變態を普通に神明造りと稱す。

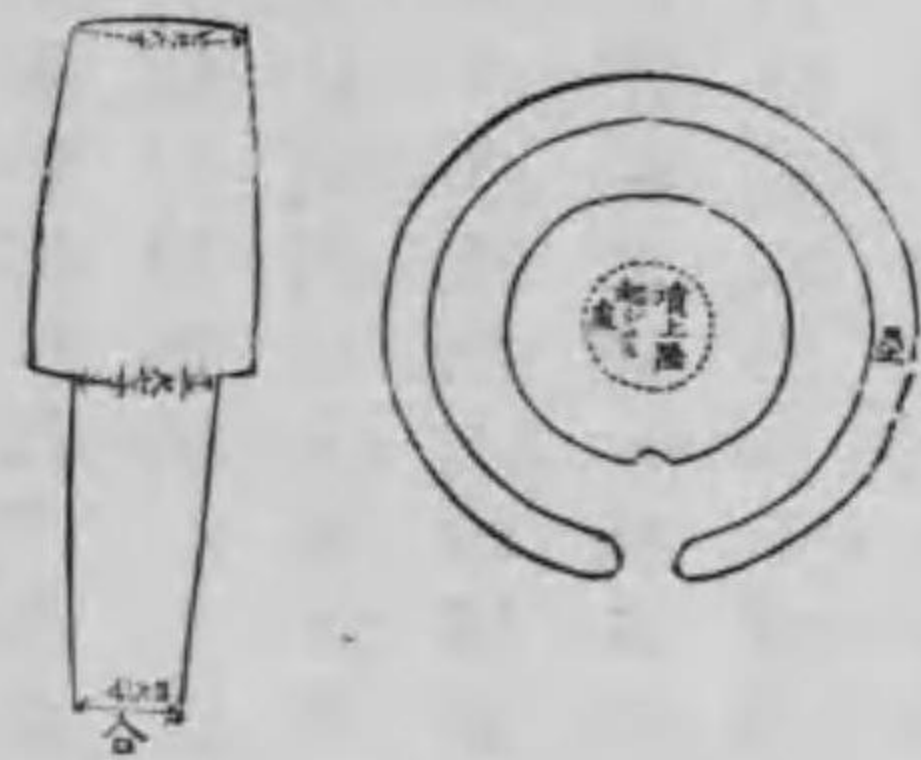


右は伊東博士の日本神社建築の發達と云ふ論說に依る明細は建築雜誌第百六十九號  
參照。

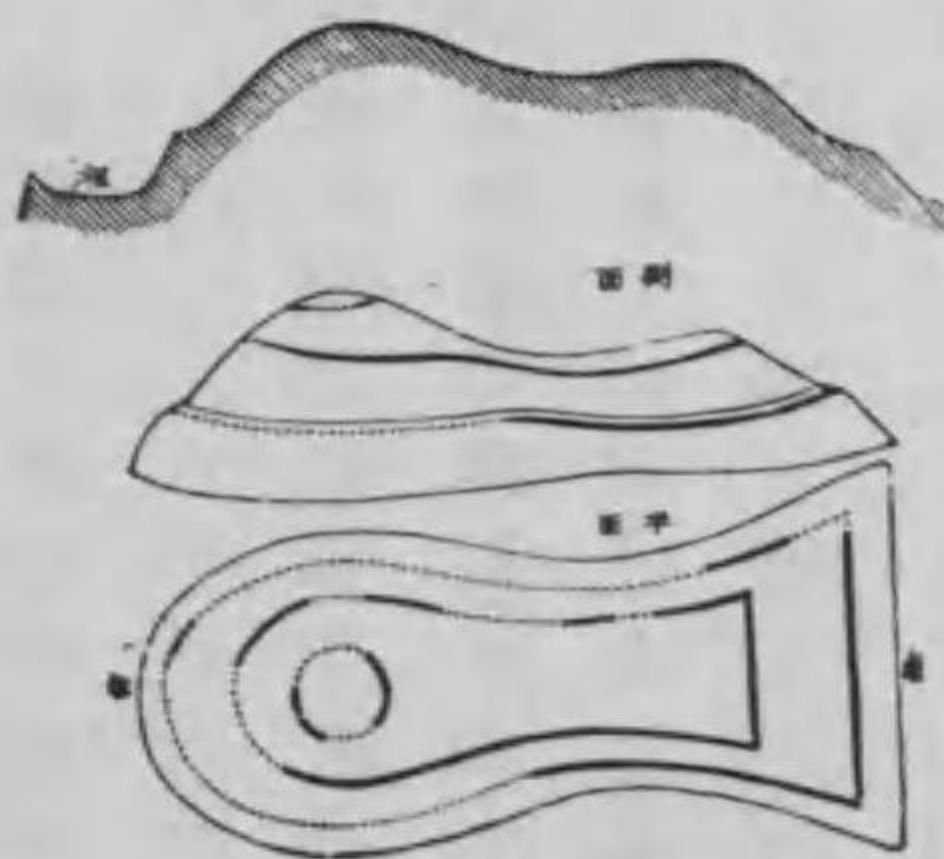
墳墓

諸冊二尊の開國より孝元帝に至るまでの墳墓は多く山嶺に設け次て人工の山  
を築き單に不規則の大石を以て外柵を造り石棺なく形は圓形にして遺物の種  
類は三様に過ぎざりしが垂仁帝前後にいたり其の制完備したるが如く石棺の

圓形墳墓



第九十七圖  
瓢形墳墓



第九十八圖

いたり大和民族は海外と交通して氣質雄大となり墓制も隨つて擴大せられ概  
あり應神仁徳の朝に

ね山麓に築き周圍に外濠を設けたり芝圓山マリスに於ける墳墓も一例なり築紫國造  
盤井の如きは墳の高さ七尺周り六尺に造り墓田は南北各六百尺東西各四百尺  
中に石人石盾六十枚石猪四頭石馬三匹石殿三間石藏二間ありて其の石垣及び  
門等は悉く石材を鑿りて造れりと云ふ實に彫刻の進歩見るべきものありしな  
り。

備考 孝徳の朝墳墓の大にして庶民の辛苦するを慮り墓制縮小の勅あり又天武の朝  
石棺を廢するの勅ありしを考ふれば一般に高大なる墳墓を築きしが住家は粗造にし  
て到底石棺と其發達を同ふせざりしは恰かも埃及に於けるメンフィス時代と等しき  
も亦奇と云ふべく又アッシリア、印度、支那、朝鮮等には土を盛りて丘を造り墓表を建て  
ざるの例多きも亦一考の値あらんか。

圓形墳墓の完全なる形體は第九十七圖の如く瓢形前方後圓なるものは第九十  
八圖の如くにして其の周圍の土留に用ひられたる埴輪は第九十九圖の如く種  
種の形體ありて其他殉死に換へて用ひられたる大小の土偶あり又石柵の完全  
なるは瓢形古墳に屬する大和の國高市郡文珠院に存するものにして第百圖に  
示せる如く天井は一枚石を用ひ内部には美麗なる工を施し天井は殊に精巧な

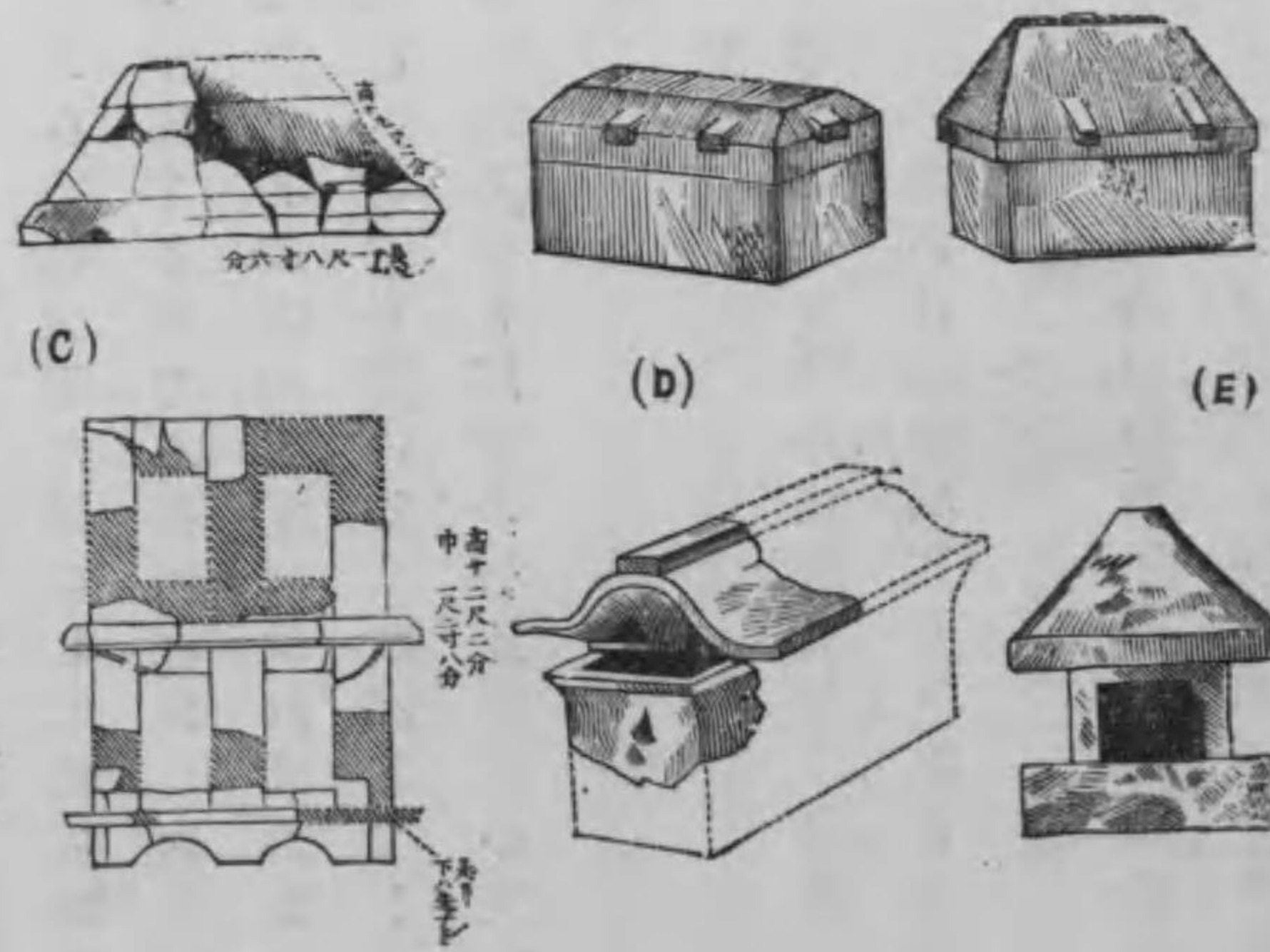
第九十九圖



第一百圖



第一百一圖



る細工を施せりと云ふ。  
 又石棺、陶棺の類には家屋の外形をなしたるものあり、第一百一圖(A)の如きは能く古代の家屋を模したるものなるべく、陶棺の類には二行十本乃至二十本若くは二行十五本乃至二十一本足を設けたる當時に於ける柱立を示せるものにして更に第一百一圖(C)の如き二階屋に似たるものを發見せるは奇と云ふべく、特に洋式の窓に似たるものを設け、後世の如く明を全體に取るの式と趣を異にせるも此の時代に於ける民族は柱を建て家の四方は藁を葎ワシメの如く編みて掩へるが多かりしものならんとは八木氏の高説なり、又(D)の如きは特種の形體にして本邦の制に非らず、(E)は播磨に於ける石の寶殿を立て直せし圖なり。

備考 第一百一圖(A)は豊前國京都郡黒田村の石棺にして(B)は大和國高市郡阿部村の石棺なり、又(C)は備前國磐梨郡の陶棺にして(E)なる石の寶殿は今も不明に屬し、或は石棺なりと云ひ、或は壽藏なりと云ひ、口碑に従て海外より來りし少彦名スナヒコナの命の大國主の命を補けて此寶殿を作成なせしとせば必ずや海外の遺風を加味せるものなるべく、寶殿の存在地は硬軟の中和を得たる石英粗面岩酸性質の火山岩にして切採施工容易なるを以て太古に於ても已に之れを彫刻して應用するに至りしものならん。

右は八木裝三郎氏日本考古學其他に依る。

一九二

#### 横穴

横穴は葬坑なりと云ひ或は穴居の跡なりと云ひ或は穴居の跡にして後ち葬坑に用ひられたりと云ひ考古學者中未だ議論一定する所なし其所在地は白色粘砂岩を多しとし赤土の場所は僅少なり而して考古學者の推定に依れば舊きは推古帝前後にして奥に一段高く床を設け或は天井を月形の如く圓形となし最精巧なるものに至りては殆んど家屋の形狀に造ること印度の石窟殿堂の規模を縮少せるが如き感ありと云ふ。

#### (4) 飛鳥時代

我邦佛教渡來の頃より大化革新の頃に至る間の建築は、我邦建築史上に嶄然一機軸を出したるものにして、全く他の時代と其の形式手法を異にせり、之を便宜上飛鳥時代の建築と稱す。

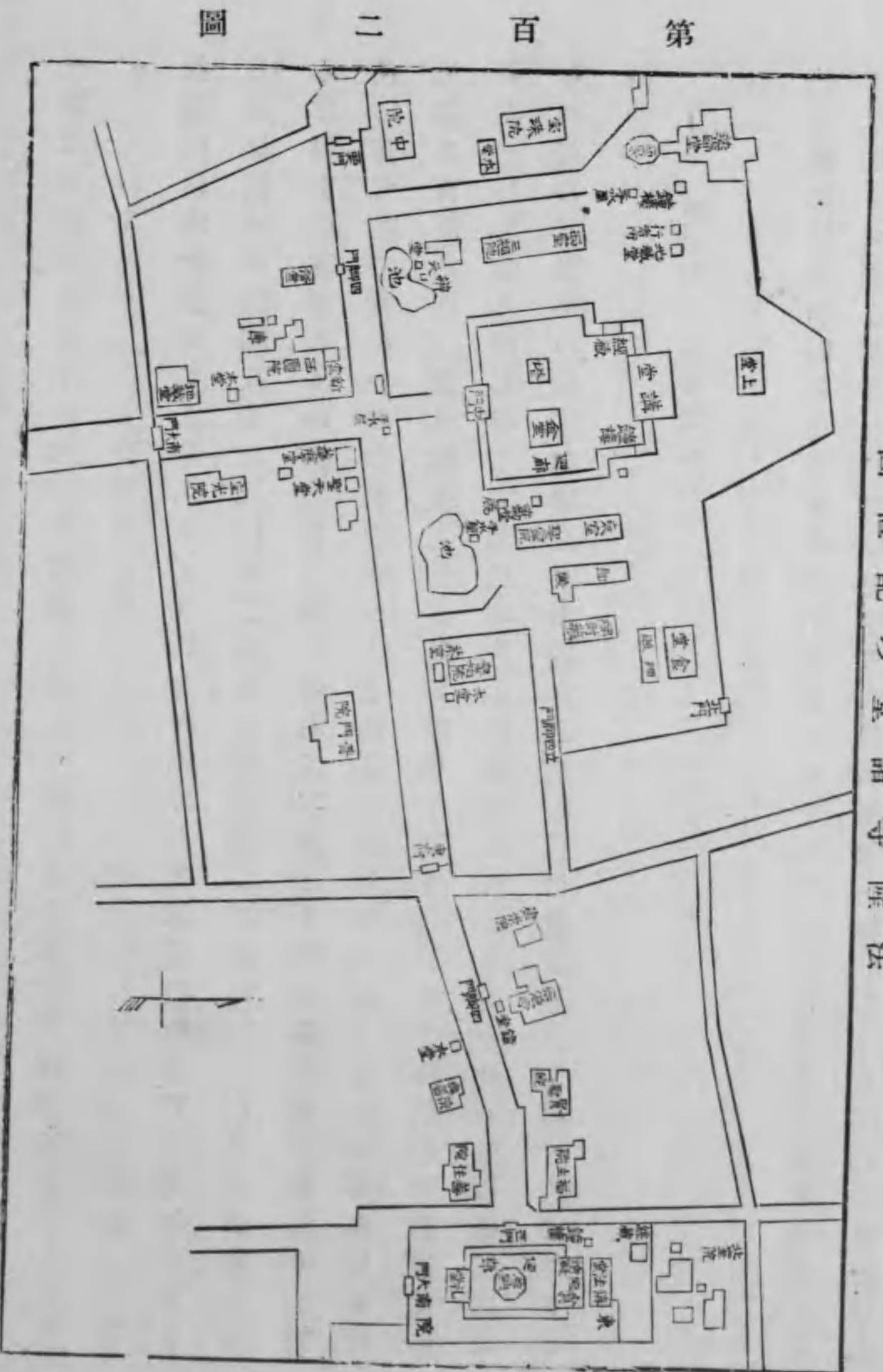
佛教の我國に傳來せるは欽明天皇十三年冬十月に百濟の聖明王釋迦金銅の像一軀、幡蓋、經論等を獻ぜるを以て始めとす是れより先き繼體の朝司馬達等の歸

化して佛教を持ち來る之れを佛匠の祖とす然れども佛教は韓國の神として信ずるものなかりしなり又佛教百濟より傳來せし時も崇佛排佛の二派ありて蘇我稻目自宅を改築して寺となす之れを向原寺と云ふ其後敏達天皇七年百濟より法華經、律師、禪師、比丘尼、咒師、寺工、佛工を獻ず依つて難波の大別皇寺に置く日本宮殿を改造せるものに過ぎざりしならん又敏達十四年蘇我馬子佛塔を大野丘に建て其の柱の先に舍利を挟みしと云ふ又崇峻元年厩戸皇子法興寺(元興寺)を造る百濟の寺工、鑪盤師、畫工、造瓦師等歸化す斯くして七堂伽藍の大規模茲に大成せしもの、如し而して飛鳥時代の建築は三韓より傳來せる儘の建築式にして概して支那の様式を帯び其の繪畫彫刻等には健馱羅式を帯びたるものあり。

備考 印度及支那建築史參照

#### 宮殿

此時代には神統時代よりも皇居の制漸く大となり皇極の飛鳥板蓋の宮には唐制に模し朝堂、大極殿、十二門等を造り古代の風を一變せしも凡て白木造りにし



第二百二圖

て茅或は板葺なりければ遷都の習あるも困難ならざりしものゝ如し。  
寺院

推古の朝勅命ありしより四天王寺、法隆寺、法起寺、法輪寺、橘寺、大安寺、廣隆寺、中宮寺、等建立せられ、四天王寺は攝津、廣隆寺は山城の外皆大和にあり、佛教は勃如として隆盛に越きたり而して當時代の伽藍は俗に之を百濟様七堂伽藍と稱し、次期の唐様七堂伽藍と之を區別せり。七堂伽藍は必ずしも七宇の堂を具備するの謂にあらず故に又悉堂伽藍と稱す。蓋し必要なる各種の堂塔門廊を具足するの謂なるが如し。其の境域は之を四至と云ひ、通例平地の上に適當なる直角形の地を劃し、壁を以て繞らし、正面を正南に置き、南大門を開き、他の三面亦各大門あり。此境内中央に別に直角形の一區を劃し、廻廊を以て圍み、中央に廣濶なる中庭を作る。中庭の裡には塔と金堂とを納る。塔と金堂とは左右に相並ぶあり、前後に踵くことあり。廻廊の正面中央に中門を設け、後面中央に講堂を建て、左右兩面に腋門を開く。講堂の後に東に鐘樓、西に鼓樓あり。これ等を主要なる堂宇とし、これを繞りて三面僧房を設く、別に食堂、浴室以下雜舍あり。斯くの如くにして伽藍の體

裁整備するもの即ち百濟様悉堂伽藍なりとす。然れども當時の建築物として現  
今迄保存せらるゝものは法隆寺の中門、塔婆、金堂、歩廊、法輪寺、三重塔婆、法起寺三  
重塔婆に過ぎず。今其の遺構に就て述べん。

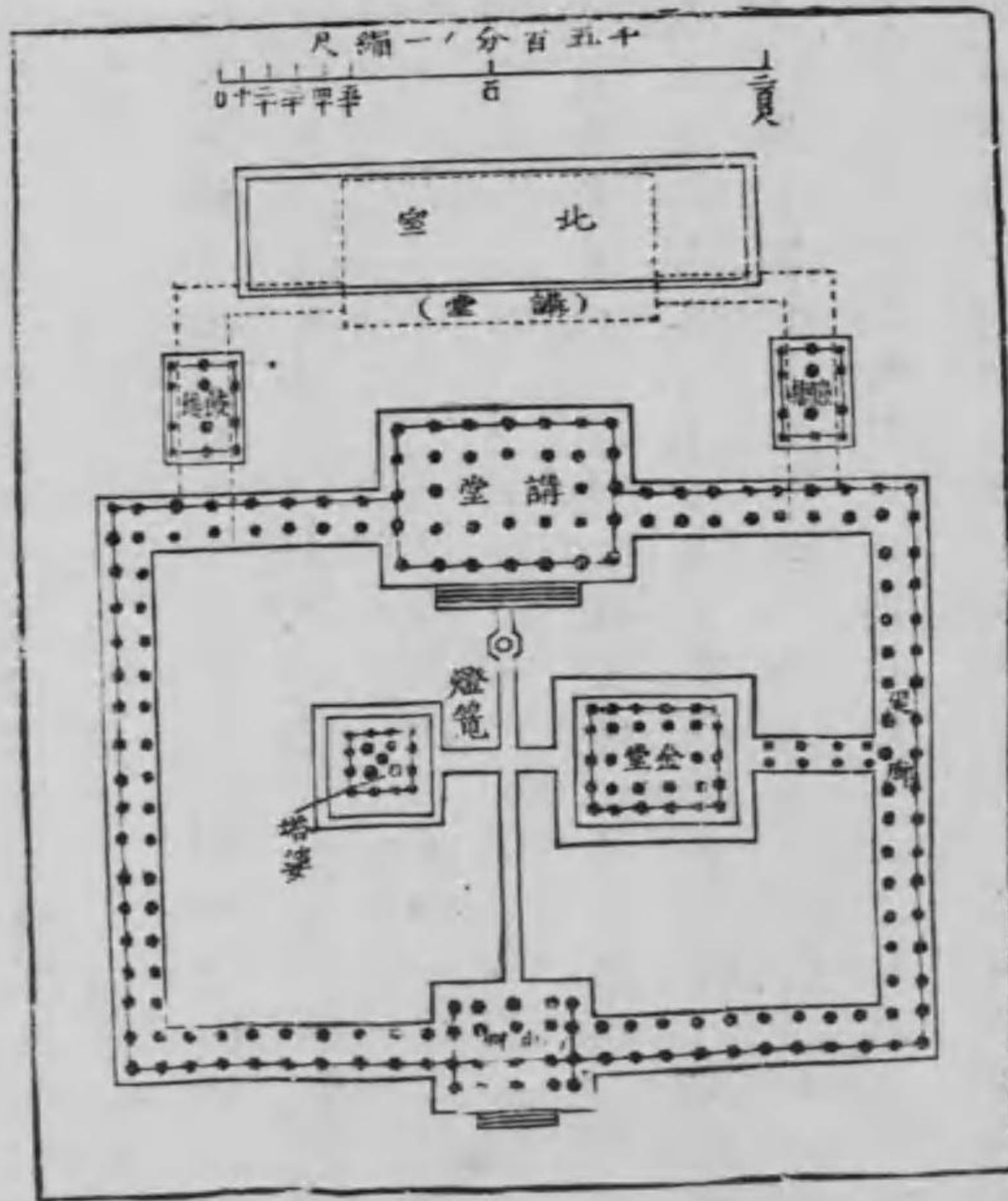
法隆寺

飛鳥建築の好模範たる法隆寺は寧樂生駒法隆寺村にありて所謂百濟様七堂伽  
藍なりしが延長三年講堂北室共に焼失し、正暦二年講堂を舊北室の位置に再建  
せるにより古式は變じて今日の配置となれり。而して現今に於ては第百二圖の  
如く東西に分れ西を西院東を東院と云ひ東院は天平十一年西院は推古十五年  
の創立にして七堂伽藍の規模を備ふ而して中門、金堂、五重塔、歩廊外の西院建築  
の年代は南大門(足利講堂、藤原鐘樓、經樓、天平)東室、西室、鎌倉(食堂、細殿、網封藏、天平)  
上御堂、西圓堂、鎌倉等なり。

各室の目的を擧げんに金堂は本尊を祭りて研究室に用ひられ東室西室は僧房  
塔は釋尊の舍利を納めたるもの又講堂は講義室にして經樓は圖書館、食堂は衆  
僧の會食室なりしものにして後世の寺院とは其趣を異にし全く一箇の學問所

なりしなり。

寧樂法隆寺平面圖



第百三圖

法隆寺建築に付て最注  
意すべき要點は左の如  
し。

- (一) 金堂と塔と並びて  
中門内に配置され  
たる事
- (二) 廻廊は後部にて曲  
り經樓鐵樓に連り  
次て講堂に至る事
- (一) は塔内に佛骨を藏め  
し爲め之れを尊みて金

堂と並べ置きたるに外ならず。

(二) は元來金堂と塔を繞りて廻廊ありて第百三圖伊東博士の想像圖の如く講堂

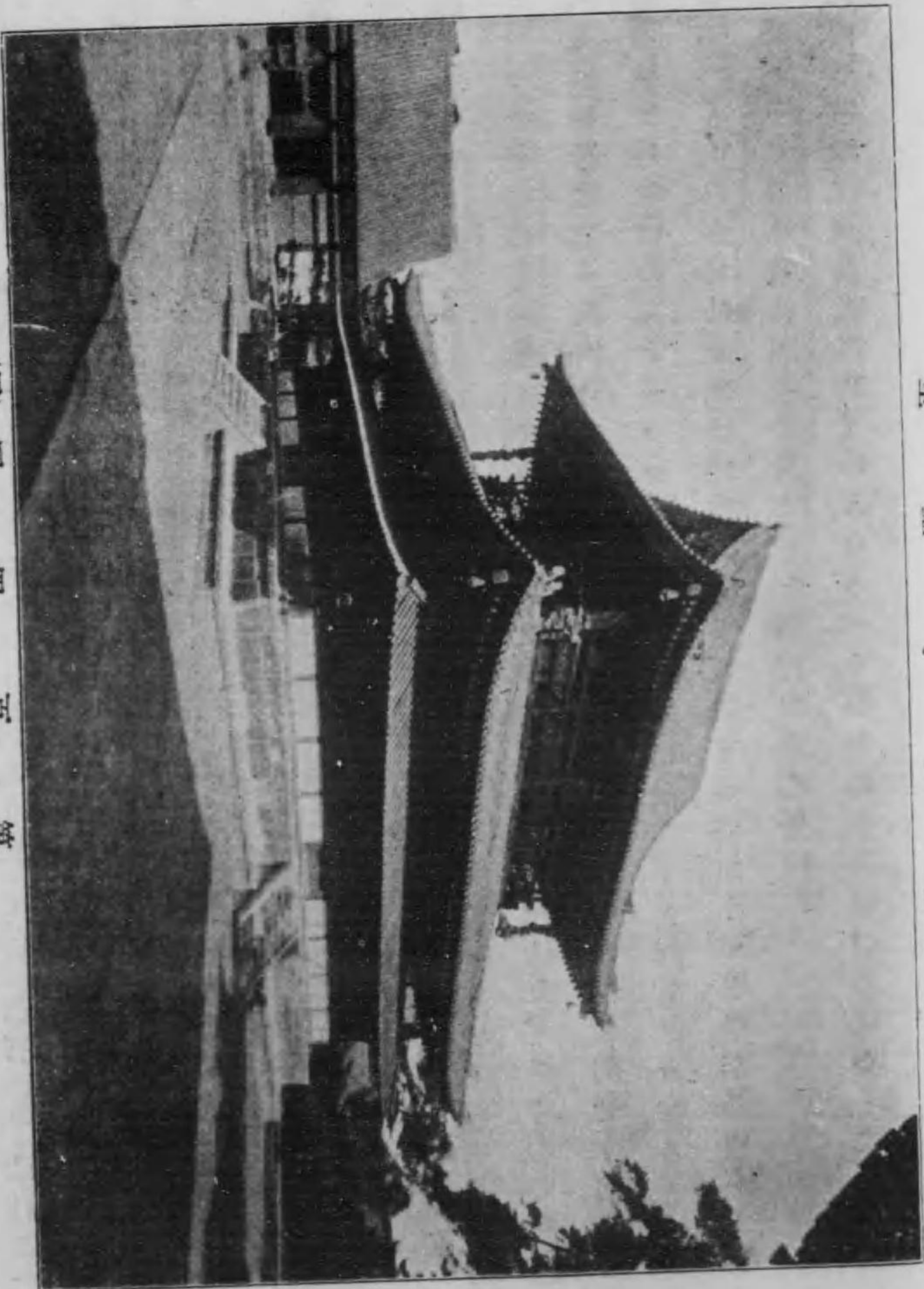
に連りしも偶々講堂の火災に罹りしより點線の如き今の位置に新築し廻廊を凸字形に連ぬるに至りしなり古圖に依りて觀察するに其配置は元興寺、大安寺、興福寺及び大内裏、八省院、大内裏豊樂院と酷似し宇治の鳳凰堂、唐の白馬寺、朝鮮の佛國寺等と相似たるは奇と云ふべし寺院建築は必ず此等の建築に深き因縁を有するを知るべきなり。

右は大體に於て帝國大學紀要伊東博士の法隆寺建築論に依る猶明細は該書に就て見るべし參考の古圖を悉皆掲載せり。

金堂

此堂は伽藍の最も重要な建築にして本尊を安置する所なり二重佛殿にして變化に富み屋根は入母屋造なり其勾配は上層に急にして下層に緩なるのみならず上層を輕快にし後世の如く屋蓋より成れるが如き感あらしめず猶ほ上層の柱は常に下層の柱の中間に居り上下を通じて柱の一直線内にあることなし故に細部の分布宜しきを得實に秀絶なる外觀を顯はせり(第四百四圖(甲)參照)階下平面圖は五間四面即ち桁行五間梁行四間にして其外に裳階あり又内陣は

法隆寺金堂



第四百四圖(甲) 東洋建築史 第十章

正面三間側面二間にして之れを繞りて入側あり又堂は凝灰石にて造れる二重の石臺上に在りて四方に石段あり内陣には佛壇又は須彌壇ありて其周圍に高欄あり裳階の四面の中央には入口あり又裳階の内なる金堂の正面には三間の入口ありて左右及び後面には各一間の入口あり。

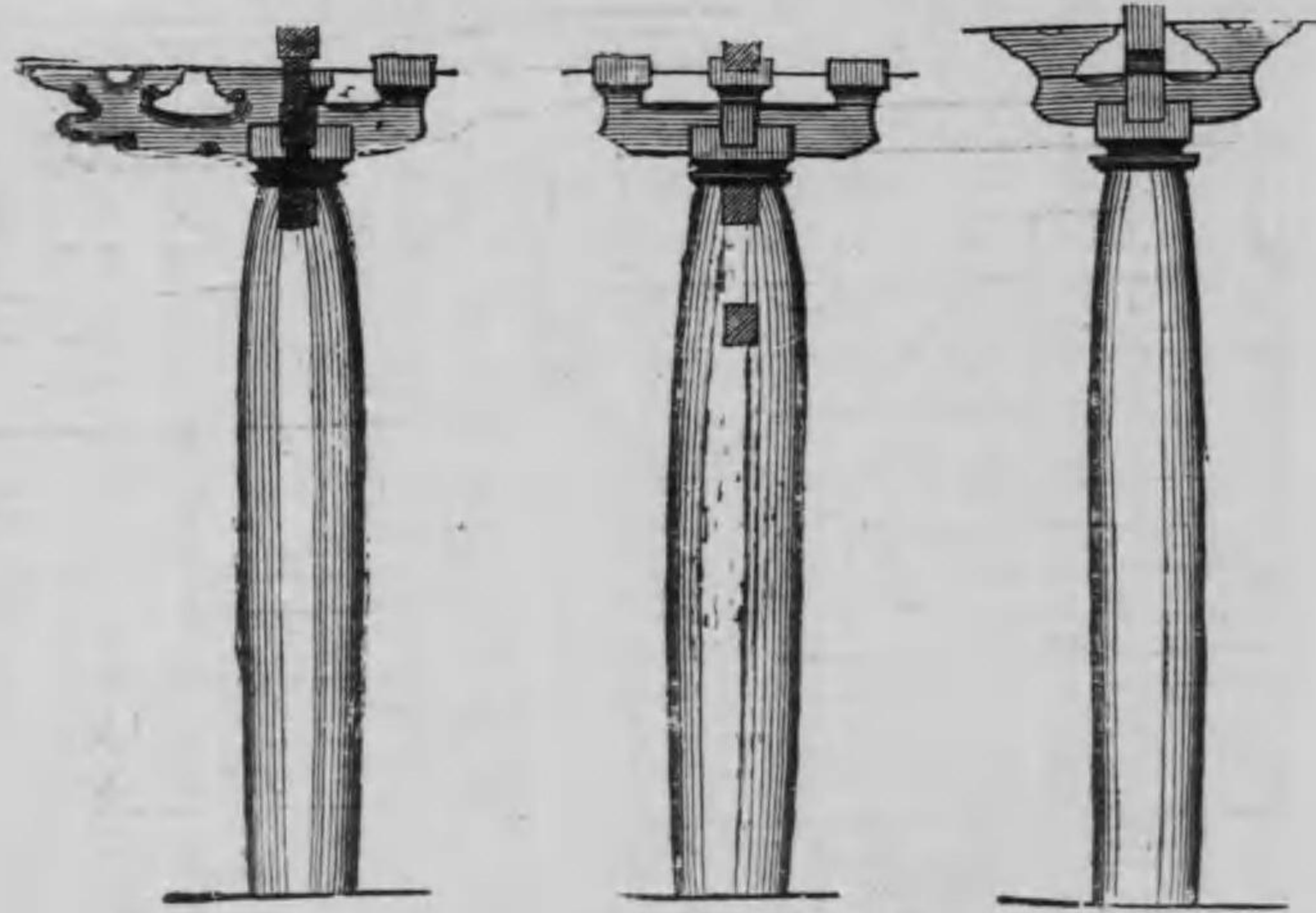
備考 裳階は建築後に加へられしものなり。

階上平面は桁行四間梁行三間にして普通の佛殿の如く下五間なれば上三間とするとは大に異れり。

柱は比較的太くして太斗下に皿板あり希臘式の如くエンタシス(脹み)を有しドリヤン範の如く礎盤なく直ちに臺上に立てり其直徑は上下異にして底部一尺九寸四分頭部一尺六寸なり此故に柱の輪廓は一種の曲線を爲せり而して上層の柱は外部にのみエンタシスを作り内部には毫も之れを設けざるも一奇と云ふべく夫れが爲め建物は内部に向て傾斜するが如く一層堅牢の感を與ふ此奇異なる結果は特に隅柱に於て著し(第百四圖乙參照)

此等の特徴は飛鳥式に於てのみ見るべく平安時代に至つては全くなし組物に

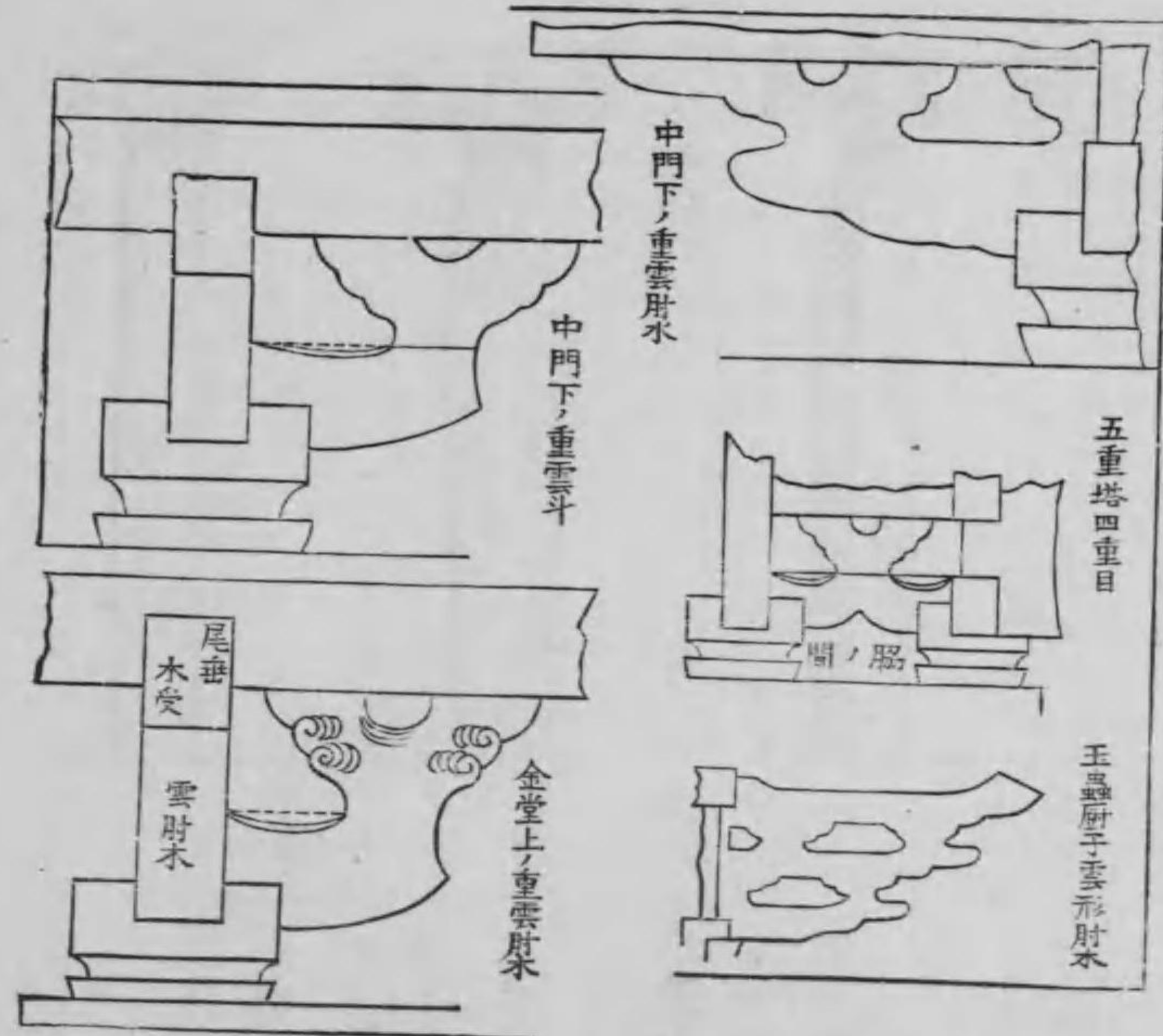
第百四圖 (乙) 圖



法隆寺金堂の柱

於ては第二卷に示せる三つ斗の方法を用ふるも大斗の形狀大ひに後世の者と異なり其線形は圓の一部に非らず其上に雲斗及び雲肘木あり此手法は飛鳥の特有と云ふべく其の形式優美にして無限の勢力あり(第百五圖參照)而して肘木の上に出し桁ありて尾垂木を受け又其の上に斗ありて丸桁を受く次で垂木を受け軒は一軒にして軒出多く反り少し(平安時代以後には斯る貴重なるものには必ず二軒を用ふ)又裏甲は後世のものにして此の時代には

第百五圖



法隆寺斗雲及雲肘木

二〇二

玉蟲厨子に至る迄凡て之れを用ひたる形跡なし。  
垂木割には一定の法則なく凡一尺九寸と見做すべく垂木は比較的太くして其鼻に反りなし内陣は折上組入天井にして組格太く間隔狭く支輪長く殆んど直線にして上部にて少しくバラボラ形に屈曲す。

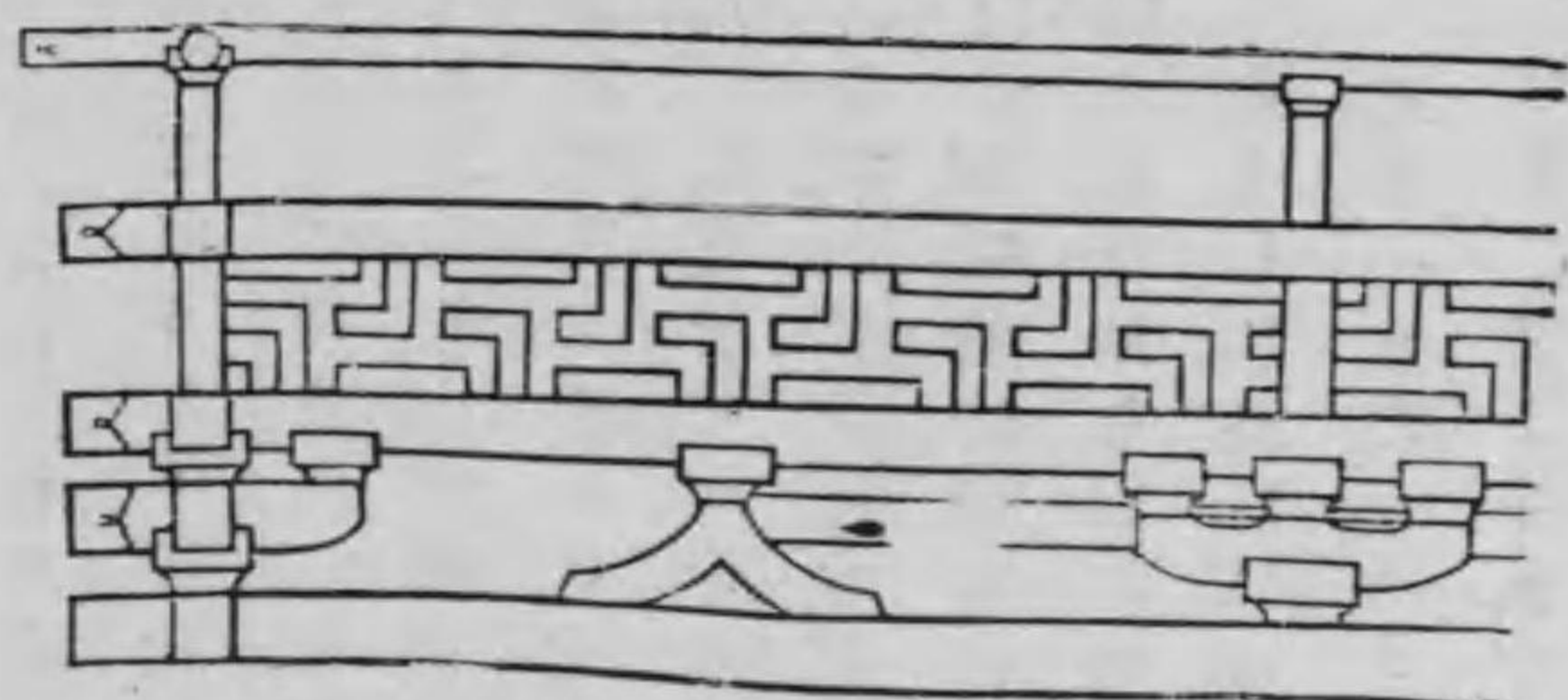
備考 寧樂時代の支輪は唐招提寺の講堂の如く全く直線となり平安時代の支輪は鳳凰堂の如く「」形となり後世に至りては第二巻に示すが如く龜の尾蛇骨の二類を生ぜり。

高欄は反りなく近代のもの大差あるのみならず其の組子の「」形なるは尤も奇とする所なり又地覆を支ふる三斗組物の中間に一種の異様なる手法を用ひたり東に非らず蟻股に非らず東の蟻股に變ぜんとする連鎖たり(第百六圖参照)法華堂三月堂の佛壇(天平期)にも此の「」形の組子あり妻飾は元祿の大修繕の際大に變更せしものならんとは學者間に唱ふる所にして墓股、大瓶、東、懸魚、及八葉共尋常の形狀に非ず。  
内部の壁畫は泰西のフレスコ畫に似たれとも其の方法相異なり中心には不規則なる下地を組み普通の方法に依て漸次に壁土を塗り最上層は薄く胡粉を以て塗抹し其表面には色彩を以て藥師淨土を畫き意匠の高尙筆力の雄麗なる他に比すべきなし。

備考 此壁畫の方法は古代の支那風なりと云ひ其模様には印度埃及希臘等の風を含めり明細は探本博士法隆寺建築裝飾論を見るべし建築雜誌(第九十四號)又第百七圖の



圖 六 百 第



欄 高 堂 金 寺 隆 法

圖 七 百 第



背 光 之 佛 寺 隆 法 藏 所 館 物 博 國 帝

如き佛の光背は明かに  
希臘忍冬模様を表はせ  
り此等の模様は支那を  
歴て輸入せる健駄羅式  
なるべし。

二〇四

五重塔

塔即ち塔婆は原と梵語  
のヌチユバより來るス  
チユバは墳墓の義にし  
て支那人之れに充つる  
に窰塔波蘇偷婆塔婆佛  
塔塔等の文字を以てせ  
り而して其の目的は靈  
域の標或は墓表として  
建てられたるものに外

ならずして其形狀は地水火風空なる五輪の意を示し往々七重九重乃至十三重  
に及ぶものあり或は三重二重乃至單層のものあるも皆五輪の變形として解釋  
するを得べきものとす。  
五重塔の平面は三間四方にして石臺の上に立ち四面に石段あり又裳階を設け  
ありて中央に中心柱あり又之れを繞りて四天柱ありて頂上迄貫通し九輪を支  
ふ本邦に於ける塔婆の最古式なるは此塔にして最新式なるは日光の塔なり而  
して同じく五重の塔なるに其全體の形狀に於て此の塔の秀美なるの理由如何  
と云ふに全く變化多きに原因す(第百八圖参照)  
即ち此の塔の屋根の出は五層と四層と大差なく三層と二層と大差なければども  
三層と四層との間及び一層と二層との間に著しき差を生じ其の形狀多少三重  
塔の性質を有し一層の高さ比較的に低く屋根の出多く反り少く愉快に左右  
に開き九輪の長さ最適當にして細部の手法も亦能く諧調を保つにあり然るに  
日光の塔は屋根の出一支落なる後世の手法に則る爲め各層の屋根は其の輪廓  
折線を爲さず一直線をなす。

柱、組物、エンタシス等皆金堂に同じく高欄も同様なれども、墓股なし又中心柱の

二〇六

第百八十八圖



法隆寺五重塔

周圍には岩山及び種々の人物を顯はしたる塑像あり其の精巧驚くべし内部天井は組入にして其の格間には花模様あり又外部は丹土塗にして連子窓の

み緑青塗なり。

中門(二王門)

正面四間側三間にして石臺上に立ち正面に階段あり其平面圖は異例にして正面中央に柱あり而して側面には普通正面の五間乃至七間に亘れる際にも二間に止り平面の形状狭長に失するを以て立面に美觀を與ふるの困難なるに此中門は三面なるが故に多々益々優美の形體を構成するの便益を得たり。

此門は重層にして上層は下層より狭く階下に二王を安置し組物、軒廻り、高欄凡て金堂に等しく漸輕快たるの感あり又屋根は入母屋造にして勾配比較的緩にして天井は組入格天井なり。

此中門は我國建築界に於て金堂、塔婆と相待て最古最良の好模範たる恰かもクラシック建築のバルテノン殿堂と對照すべきなり。

備考 法隆寺創立の年月は或は推古天皇元年と云ひ或は六年と云ふ。其竣成は同天皇の十五年なり。國史に據れば天智天皇九年四月壬申の夜火災に罹り一屋餘す所なし故に現今の建築は其の後の再建ならざるべからずと主張するものあり。然れども建築學上その堂塔が飛鳥時代の様式なるを以て觀れば創立以來未だ火災に罹らざるものと認むべき理由あり。これ再建非再建の説の分るゝ所なりしが關野博士は尺度研究により法隆寺の建築が大化以後の唐尺にあらずして大化以前の高麗尺なることを發見し

本問題は解決せられたりと主張し、平子尙氏は天智紀の誤謬なるを喝破し非再建に應援せり之に對して斷案を下すは至難の事に屬するも建築物が飛鳥時代の様式を存するの事實に對しては疑を挟むものなし。

玉蟲厨子

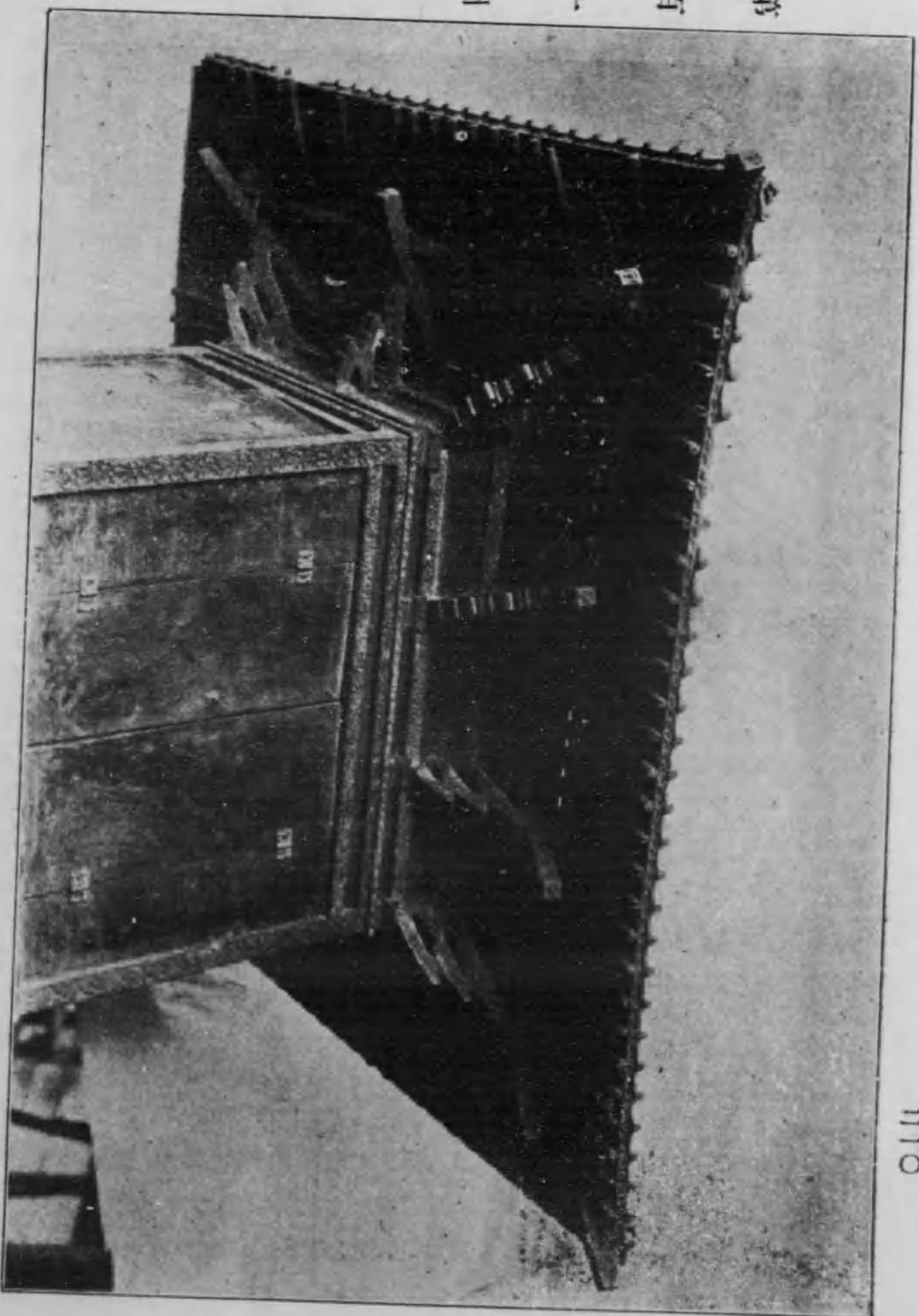
推古式唯一の工藝參考品として金堂内に安置せらるゝものは玉蟲厨子にして其の製作年代を詳にせざれども推古天皇の御厨子にして明かに同時代のものたり又玉蟲の名を帯びたるは玉蟲の羽を下に布き唐艸の透彫金具を以て之を蔽ひたるに原因すと云ふ。

備考 明治二十一年十二月小杉樞郎氏は金具の間に玉蟲の羽の遺存せるを發見したりと云ふ今は皆剝脱せり。

其形體は第百九圖に示す如く三部より成る即ち臺座、須彌座、宮殿にして其高は臺座の足より鴟尾上端迄七尺七寸なり又其中に金銅の彌陀三尊を安置す厨子の構造は金堂其他と手法を同ふし雲形肘木の如き四隅に於けるものは壁面と直角を爲さず之れと四十五度の角度を爲して對角線上に挺出し平に於けるものは少しく外方に向つて屏形に出て唯妻に於けるもの一個壁面と直角をなし

第 百 九 圖





玉蟲厨子屋根裏

其曲線の妙一種無量の趣味を有す(第百十圖参照)又屋根は一種の丸瓦を用ひ葺方は俗に行基葺或は鍔葺と稱し棟に金銅青銅に鍍金せる者(の鴟尾あり其形體は第二卷にあり飾金具の如きは凡て銅板にて唐艸模様を彫透しあり其手法恰かも東羅馬乃至アラビアの様式に類す蓋し印度支那及韓國等の建築史に於て記述せるが如く東羅馬及アラビア等の形式を混和せる薩珊式を傳來せる健馱羅式の支那に入りて六朝式となり轉して韓國に入り新羅を感化し遂に我國に入りて飛鳥式となりし證ならんか又須彌座の上下なる密陀漆を以て畫きし蓮花形の面上にはホニーサツクル(忍冬)の變形を印し臺座の平面も亦希臘式の唐草を畫き殊に其尾垂木の挺出する部分に於ける通肘木の表面に純然たる希臘式のホニーサツクルを見る豈東西交通の確證に非ずとせんや。

備考 金堂内に安置せる釋迦の三尊にも圓光及び寶冠共全く玉蟲厨子の模様と其趣を同ふし間々ホニーサツクルの變形を認むるは同時代の製作たるや明かなり而して此等は皆百濟人の手に成りしを思へば當時三韓の建築は如何に隆盛なりしかを想像し得べし。

法隆寺の外に飛鳥式の範例として法起法輪の二寺あれとも何れも頽廢して僅に三重

塔を殘すのみ故に其配置等を窺ふ能はざれども法隆寺と大差なかりしなるべく其塔の手法も雲形肘木エンタシス等を有す又大阪四天王寺は推古式に屬すれども現今存在のものは江戸時代文化九年の再建なりと云ふ而して塔と金堂の依置は法隆寺と異れども相並び塔の軒廻りは組物に非らずして雲龍の彫刻ある肘木を用ひ金堂の屋根は玉蟲厨子の如く行基葺なるは大に古式を存するものと云ふべし。

## 墳墓

墳墓は前時代と同様にして他に記すべきなし。

## (5) 寧樂時代

寧樂時代とは大化革新より平安の奠都に至るまで百八十餘年間を指せる名稱にして我國の建築史上最光輝ある時代なり當時代に於ては外國との往來頻繁なるに従ひ皇都の壯麗なるにあらざれば國威を宣揚するに足らざりして以て終に宏壯なる平城京の大都城を現出するに至り宮殿住宅の建築は之に伴ひ忽ち長足の進歩をなせり。

當代の神社建築は未だ多く大陸的手法を攝取するに至らず其末期に於て神社佛閣調和の萌芽を生じたれども其影響は次の平安時代に至り大に顯れしもの

の如し而して佛寺建築は其初め唐の制度に倣ひ其の様式を用ひたれども漸く我國民の趣味を反映し來り雄麗豊滿古今に冠絶するに至れり當代の伽藍は俗にこれを唐様伽藍と稱し好んで平地を撰み其の境域を限るに築垣を以てし前面に南大門を開き中門金堂講堂相次第して中軸線上に立つ、四面歩廊は常に中門の左右を起點として或は金堂の左右に達し或は更に其の後面を包容す、大小の僧房は講堂の東西北の三面に建てられ食堂は講堂の後に來ることあり或は一方に偏して立てらるゝことあり塔婆は飛鳥時代と異り伽藍の中心を離れて多くは金堂の前面東西に分ち立てられ或は一方に偏して唯一基のみを有することあり、此他金堂と講堂との間左右に鐘樓經藏を對立せしめ、或は東西の金堂東西若くは南北の圓堂を往々建立することあり、其他大小附屬の建物は後方隨所に置かるゝを常とす。

之れを三期に分てば左の如し。

## (a) 白鳳期(天智期)

## (b) 天平期(聖武期)

(c) 弘仁期(嵯峨期)

(a) 白鳳期(天智元年より聖武元年に至る八十一年間)

此時代は唐にて印度西域と親交を結び文學、工藝、美術等空前絶後の發展を爲せし時に當り我國よりも多くの留學生を送り又支那、朝鮮等の歸化僧もありて我文化を裨益したりしなり故に白鳳期の形式たる唐の様式を帶ぶると共に前時代(推古)の手法を含み以て新生面を開かんとし彼の圓熟整備せる天平期の前驅となりたるものなり。

此時代には佛教全國に普ねく寺院の建立せらるるもの夥しく藥師寺、川原寺、大官大寺は特に飛鳥三大寺と稱し其他に山田寺、崇福寺、厩坂寺、當麻寺、岡寺、壺坂寺等の大伽藍造營せられしも此等の堂宇は殆んど廢滅に歸し建造物として僅かに當期の遺式を存するものは大和西の京の藥師寺東塔のみにして模型としては海龍王寺五重塔あり又工藝品としては法隆寺金堂に存する橘夫人念持佛厨子あり。

藥師寺東塔

此寺は文武二年に落成を告げ大和高市郡(今飛鳥村大字木殿)にあり平城遷都後養老二年、新京即ち今の地に移されたりしが數々風火の災に罹り創立の儘殘存せるものは唯に東塔一基あるのみ。

今其構造を見るに三重にして毎層に裳階あり故に六重として見るを得べく毎層雄大なる組物を以て大膽に突出したる軒を受け又裳階は僅かに三斗組に過ぎざるを以て軒の出も亦少し夫れが爲め屋根の形狀は大小交互に伸縮し以て奇抜の輪廓を描き屋根の勾配は各層とも極めて緩なり實に此塔は他に比類なく甞に其形の奇なるのみならず九輪の長さ高巾等の權衡極めて完美なり(第一百十一圖參照)

細部の要點を挙げれば柱の礎石は法隆寺と異り其柱下を方形に高く造り出し又裳階側柱下地貫の來るべき所は其部を柱下同様高く作り出せり之れ前時代より一進歩せるなり又柱は底部大にして頸部に至るに従つて細く少しくエントランスを有す又組物は毎層三手先にして最早推古式の如く雲形肘木を用ひず普通の斗肘木を以て構造したれども肘木の下部の曲線に沿ふて薄き作り出

第百一十圖



藥師寺之東塔

しあるは關係あるを證すべく  
潤き軒天井を有せるは法隆寺  
のものに比して一段の進境を  
あらはすも當麻寺東西塔唐招  
寺金堂の者に對し其支輪及鬼  
斗の用法を知らざるが如き猶  
ほ多少手法の幼稚なるを觀る  
べし軒は飛鳥式にては一軒を  
常とせしに始めて飛椽を生じ  
て二軒となり一層雄麗となれ  
り又勾欄は全體の權衡高くし  
て架木平桁反りなく且つ其端  
を垂直に切りたるが如き斗東  
の撥形をなせるが如き皆此期

第百二十圖



の特徴なり又相輪は其長さ及形狀の最能く塔の權衡に適し水煙は三人の天人  
空中に翻り供養するの光景を顯はし第百十二圖の如く纏衣と雲とを作れるは  
實に我國の塔に  
古來用ひらるゝ  
簡單なる唐草模  
様とは月翫の差  
あるを認むるな  
り。

藥師寺相輪水煙

内部は折上組入  
天井にして支輪  
は直線狀にて斜  
に出でて格椽を  
受け手法簡古雄

大なり。

裝飾は外部丹塗にして垂木間軒天井間等は白土塗なり又内部は總て丹塗なれども天井格間には寶相花紋を畫き支輪間には寶相花及蓮花の唐草模様を交互に畫けり。

右は建築雜誌第二百號關野工學博士の論說に依る。

海龍王寺五重塔

此模型は大和添上郡法華寺村なる海龍王寺内西金堂にありて構造は大體に於て藥師寺の塔に類す。

橘夫人厨子

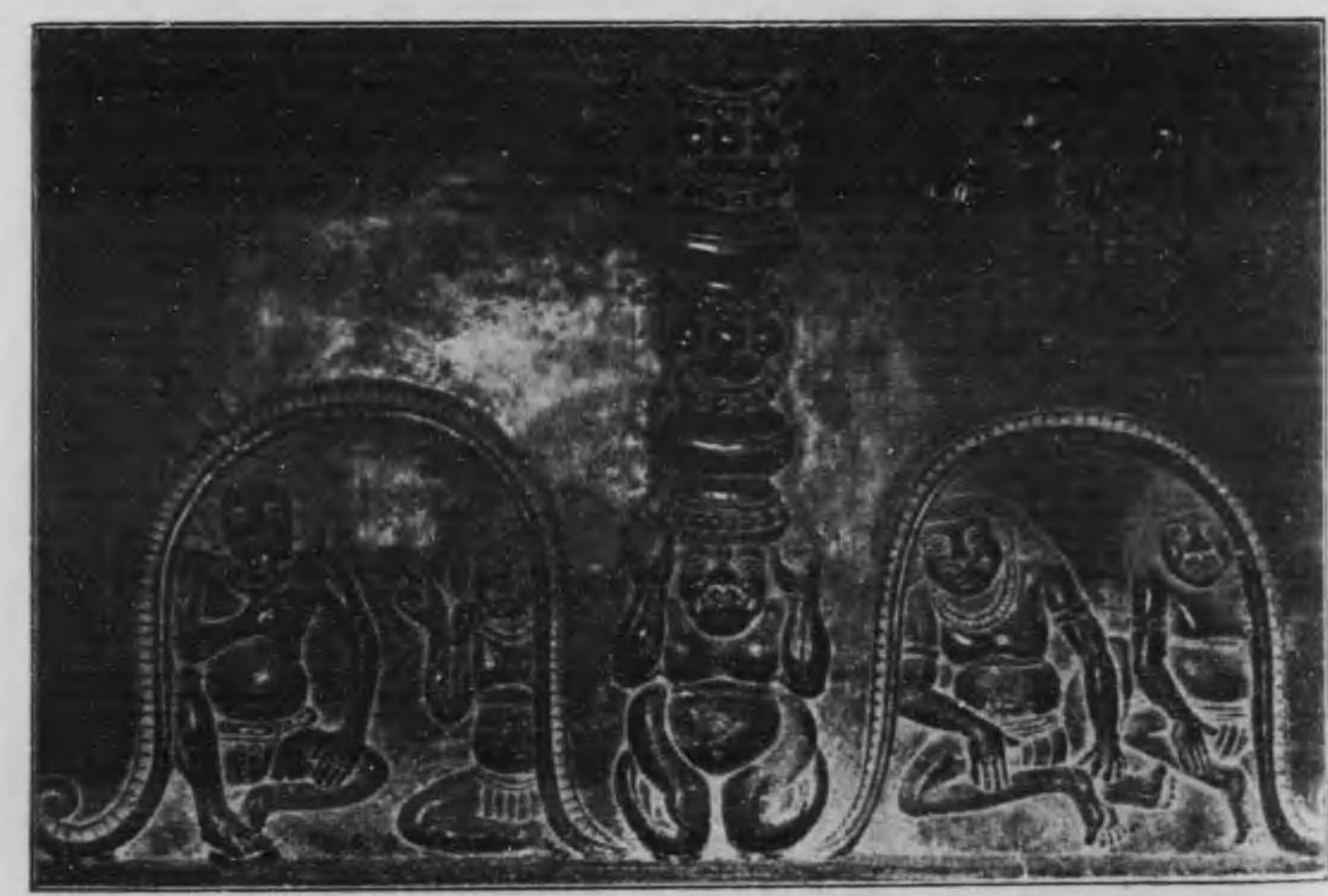
此厨子の年代詳ならざれども飛鳥天平二期の中間たる白鳳期に屬するものにして橘夫人は藤原不比等の妻なり厨子の形狀は大に玉蟲厨子に似て高さ須彌座と宮殿の二部より成り三尊佛は金銅の彫像にして皆半開の蓮花の上になり而して其蓮辨の上には明かなるホニ一サツクルの毛彫あり又本尊の後なる背光は中央の蓮花周圍の唐艸等は共に婉麗にして又其後に一種の障板ありて蓮天人等の模様は實に巧妙を極めたり。

第百三十圖



藥師寺三尊佛須彌壇葡萄模樣

第百四十圖



同須彌壇裸體人物

須彌座宮殿の各部には密陀漆を以て模様を畫き之れに色彩を施し其起原は印度西域及希臘なるを示せり而して特に歎賞すべきは須彌臺に於ける唐艸模様にし



て其葉幹等は葡萄の變形たるべく藥師寺の須彌壇に施せる葡萄唐艸の先驅を  
なすものと謂ふべく飛鳥時代の古拙を脱して優麗の趣を加へ一層の進化をな  
せるものなり(第百十三圖參照)

備考 第百十四圖の如く藥師寺の須彌壇に裸體の人物ありて其顔貌風俗熱帶地方の  
種族に似たり或は印度人種を模せるに非るなきか。

(b)天平期(聖武期)(元明平安遷都に始まり桓武  
延暦遷都に終る八十五年間)

此時代には佛教最隆盛にして凡ての工藝も發達し殆んど空前絶後の特色を發  
輝せり。

政教一致

聖武帝及び光明皇后は佛教の篤信者にして日本國中に國分寺と國分尼寺及び  
七重塔一區宛を造らしめ給ひ其上に總國分寺即ち東大寺を建てしめ其中へ盧  
舍那佛を安置し國家衆生の幸福を祈願せられたり而して入唐して歸朝せる僧  
は博識篤學の輩多く帝自から三寶の奴と稱し受戒して法名を唱へ給ふに至り  
遂に政教は一致して僧は政權を掌握し道鏡の如きは法王の位に登るに至れり

故に伽藍の建築は國家的事業となり最も盛大を極め非常の發達を爲せり。

神佛融和

元來神道と佛教とは物部蘇我の鬭争以來互に相反目し居りしに行基出て佛説  
の諸天善神を敷衍し我國の諸神は佛の神に權化して此國に生れしものなり即  
ち本地垂跡なりと説きしより忽ち神社に神宮寺を起し寺院に鎮守を置くに至  
れり。

備考 鹿島神社の神宮寺、東大寺の手向山八幡の如き其一例なり。

又神社に佛寺の形式を加味せる春日造なるもの起り丹塗りにして肘木を有す  
る等の異彩を放てり。

宮城

我國にては代々の帝王遷都し給ふの風ありて宮殿も粗朴の構造なりしが海外  
と交通開けし以來皇極の板蓋の宮は已に唐制に限り天智の天津宮に至りては  
瓦葺なりしと云ふ當今にても古蹟に瓦片を發見する由而して天武の飛鳥清見  
原宮持統の藤原宮は其規模大に整頓せしが如し其後元明に至り遷都の困難を

感じ永住の宮城を營まんとし遂に大和平城京に奠都し給ひ國家鎮護の道場たる諸大寺をも都の内へ移されたり。

平城京の地形は長方形にして中央に朱雀大路あり又其左右に三大路ありて一坊二坊三坊と云ひ京極路にて終る宮城は其中の一區畫にして十二門あり朱雀門は其の南正門たり宮城は其大さ八町に十町なりしが如く中央に皇居あり又其周圍に諸官衙ありて當時其痕跡と認め得べきは朝堂院なりと云ふ朝堂院は公式を舉行するに用ふる式場にして其正殿は大極殿なりしなり今其様を窮ふ能はざれども京都皇居に依て略想像し得べきなり。  
其他皇居東院西宮ありて東院中に玉殿ありて彩色を施し碧瓦を以て屋根を葺けり之れ皇居として採色を應用し且つ碧瓦を採用するの嚆矢なり。

備考 關野工學博士は嘗て古圖及古書に則り平城京の遺跡を調査したるに皇居各殿の設置しありし場所には普通の島よりも土積を一段高く盛上げありしものあり依て此等に抗を打ちて檢定したるに其配置の概略を窺知せりと云ふ。

神社

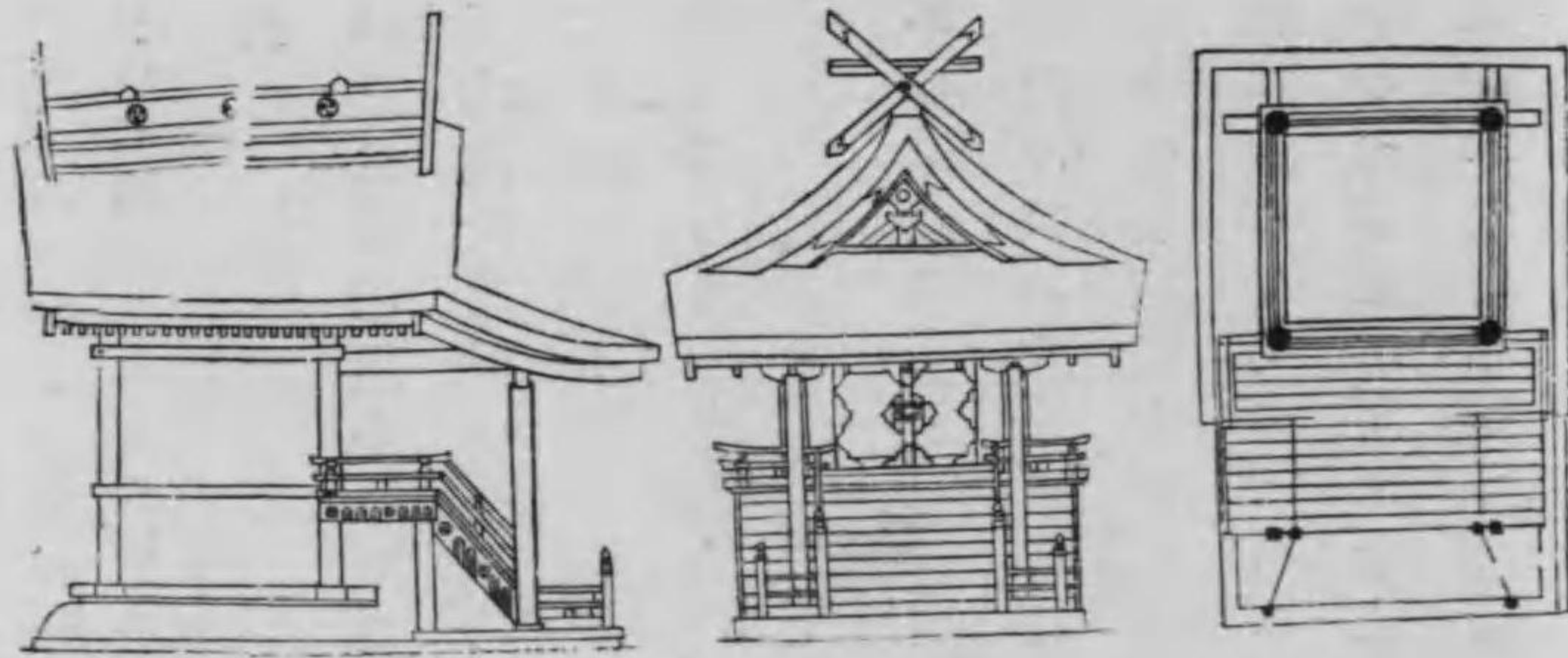
前時代即ち飛鳥時代には神社の制佛教傳來以前と異ならざりしも天智期即ち天武の朝に伊勢内外宮を廿年毎に改造の制を定め天平期(聖武期)に至り神佛融和の傾向を生じ神宮寺あり大寺に鎮護を置くに至り隨て僧侶も神社に關係し本地垂跡の説より神は即ち佛の再來にして其權化に外ならずと説き其影響として建築式に神社と佛寺の折衷式起れり即ち春日造と流れ造なり。

春日造

春日造は皇子造とも稱し南都春日神社を其標本とす其の構造は住吉造の如き妻入造りを變更し佛寺の手法を加味したるものにして正面に階段を設け之れを覆ふ爲め庇を出し向拜と稱す又高欄及登高欄ありて擬寶珠を附し前面或は廻りて椽を有せり又本殿の柱は丸柱にして向拜は大面取りの角柱なり而して何れも船肘木を有し軒は一軒なり又本殿の垂木は長方形にして繁極を用ひ向拜は面取せる疎極を用ふ。

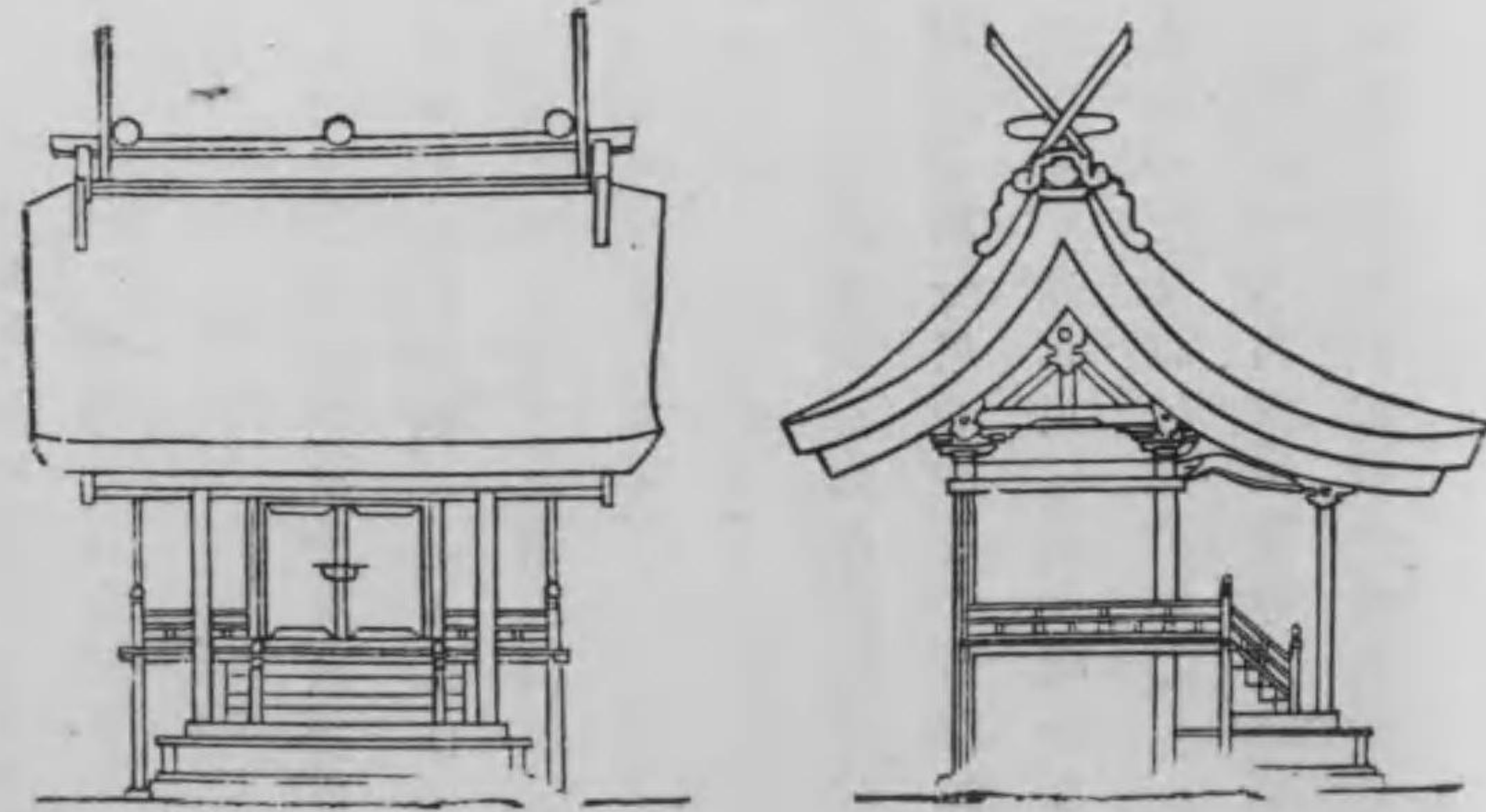
備考 繁極に本繫割なるものあり其割合は長さ十尺を二十二支即ち二十二割になし拾を垂木の下端とし十二をセイとし小間を十二とす又セイを十三に取ることあり而

圖 六 十 百 第



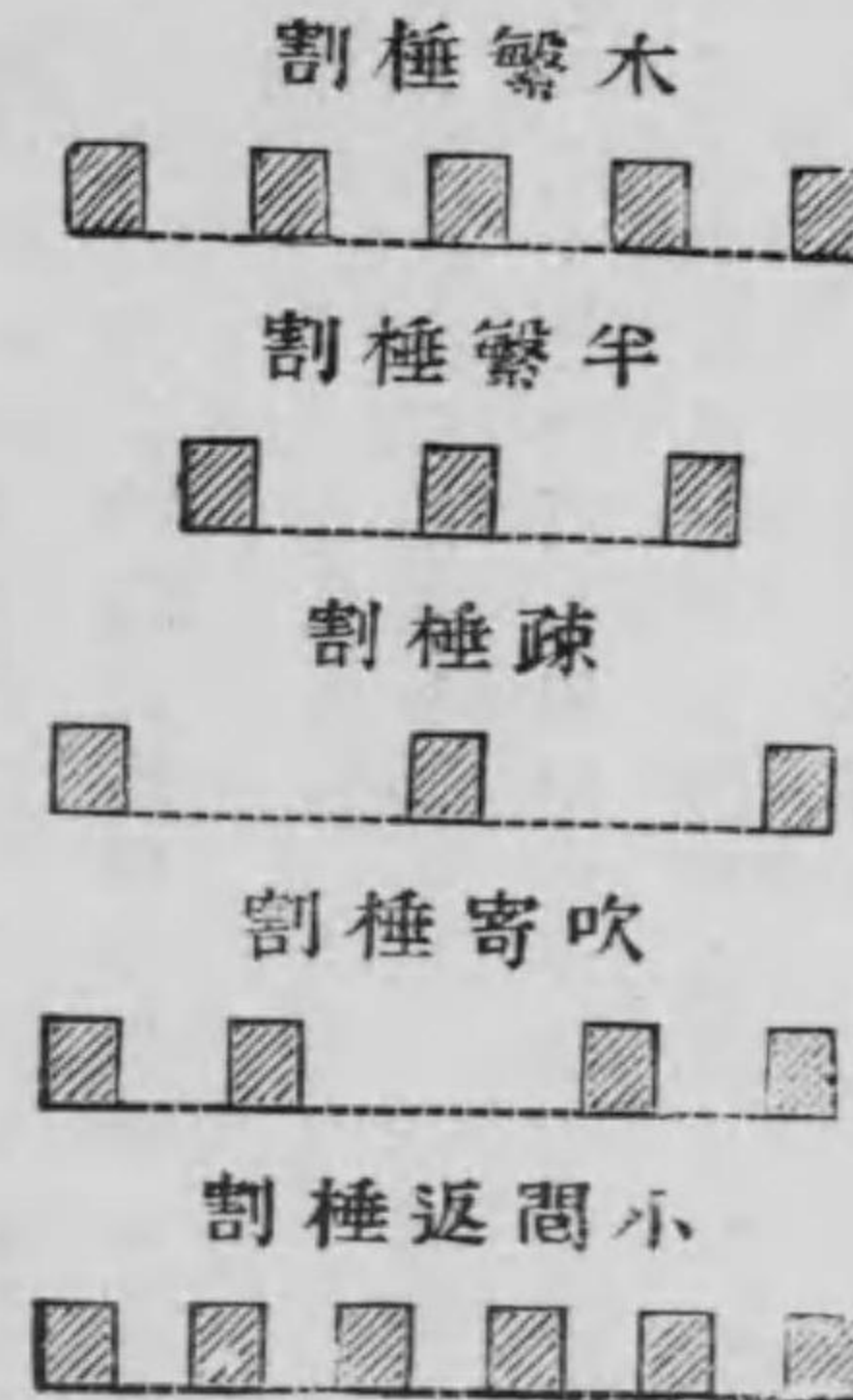
造 日 春

圖 七 十 百 第



造 れ 流

圖 五 十 百 第



載せ打付とし其端を斜に切斷し且つ勝男木を置きり裝飾としては朱塗を用ひ垂木鼻及び高欄にも金具を用ふ。第百十六圖は京都吉田神社の本殿にして一間春日造の構造を示す。

又本殿と向拜の間に繫虹梁ありて面取りを爲す是即ち神社に虹梁を用ふるの初めなり。屋根の後方は普通の切妻あれども正而は切妻に庇を附し絶破風なるものを生ず又全體破風に反りを付け懸魚を用ひ又千木にも反りを付け棟上に

して下端に對してせいは二分増或は三分増と云ふ又半繁割とは極明きを其セイと巾との和に等しく取りたるものを云ひまぼらわり(疎割)とも云ふは極の間隔離れたるものを云ひ吹寄割とは本繁割三本目毎に抜きて殘二本宛組と爲したるものを云ふ又小間返し割と云ふは極の巾と小間とを同様に割付けたるものを云ふ其他小疎、中疎、大疎等あり(第百十五圖及び第二卷挿圖参照)。

備考 寧樂春日神社は四間社にして各々別種の神を祭る。  
右は建築雜誌第百六十九號伊東博士の論說に依る。

流れ造

流れ造は神明造の社殿に其前面の間敷と同じ巾なる向拜を附け破風懸魚千木勝男木階段高欄等全體の構造春日造と同一なり而して後世に至りては千木勝男木を載せざるものあり第百十七圖は其一例にして加茂上下兩社の如きは其最著明なるものなり又三間二面の流れ造も多く認むる所なり。

佛寺

天平期は政教一致し神佛融和せしかば佛教の勢力最猖獗を極め大伽藍建築せられたり其の重なるものは長谷寺海龍王寺國分寺國分尼寺法隆寺東院新藥師寺東大寺唐招提寺西大寺秋篠寺等なり然れども多くは火災に罹り現今迄創立の儘に保存せらるゝもの僅少なり今其残れるものを舉れば左の如し。

當摩寺東塔西塔東大寺法華堂海龍王寺西金堂榮山寺八角堂法隆寺食堂夢殿新藥師寺本堂唐招提寺金堂講堂其他門樓鐘形等あり而して當期の標本として其

第百十八圖



唐招提寺金堂

精を盡し美を極むるものは唐招提寺の金堂を置きて他に非ざるなり。

唐招提寺

此寺は天平寶字三年唐より來りし大德鑑真和尚の創立する所にして律宗なり其配置は南に南大門あり次で中門あり之れを入れれば金堂に達して其後に講堂食堂あり。又中門の兩側には廻廊ありて金堂に至り其左右には東西塔あり又經樓鐘樓僧房等ありしが創立の儘現存するは金堂と

講堂なり。

金堂は七間四面の單層にして稍高き石壇に立ち屋根は四注本瓦葺にして大棟の兩端に鴟尾を上げ其全體の形狀は元祿年間の修繕に屋根の勾配を稍急に改めしが如きを以て屋蓋は多少過大の感なきに非らざるも柱組物軒廻の大小權衡は其宜きに適ひ充分缺點を補ひて雄麗莊重の趣を呈せり又正面一間通りを開放して向拜となしたる爲最豊美なる柱列は建物の前面を飾りて内部に深き影を宿し雄大なる斗肘木は其上にありて大膽に突出せる軒を承け更に一層優秀の想あらしむ(第百十八圖參照)

柱の礎石は花崗石にて造り上部を圓く作り出し柱脚を受け柱は上部稍細く胴にエンタシスあれども推古天智兩期の手法に比すれば更に少く一層優麗となり恰かもクラツク式のコリント範の如き趣あり組物は三手先にして支輪あり故に藥師寺東塔よりも小天井少く鬼斗の使用も始めて完全となれり。

備考 飛鳥時代に於て雲肘木を以て始まりたる組物は天智期に至り普通の斗及肘木となり別に小天井の使用に依り一層發達したりしも更に此期に至りて新に支輪及鬼

斗の附加によりて始めて完備のものとなり爾後今日に至る迄木割の手法等多少相違あるのみにして構造上復一點の加ふべきものなきに至れり。

軒は二軒にして地垂木圓く飛檐長方形の斷面を有す又虹梁は廂の間に於ける繁虹梁及内陣天井を承くる大虹梁の二種ありて其大虹梁の上には葦股あり天井格縁を支ふ。

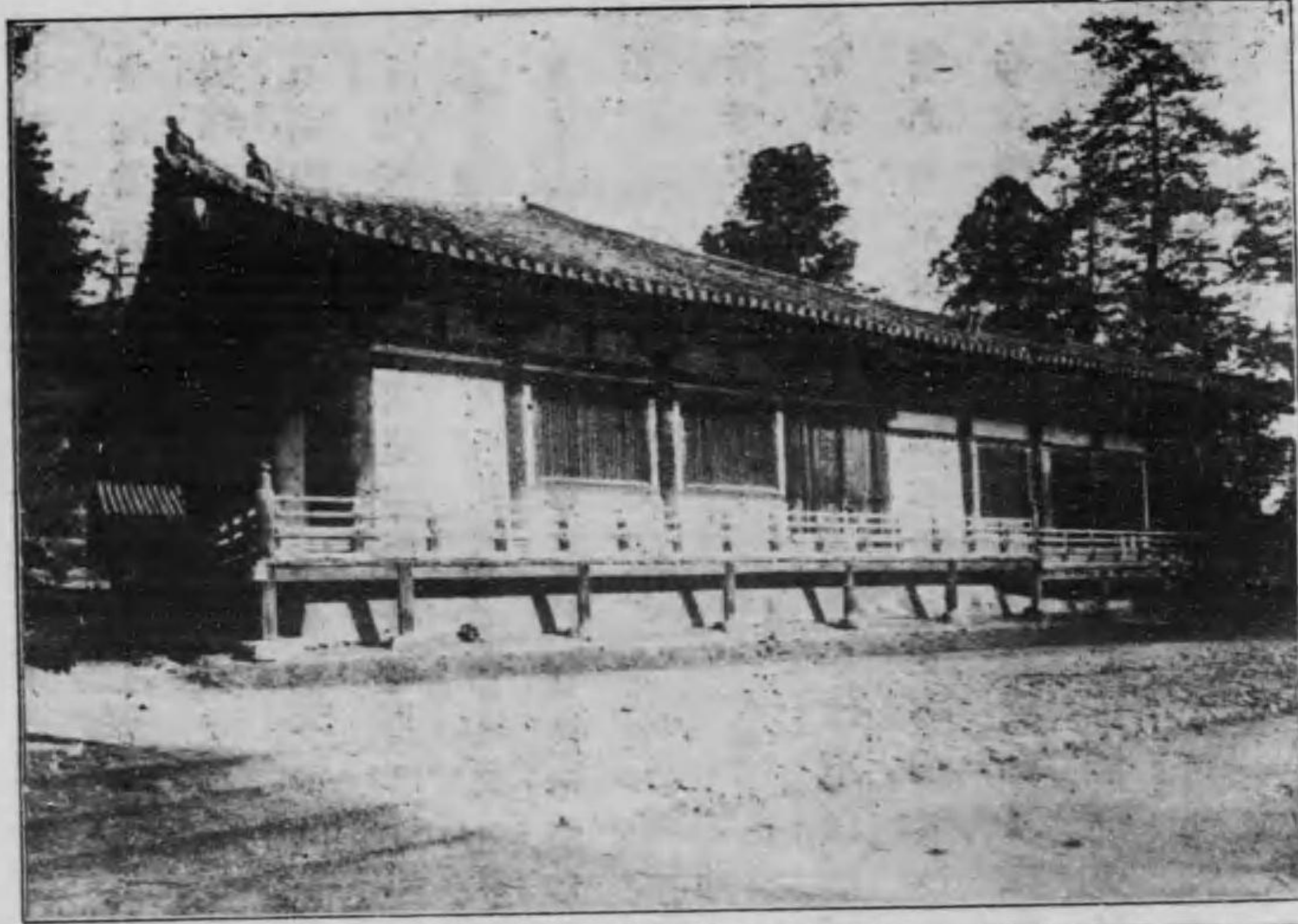
備考 板葦股の使用は此遺物に於て始めて認めるところなり。

内陣の天井は折上組入天井にして支輪頗る長く少く内方に彎曲せり扉は厚き板を實矧になし貫を以て之れを貫き更に裏面に横棧を打ち其一端を柱に觸れざらしむる爲め圓く削れり此手法も亦天平期の特色なり。

外部の裝飾は柱組物より軒廻りに至る迄木材は悉く丹土を塗り支輪裏板のみ寶相花の模様と小佛像とを畫さし形迹あり。

備考 建物の外部に彩色模様を施せるは當期を以て嚆矢とし爾後數百年間其迹を失ひ南北朝期に至りて多少其蹤跡を現はし桃山時代に至りて始めて豪華の者となりて再現せるが如し。

第百九十圖 三日月堂



第百二十圖 夢殿

内部の裝飾は内陣の柱に草花及佛菩薩等を彩色し天井格縁及支輪には簡單なる彩色を施し格間には寶相花紋を畫き更に支輪の間には優美なる寶相花を表はし或は雲紋佛菩薩等の像を作れり其他大虹梁の兩端には華美なる草花を畫き中間には唐艸模様の中に佛像人物等を表はし長押の下端には飛雲の狀を作れり又後壁には三千佛を畫きし事縁起等に明記しあれども悉剝落して其一斑をも窺ふ能はざるは惜むべきの至りなり。

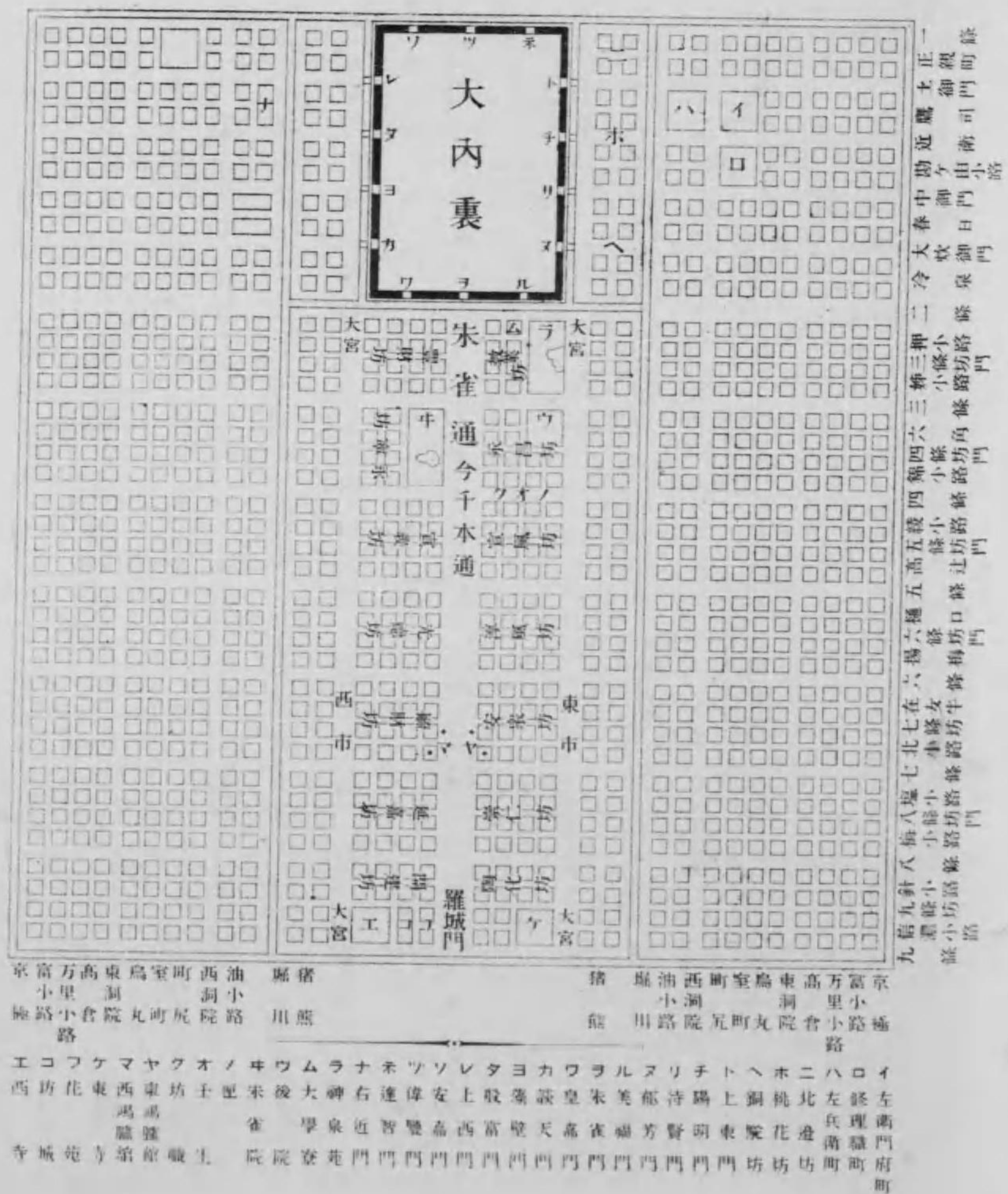
要するに此金堂は當期の遺物中最大なるものにして空前絶後の發達を爲したる天平期の形式を代表するものなり。

右は建築雜誌二百三號關野工學博士の論說に依る。

東大寺

此寺は總國分寺として規模宏大なりしものなりしが數々燒失し大佛殿の如き當今存するものは古制に比し難き元祿の再建なり然ども創立の儘存するものは正倉院校倉轉害門勸學院及法華堂前の校倉等に過ぎず正倉院校倉は當時此種の代表的のもの轉害門は當代八脚門の最壯大にして最も傑出せるものに屬

平安城の圖



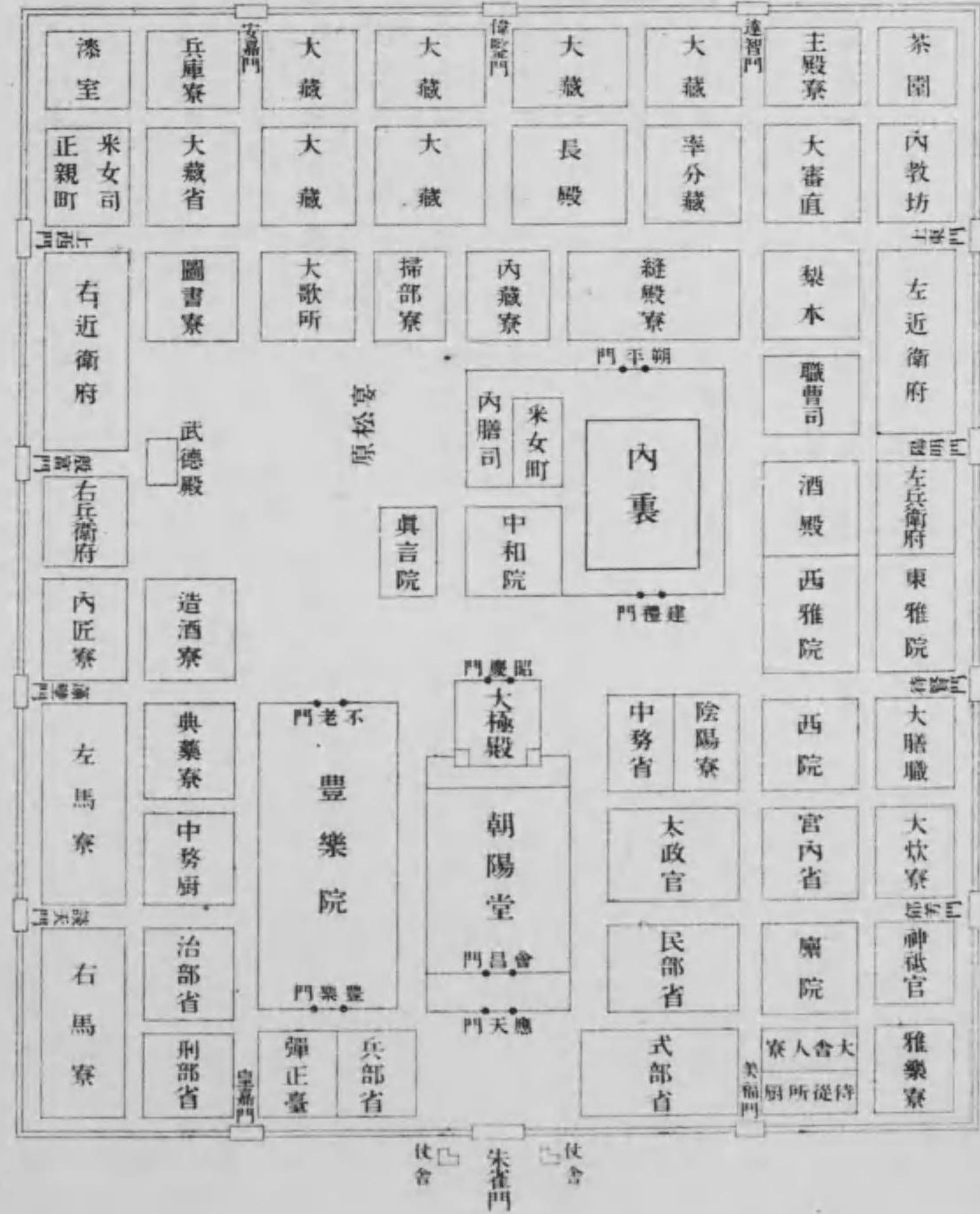
墳墓

第百二十圖參照天平十一年の創建に係る。  
 塔ありて東院には夢殿あり夢殿は八角堂にして周圍に石壇及び高欄あり又組物の構造優美にして屋上に寶珠露盤あり實に建築的完全の比例を有する堂宇

法隆寺東院夢殿

又別に法華堂あり東大寺經營せらゝに及んで境域内に入り其の一院となる  
 また當時の遺構なりとす。  
 法華堂は金鐘寺又は金光明寺と稱し僧良辨の爲めに聖武天皇これを創め給ふ  
 不空四絹索觀世音を安置し天平五年の建立なり其構造は單層にして唐招提寺  
 に比敵して雄大優美なれども内外部に於ける裝飾なし(第百十九圖參照)  
 備考 東大寺に正倉院と稱し聖武の御物を藏する所あり古昔の遺風を存して高雅  
 なり又大佛殿の結構に付ては天平時代の創業と元祿の再建とを並論せる關野工學博  
 士の明細なる調査あり載せて建築雜誌第百八十二號及第百八十三號にあり。

大内裏の圖



佛教の勢力盛大に趣くと共に火葬の風行はれ陵墓の如きも次第に小規模となれり。

(C) 弘仁期(嵯峨期) (桓武延暦十三年平城より平安に遷都せしより醍醐即位に至る迄百四年間)

前時代には政教一致して僧侶は政事上の權力を得遂に大なる弊害を生ぜしより一頓挫を來し漸次衰勢に趣きしに桓武帝は更に都を遷されしかば平城の諸大寺も政事と遠隔さるるに至れり。

平安奠都以來大内裏の制大に備はり専ら唐風を模し宮殿建築の一生面を開きしかば貴族も其規模を唐の四阿造にとり折衷して所謂寢殿造なる上流邸宅を創設するに至れり又弘法大師(空海)は真言宗を開き高野山に金剛峰寺を造り傳教大師(最澄)は天台宗を開き叡山に根本中堂を建て之れを延暦寺と稱せり而して弘法の如きは盛んに本地垂跡を稱道せり。

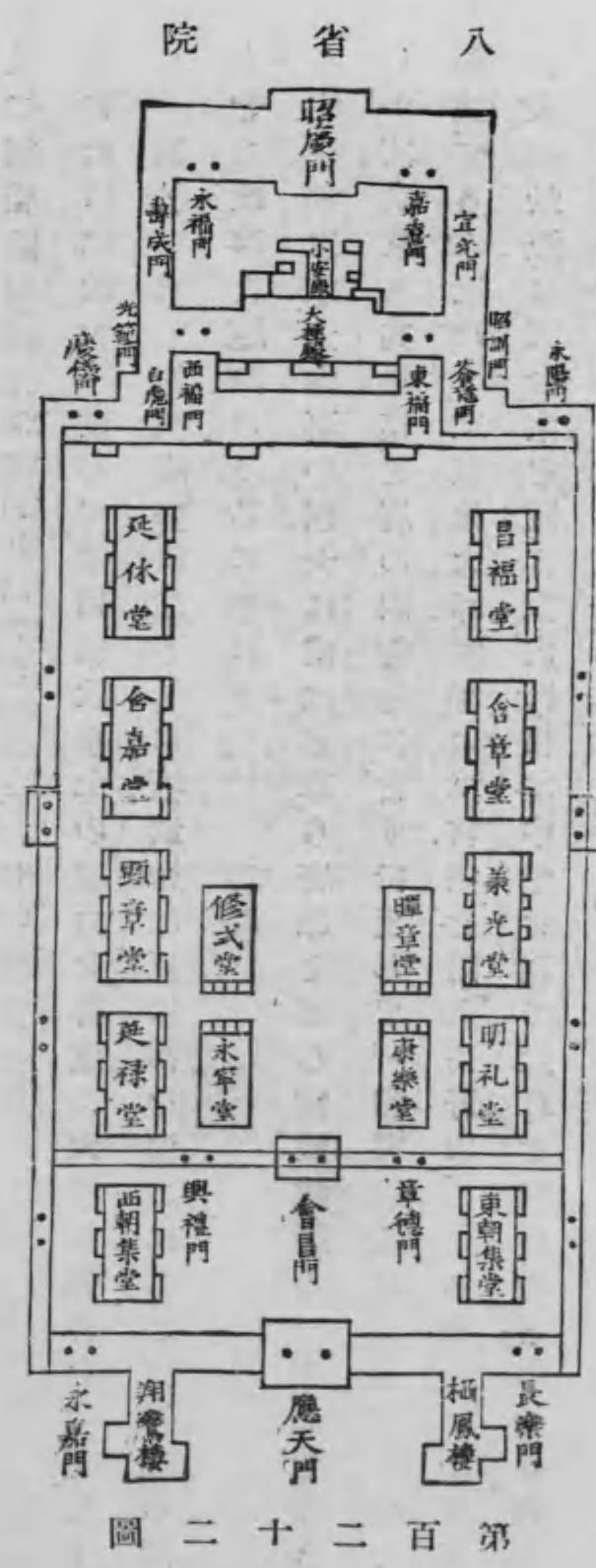
平安城

桓武の奠都せられし平安城は其の規模平城京に倣ひ一層之を擴張し之を完整せしもの東西千五百八丈南北千七百五十三丈にして左京右京に分ち中央の大



路を朱雀と云ひ横路は一條より九條に至る(第百二十一圖(甲)参照又大内裏には十二門を開き別に上東上西の東西二門ありて其内第百二十二圖の八省院(朝陽堂)は儀式に用ひられ其正殿を大極殿と云ひ桓武帝千年祭の節建設せられたる

二三四



京都の大極殿は其規模の小なる者なり其他豊樂院は群臣に宴を賜ひ且つ諸節會に用ひられ中和院は天子社稷の神を祭る所なり又皇居に紫宸殿清涼殿其他

第百二十二圖

數多の殿宇ありて皆獨立して構造せられ廊下を以て之れを連接せり此建築は全く唐風を模せしなり(第百二十一圖参照)

第百二十三圖



室生寺五重塔

寺院の重なるものは皆之に屬せり而して延暦寺、金剛寺、清水寺、西寺、東寺、鞍馬寺

備考 大内裏  
圖考 證平安通  
誌拾芥抄宮殿  
調度國解禁秘  
御抄(順德天皇)  
禁秘抄釋義等  
を参照すべし

佛寺  
此時代には天台眞言の二宗専ら隆盛を極めしかば新築

観心寺、貞観寺、元慶寺、仁和寺等は皆此時代に建立せられしものなり又真言天台の二宗は重に修法を行ふを以て高山を開き之れに堂宇を建てしが故に其配置は寧樂時代の如く整然ならず又寧樂朝にて寺院は學問所なりしも此時代には全く一の修法場となれり。

此時代に創建せられたる寺刹は不幸にして殆んど全く變災に罹り今日に残存せるものは唯に室生寺の五重塔及金堂あるのみ。

五重塔

此塔は白鳳九年役小角草創寶龜年間賢憬僧都此に伽藍を經營し天長元年弘法大師再興と稱し充分に此時代を代表し能はずと雖も能く特色を存して稍高さ壇上に立て初重方八尺二寸石口より露盤迄の高さ三十八尺〇九分相輪長十五尺〇四分全高僅に五十三尺四寸の小塔にして各層方三間組物三手先軒二重垂木屋根檜皮葺第二層以上各重勾欄を繞らせり柱にはエンタシスありて比較的太く(金堂柱にはエンタシスなし)大斗の大きさは割合に低く卷斗は高く一般に「フクミ」極めて少く敷面甚大なり(第百二十三圖參照關野氏は鳳凰堂建築論に於て

第百二十四圖



高野山金剛三昧院多寶塔

新古二三の方斗を比較したるに三月堂のものは斗の面を一とすれば「フクミ」は其二分五厘敷面斗縁高とも三分七厘五毛鳳凰堂のものは「フクミ」敷面斗縁高共三分三厘にして江戸時代に至りては高さの四分を「フクミ」とし二分を敷面四分を斗縁高とすと云はれたり又肘木は「セイ」高く其端の縁形頗る雄健なり此等の關係より三手先の組物比較的高きに過ぐるものとなれり故に柱を短くし且つ屋根の勾配を緩にし

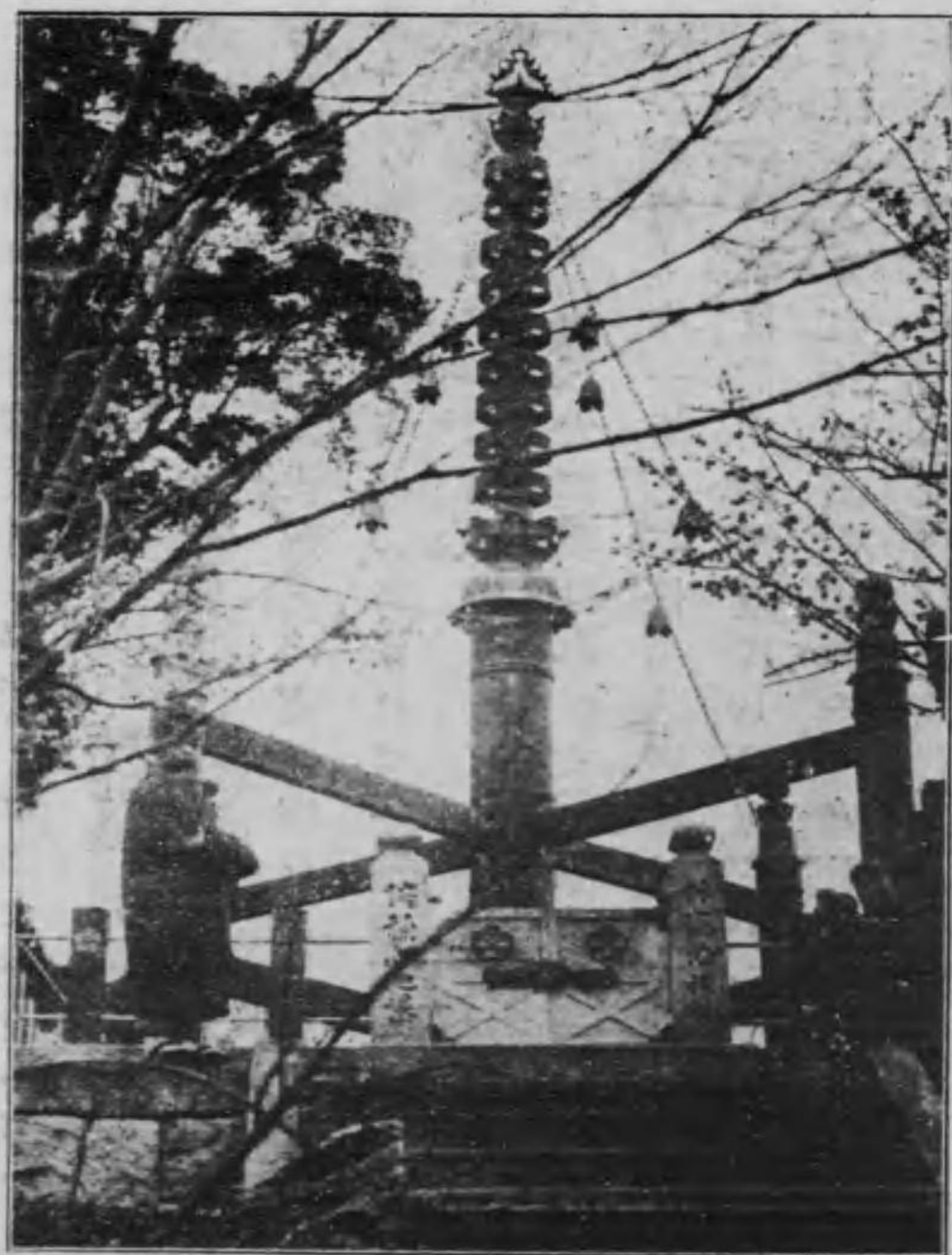
檜皮葺を用ひ輕快にしたり尾垂木の端は少しく外に向て切り去れり是れ白鳳期に屬する海龍王寺五重塔模型に存する手法に似たり又相輪は鐵骨に銅板を張りし物より成り普通水煙を附する所に稍大なる寶瓶狀の者を置き其上に鐵骨にて天蓋狀を造り其端は廣く上に捲きて蕨手の如く下に風鐸を吊せしは奇と云ふべし外部の裝飾は悉く丹土塗なり。

備考 室生寺五重塔の精細は建築雜誌第二百六號金堂の精細は第四百七十一號關野工學博士の論説を參照すべし。

要するに此時代には佛寺を山上に建立するを以て其配置は自在となり本堂を内陣と外陣とに區別し内陣に須彌壇を築き本尊を置き其前方左右に板壁を設置し其前に金剛座を設け護摩を焚き修法を行ふ所とす又寧樂朝に於ける各種の塔の外に新に二種の塔を生じたり一は多寶塔にして空海始めて之れを高野山に造ると稱し一は相輪檜にして最澄始めて之を比叡山に造ると傳ふ而して多寶塔は第二百二十四圖の如く下層方形にして上層圓形なり又相輪檜は九輪のみを以て成れる一種の塔なり其比叡山に於けるものを古式とし大阪天王寺に

於けるもの亦之れと同一の手法を用ひ高野山、日光山、太宰府等に於けるものは新しきものに屬す(第百廿五圖參照)

第百二十五圖



太宰府相輪檜

一般に柱、組物、軒廻り等、凡て天平期の繼續にして大差なく唯木割の漸次我國民の嗜好に應じて固有の特質を發揮し以て平安時代の溫雅優麗なる形式に到達するの前驅を爲せる

ものたり。

改訂者云、本期は之を平安時代に置く人あり又延暦時代と稱する者あれども原著者のまゝとし寧樂時代弘仁期として存す。

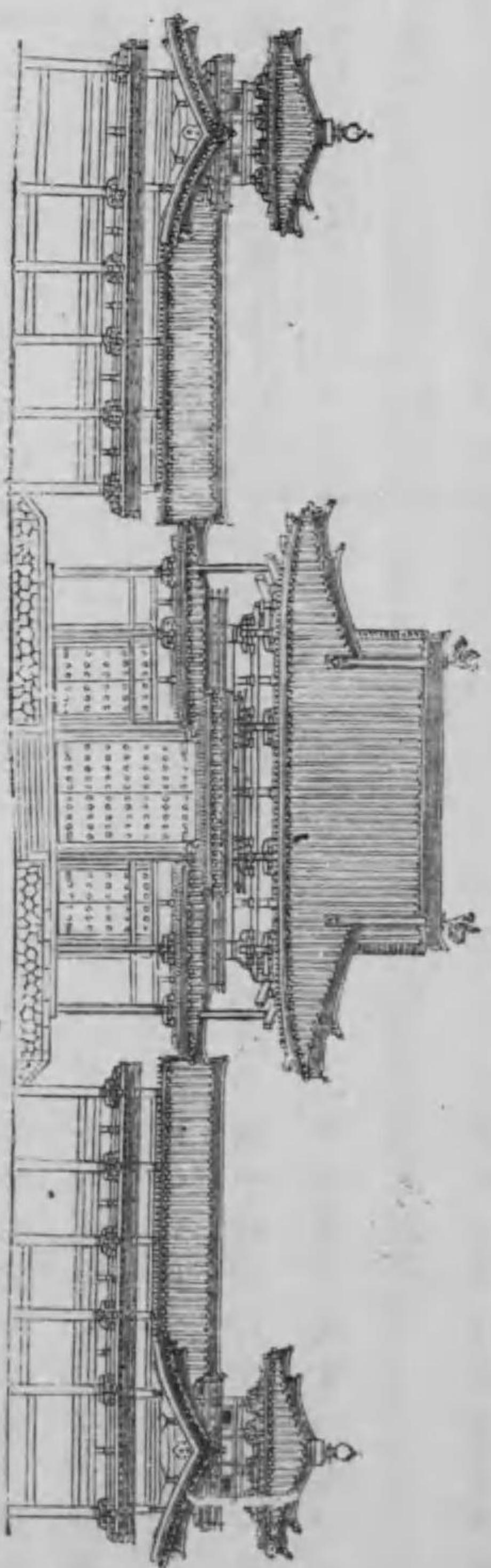
(6) 平安時代(藤原時代)(醍醐即位より鎌倉開府に  
至る迄二百九十四年間)

前時代は凡て支那の影響を受け我國の文化を發達せしめしに此時代に至りて遣唐使を廢し同時に支那との交通疎となりしより獨立して固有の發達を爲し其時代の精神は技術上に表はれて一種の形式をなせり此時代は藤原氏專横を極め國內平穩なりし爲め遊惰奢侈に流れ文學美術に力を盡せしかば雄大の氣質を失ひ優美の風大に現はれ國文和歌は最流暢となり繪畫彫刻も亦艶麗となり隨て建築も亦一變し其優美華麗なるの點に於ては空前絶後と云ふべきなり此時代の佛教は前期の繼續にして専ら天台真言の二宗隆盛を極め皇室貴族の崇信深きより宗教的藝術は頗る隆盛を極めたり然れども僧權増大し各寺間に争を生じ互に數千の衆徒を養成し以て強請脅迫を恣にするに至れり而して神社も亦其影響を受けて新たに伽藍造を起し奢侈の風は遂に寢殿造なる貴族の住宅方式を大成せり。

佛寺

此時代に建立せられたる寺院は最多く醍醐寺、勸修寺、圓融寺、法性寺、法成寺、平等院、法勝寺、尊勝寺、最勝寺、成勝寺、圓勝寺、延勝寺等にして何れも廣大壯麗のものな

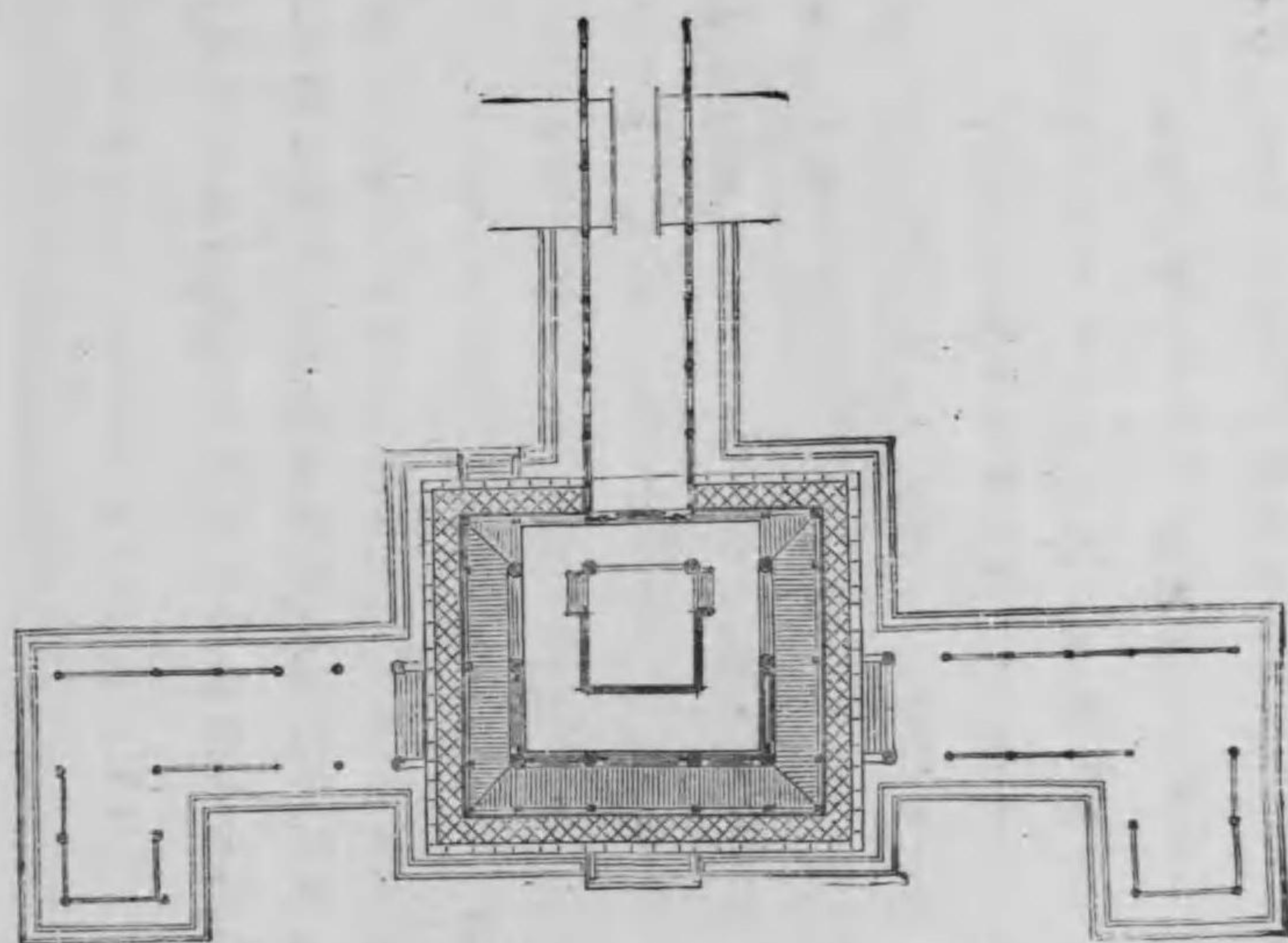
(甲) 圖 六 廿 百 第



堂 風 風 院 等 平 治 宇

りしが平安の都屢兵燹の巷となり此等の巨刹は何れも烏有に歸したり而して當代の遺構としては醍醐寺五重塔(天曆五年)三千院本堂寛和元年法隆寺大講堂

第百廿六圖(乙)



宇治平等院鳳凰堂平面圖

二四二  
 (正暦元年)淨瑠璃寺本堂(元喜元年)石山寺本堂(承暦二年)法界寺阿彌陀堂(期末)白水阿彌陀堂(永暦元年)其他八種あれども好摸範たるは宇治平等院内の鳳凰堂及び陸中の一の關中尊寺の金色堂なれば之れに就て記すべし。  
 平等院鳳凰堂

宇治川の流れば南より北に向て流れ鳳凰堂は其西にあり朝日山と相對して東に面し北に大門あり(是れ例外にして一般に何れも南面なり)

又之れを周りて池あり阿字の池と稱す。

此地は左大臣源融の別墅なりしが後道長の有となり頼道の特別業を捨て之れを寺となし天喜元年三月供養をなす(紀元一七一三年)

本殿は三間二面にして四方に裳層あり又左右に翼あり廻廊五間にして再び折れて前に向ひ二間進みて止り其屈曲部に樓あり又本殿の後に七間の尾樓ありて其全形は鳳凰の空より飛下するに象りしなり(第百廿六圖参照)正面の建圖を見るに實に秀絶にして巽然として石壇上に立ち其屋棟に銅鳳あり又歩廊及び翼樓は下層開放せられ上層は極めて低く殆んど實用に非らずして裝飾として本殿に附加せられしものなり又柱は比較的太く頭貫其他著しく細少なり高欄は架及び平桁に反りて其端の切斷は地覆に關らず垂直なり。

備考 後世の手法は地覆の端に向て切斷せらるゝなり。

又中殿は三手先組後尾は三斗平組歩廊は二手先出組翼樓は三斗出組にして地垂木の断面は圓形にして飛檐は方形なり。

備考 近世の建築にては地垂木及び飛檐は尾垂木と共に軒廻りの裝飾に過ぎざれと

も當時は構成上の一要素たりしなり。

外部の裝飾は木部に丹土を塗りしのみにて繪畫彫刻なく本殿内部の裝飾は極彩色にして中央に須彌壇ありて昔時は螺鈿を以て種々の模様を梨地に嵌入したれども皆剝脱せり又羽目の飾り壁畫天井等實に優美高尚にして雅趣に富めり又中央には更に圓き天蓋ありて頗る華麗なり。

備考 建築雜誌第六十七號木子清敬氏の演説及び第百二號關野工學博士の演説を參照すべし。

### 中尊寺金色堂

中尊寺は陸中平泉にありて天治元年紀元一七八四年藤原清衡の創設する所なり其規模の大なる堂塔四十餘宇禪房三百餘宇ありと雖も今は創立の儘存するものは金色堂經藏其他小堂二三宇に過ぎず然れども金色堂は能く鳳凰堂と東西相待て當期の好模範たり其大さ方三間にして屋根は寶形造俗に寄棟と云ふなり而して其構造簡單なれども内外の裝飾美麗にして能く參考と爲すに足るべく組物には三斗組を用ひ墓股は從來の板墓股より變化して今方の如き形式

となる。

備考 鳳凰堂は板墓股なり又金色堂の墓股も現今のものよりも比較的木割細し。

外部は凡て金漆を塗り屋根上迄も金箔を施せしを以て遙に之れを望めば金色燦爛たりしなり(現今は套堂と云ひて覆堂あり)故に金色堂の名あり套堂は正應元年將軍惟康親王平貞時及宣時に命して之れを作らしむ。

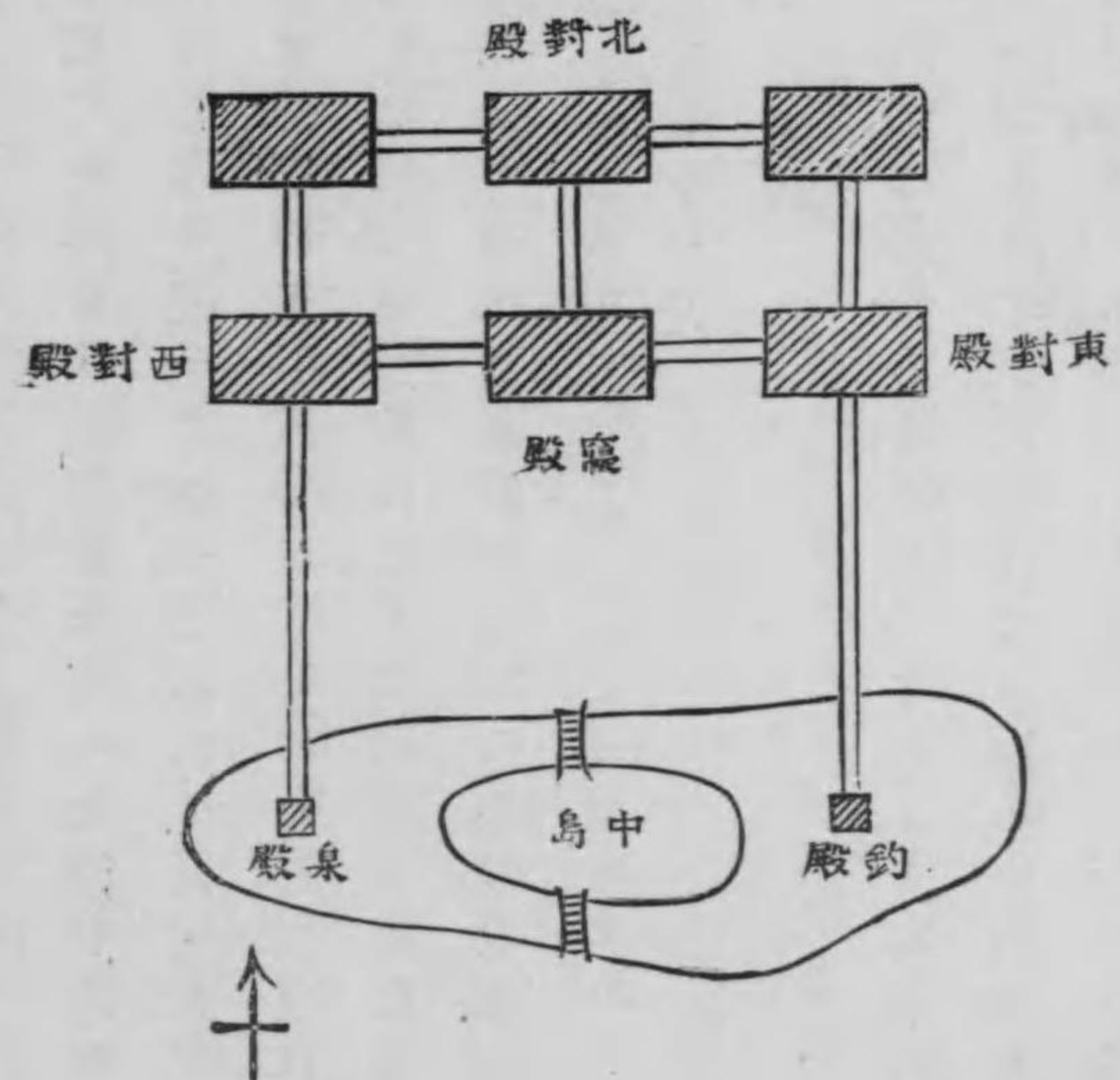
内部の柱は凡て金蒔繪にて十二光佛の像を現はし其餘は漆を以て種々の寶相花を螺鈿にて表はし高欄付なる三箇の須彌壇ありて清衡基衡秀衡の棺あり。

右は建築雜誌第九十七號塚本博士の論説及第百二十七號に原著者が記述せる陸奥紀行等を參照すべし。

### 神社、

神社の形式は佛寺の抑壓を受けしより其形式を混入し正面に鳥居ありて周圍に瑞垣玉垣ありしが此時代より換るに廻廊を以てし正面に樓門八脚門四脚門等を設け四方にも亦門あり加茂神社石清水八幡宮奈良春日神社太宰府八幡宮の如き皆此時代にして其配置全く寺院と同様となれり此配置を伽藍造と云ふ

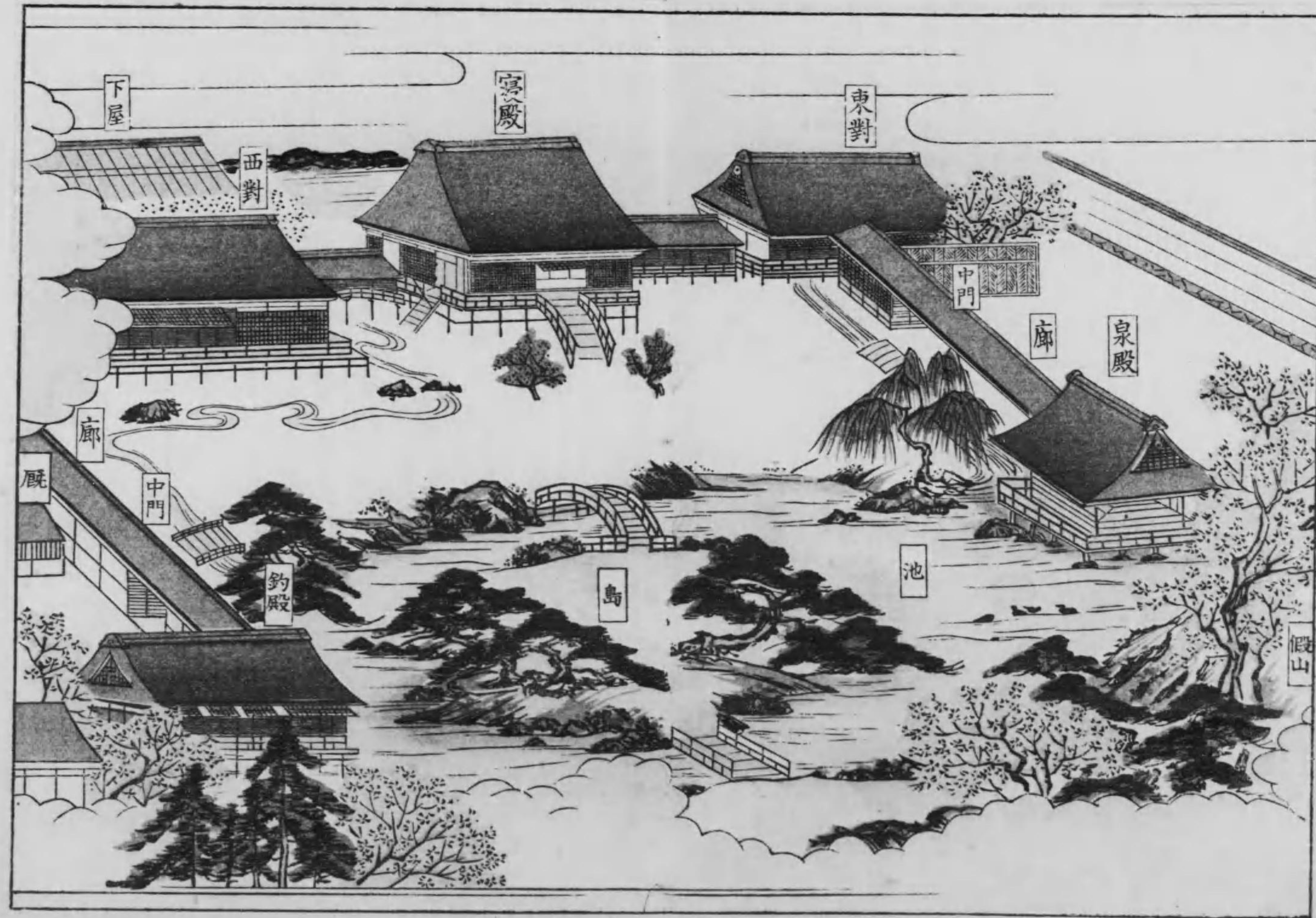
第百廿七圖(甲) 寢殿造



殿島神社の如き平清盛の再興に依りて美觀を添へしも現今の建築は鎌倉時代

なり本殿其他凡て廻廊を廻らし天然の風景と能く配合せり而して平面圖は清盛建設當時の儘なり而して當代神社建築の今日迄遺存せるものは宇治上神社本殿三佛寺納經庫(鳥取縣)春日神社樓門及廻廊及同若宮細殿御廊神樂殿なりとす。

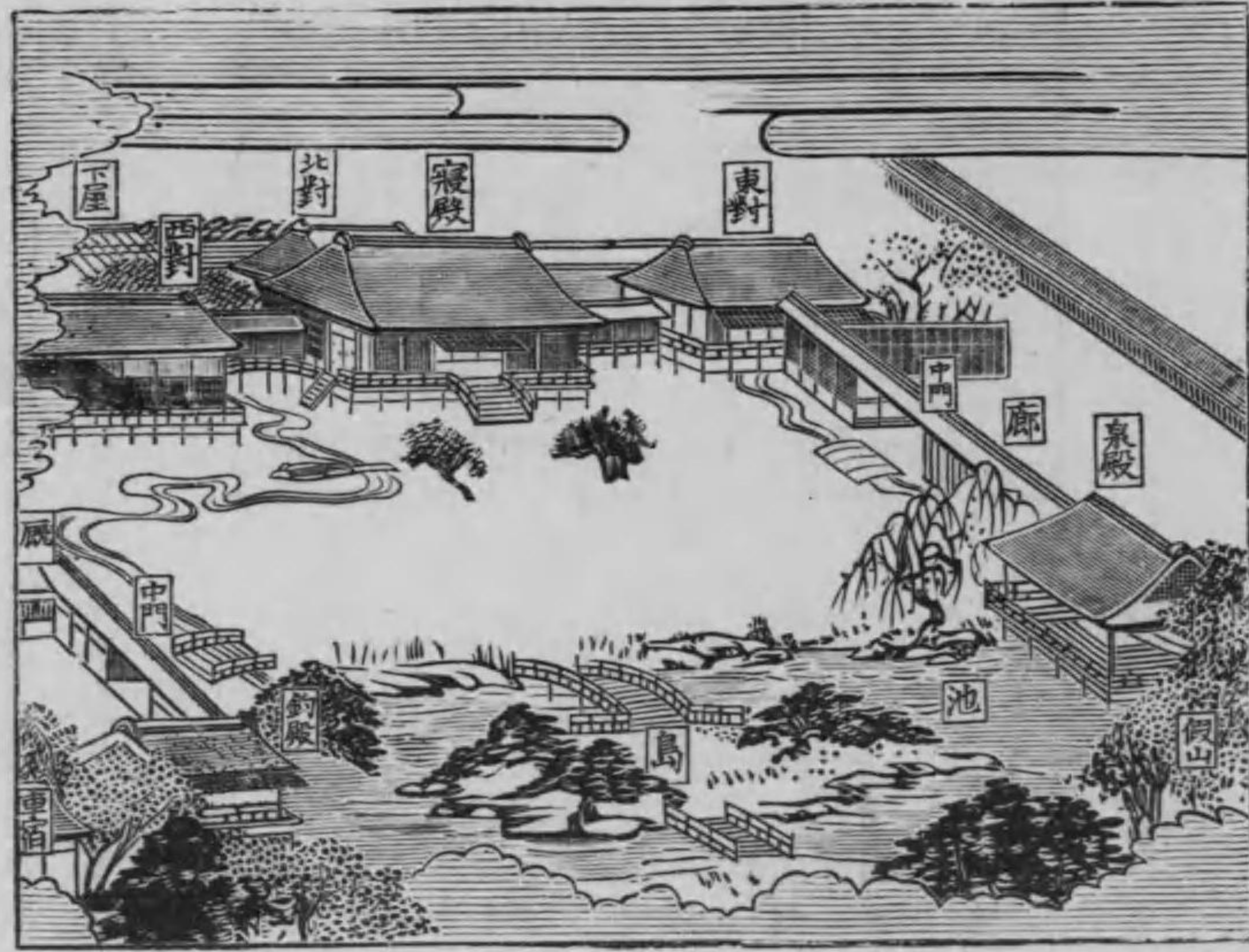
備考 伊東博士は伽藍造を八幡造日吉造伽藍造の三別とす其明細は建築雜誌第百七十號にあり。



寢殿遊之圖



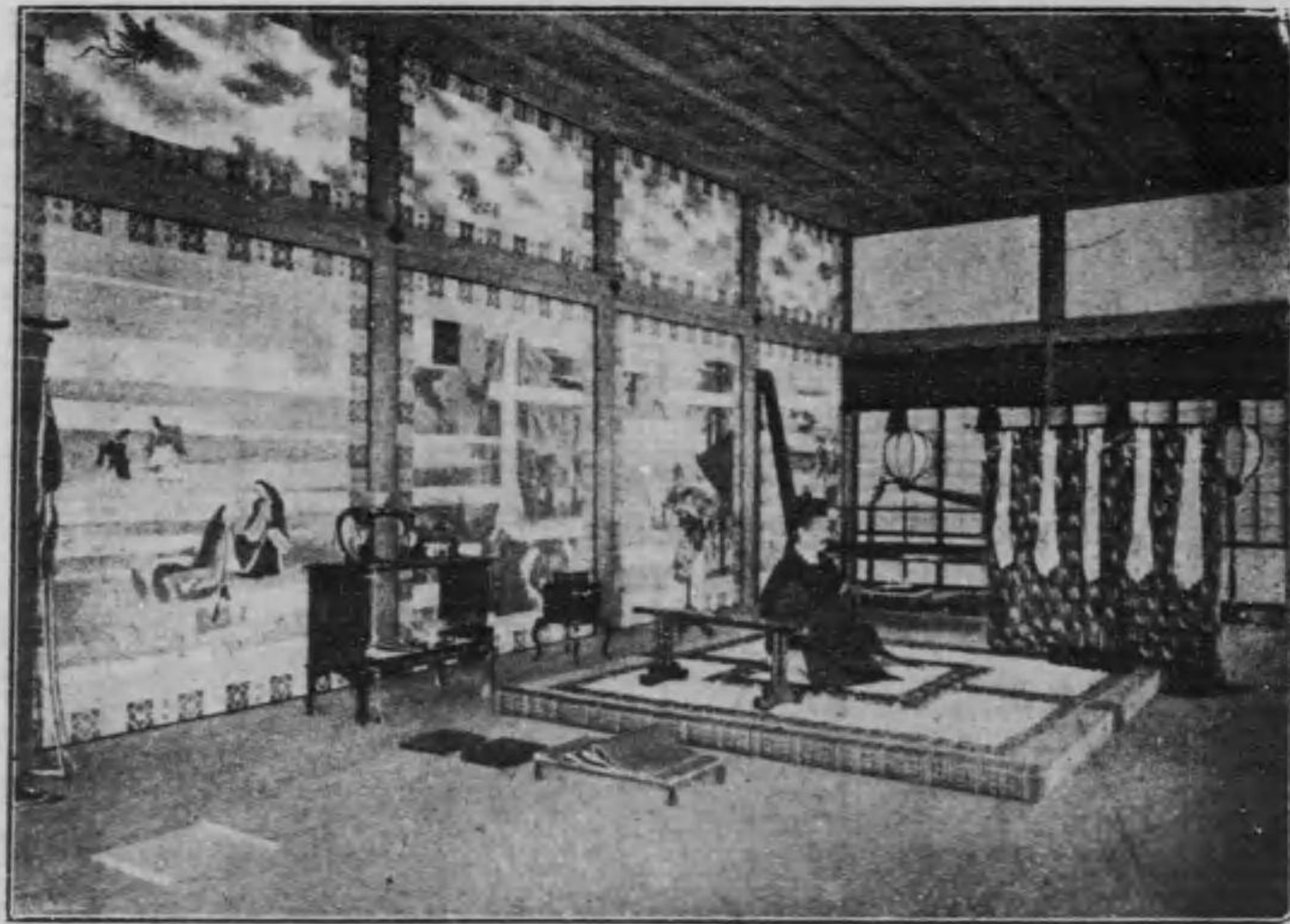
第百廿七圖(乙)



第十章 東洋建築史

此時代の皇居及其他之れに附屬せる宮殿は前期と大差なく唯貴族の第宅は藤原氏の豪奢に依り朝廷の神泉苑に擬して造營せられ寢殿造と稱する一種の形式を大成するに至れり其配置は凡て一家一構即ち家屋を一個宛獨立に建て廊にて之れを連結せるものにして先づ正門を入れば車寄あり中門より庭を過ぎて正殿に達す正殿は又寢殿と云ひ其前に遣り水を流し必づ南面に造り其東西若くは北に對屋カクヤを設け家族

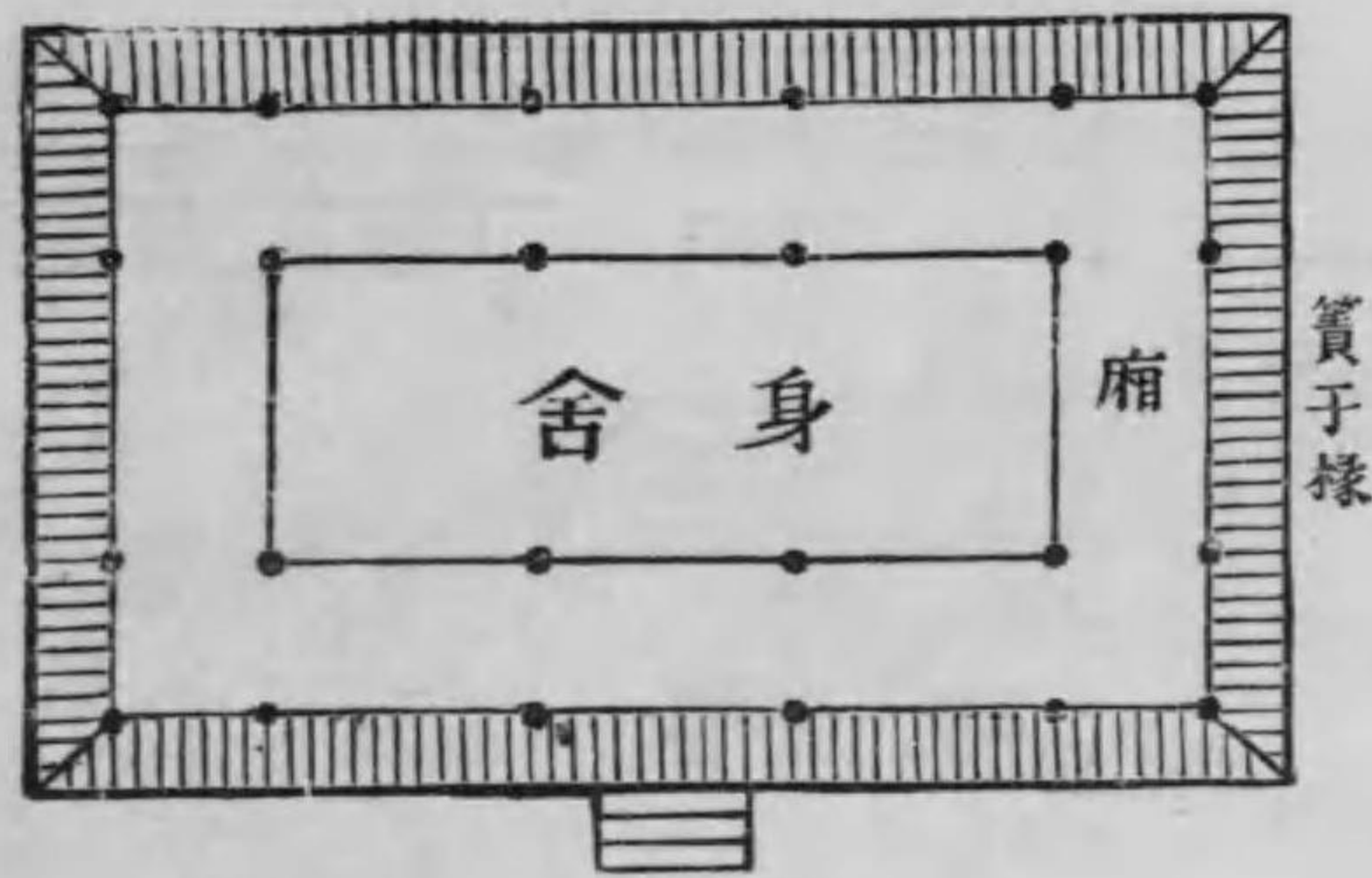
第百廿九圖



藤原式室内

井なる事あり屋根は通常檜皮  
葺にして入母屋又は切妻なり  
又廂は凡て屋根裏を表はし正  
面全體は蔀戸を用ひ内部には  
簾を垂れ側面及後面には妻戸  
あり其他戸、連子窓等を設けし  
ものあり室内は凡て板張りに  
して主客の座のみは第百廿九  
圖の如く置疊を置き其上に褥  
を敷き座側に几帳を立て帷を  
掛け氣流と他見とを避け其の  
他曲象衣桁、燈臺、屏風、唐櫛匣等  
あり内部の裝飾は通常張付け  
に繪畫を彩色し天井上下壁に

第百廿八圖



椽と云ふ又正面には階あり内部の天井は多く化粧屋根裏にして又稀に組入天

寢殿

寢殿には大小あれども主人常住の所にして通  
常七間四面多くは圓柱を用ひ中央を身舎とし  
し周圍を廂と稱し(俗に入側と云ふ)之を繞りて  
簀子椽あり(板を壁に張りしものにて俗に切目  
と云ふべし。  
は花の朝月の夕、詩歌管絃の遊を恣にし曲水の  
宴あり紅葉の賀あり其他五節句等の遊興あり  
て歡樂を事とせり月卿雲客の稱誠に虚ならず  
と云ふべし。

は花鳥類を畫きして未だ床棚等の設置あらざりしなり。

二五〇

備考 第百廿九圖は西暦千八百九十三年日本政府にて米國シカゴ萬國博覽會に建設せる鳳凰殿の左翼内部にして實に藤原時代の風俗を表はし宇治の鳳凰殿及京都の皇居に則り設計せられしものなり葺戸は中巻挿圖の如く上下二枚より成り開放する時は上方の戸を上を釣上げ下方のものを取去りしものなり寢殿とは支那にて正殿を正殿と云ふより起れり。

改訂者云。前時代弘仁期を平安時代前期とし本時代は之を平安時代後期(藤原期)とする人あり又同じく弘仁期を平安時代と稱し本時代を別に藤原時代とする者あれとも暫く原著のまゝに存す。

(7) 鎌倉時代(北條時代)(鎌倉開府より北條氏滅亡まで百四十餘年間)

平安朝の藝術は其の末期に近くに従ひて漸く華靡に流れ國民漸く其の弊に堪へざるに當り支那宋朝の新式藝術は吾國に輸入せられたり。之れが媒介をなせるものは即ち新たに勃興したる禪宗の佛教なり、即ち僧重源及榮西の二人入宋して歸朝するや重源は彼土に於て得たる新たなる様式を以て大佛殿の造營に従事せり是れ所謂天竺様なり、榮西は禪宗と共に所謂唐様の建築を傳へ一種清新なる氣分を建築上に發揮せり天竺様唐様は實に之の時に始まる。此に於て當

代には從來の平安系所謂和様と此の新來の兩派並び行はれ更に和様を基礎として其の細部に天竺様唐様を應用せる一種特殊の流派即ち觀心寺様を創むるに至れり。住宅に於ては京都を中心とせる皇室公卿邸宅は尙前時代の寢殿造行はれたるも武將の邸第は其の面目を一新し質朴なる武家生活に適應するもの即ち武家造を創始するに至れり。

當代遺構の重なるものは興福寺北圓堂、三重塔、石山寺多寶塔、蓮華王院本堂以上和様、東大寺南大門、良辨堂、醍醐寺經藏以上天竺様、圓覺寺舍利殿唐様、當麻寺曼荼羅堂、大山寺本堂長保寺本堂觀心寺様等なり。

佛寺

禪宗は上流社會の尊信を受け爲めに大伽藍の建立せらるゝもの多く政權は鎌倉にあれども一天萬乘の皇室は京都なれば此二都を中心として數多の堂宇は建立せられたり而して京都に於ける禪刹の最古なるは建仁寺にして有名なるは南禪寺、大徳寺、妙心寺等なり又鎌倉に於ける禪刹は圓覺寺、建長寺、壽福寺等にして何れも臨濟宗なり又宇治に興聖寺、越前に永平寺等ありて曹洞宗なり然れ

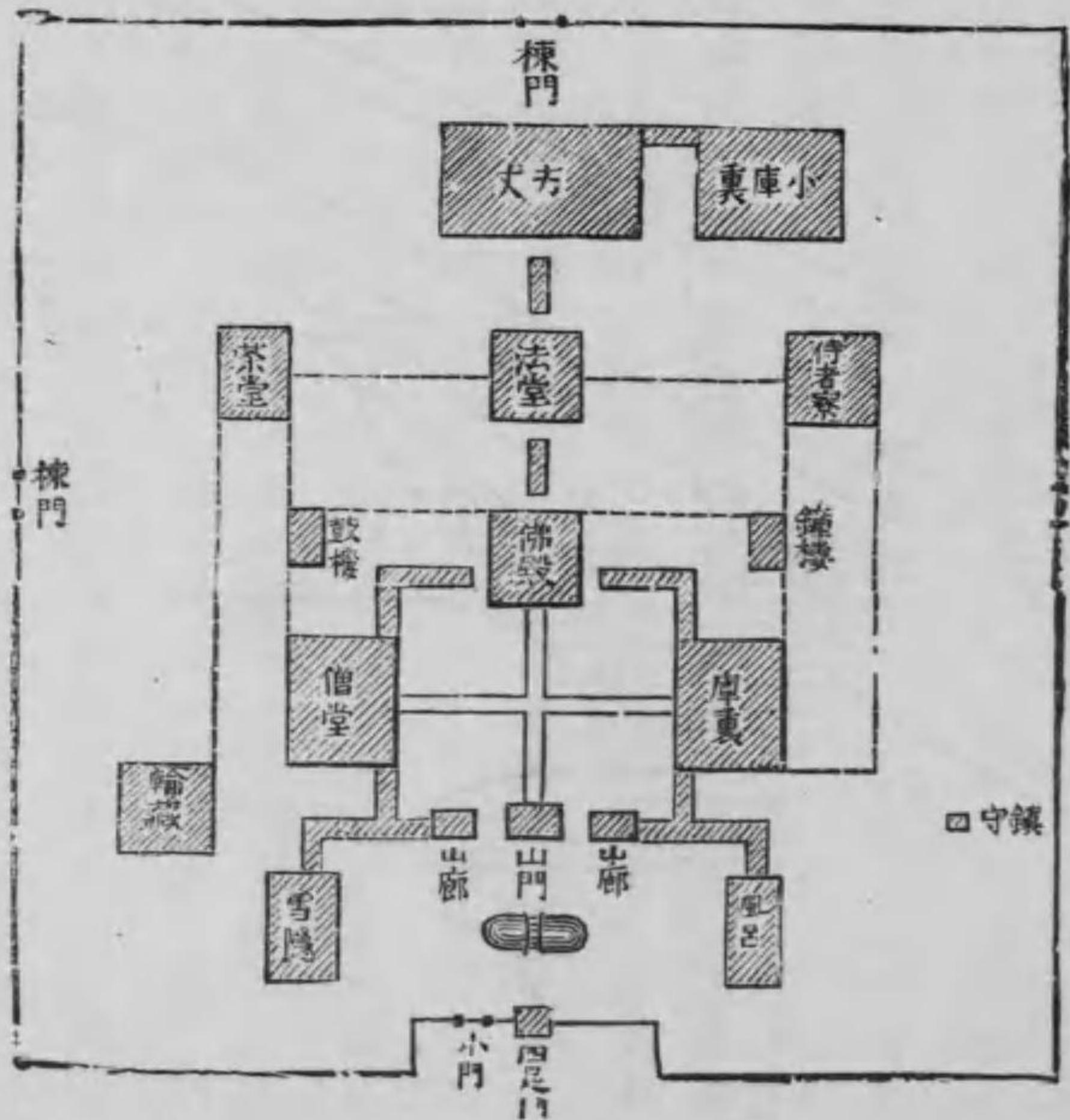
ども此等の寺刹には創立の儘存在せる堂塔最稀にして鎌倉圓覺寺に於ける舍利殿其の他前記の諸堂宇等を存するのみなり。  
佛寺建築の流派

- (a) 唐様宋より直輸入の建築法(禪宗派とも云ふ)
- (b) 天竺様宋風手法の建築法(又大佛様と云ふ)
- (c) 和様従來の建築法(即ち平安式)
- (d) 混合派(宋風を受けたる一種の形式)又觀心寺様と云ふ

右三派の内平安混合の二派は禪宗以外の宗旨にも行はれたり而して禪宗派に屬する手法を唐様と云ひ平安派に屬するものを和様と稱し本朝の初めに於て宋風手法輸入せられ南都東大寺に適用せられたるを天竺様と云ふ又混合派は和様と唐様と相接近し南北朝初期の頃より一種の流派を成せるものなりとす

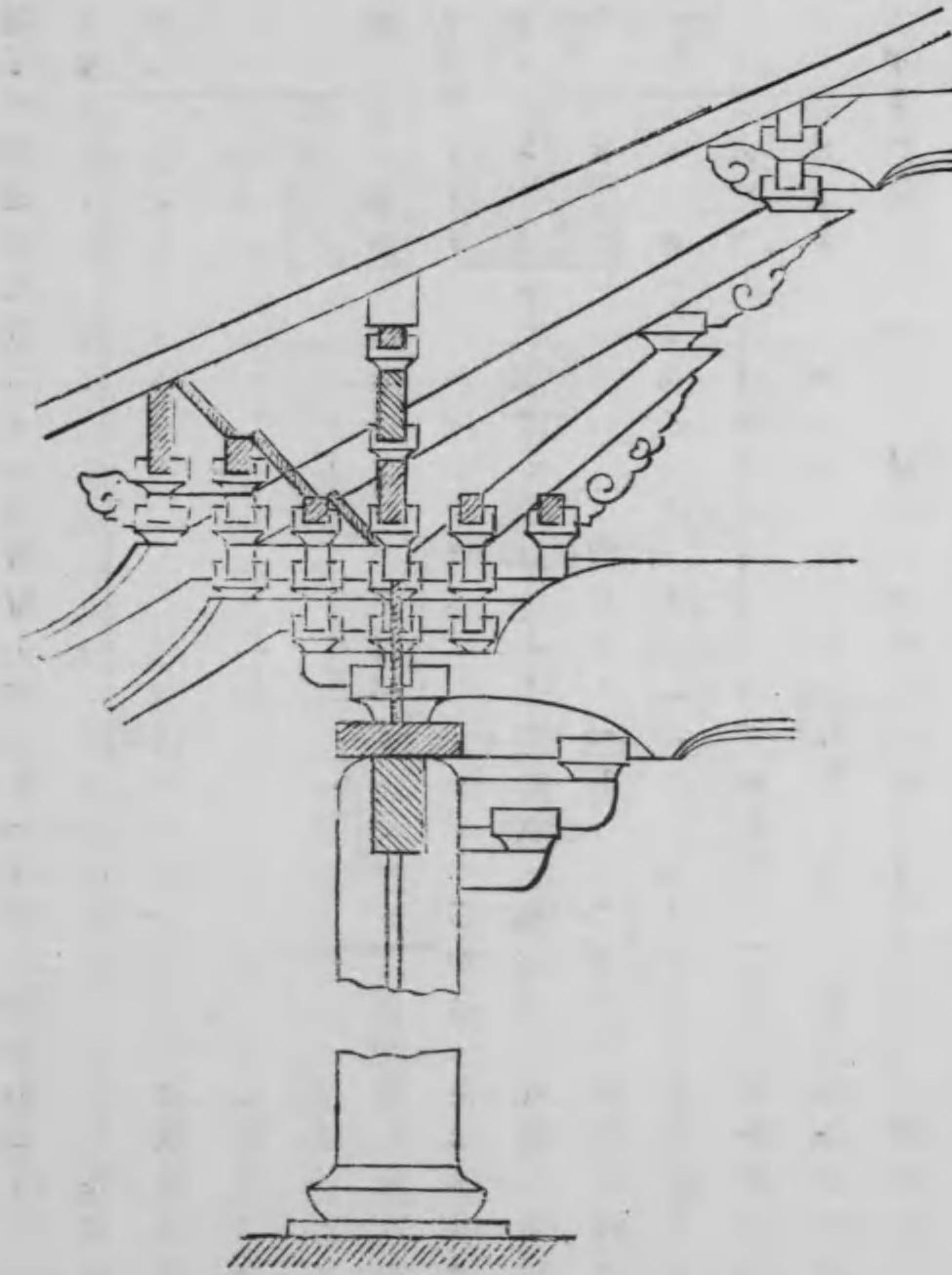
(a) 唐様  
建久二年僧榮西の宋より歸りて禪を傳へしより宋風の建築を用ひて禪寺を建立し其配置整然として多くは南面し外に單層の總門(勅使門)を置き其中に蓮池

第三百十圖  
禪家七堂之圖



を造り石橋を架し次で二層の山門あり又其兩側には山廊ありて山門の上層に登るを得せしめ門内に佛殿あり方五間乃至七間なり又其後に法堂あり其次に一畫を爲して方丈ありて庫裏之れに連なる其他鐘樓、鼓樓、經藏あり又東司(便所)、浴室、僧堂、鎮守等ありて寺の四方を築土にて繞らせり洛西の妙心寺は臨濟宗の本山にして稍や現今に至る迄其配置

第 百 三 十 一 圖



圓 覺 寺 舍 利 殿

を全ふし洛北の大徳寺も亦其設備を完ふせり(第百三十圖参照)  
 堂の構造は凡て二層にして床には瓦を敷き内陣の柱は高く二層の屋根を支へ  
 外陣の柱は廂を支ふるのみにして屋根は入母屋造り天井は板張りにして内外  
 共に白木造なりしなり。

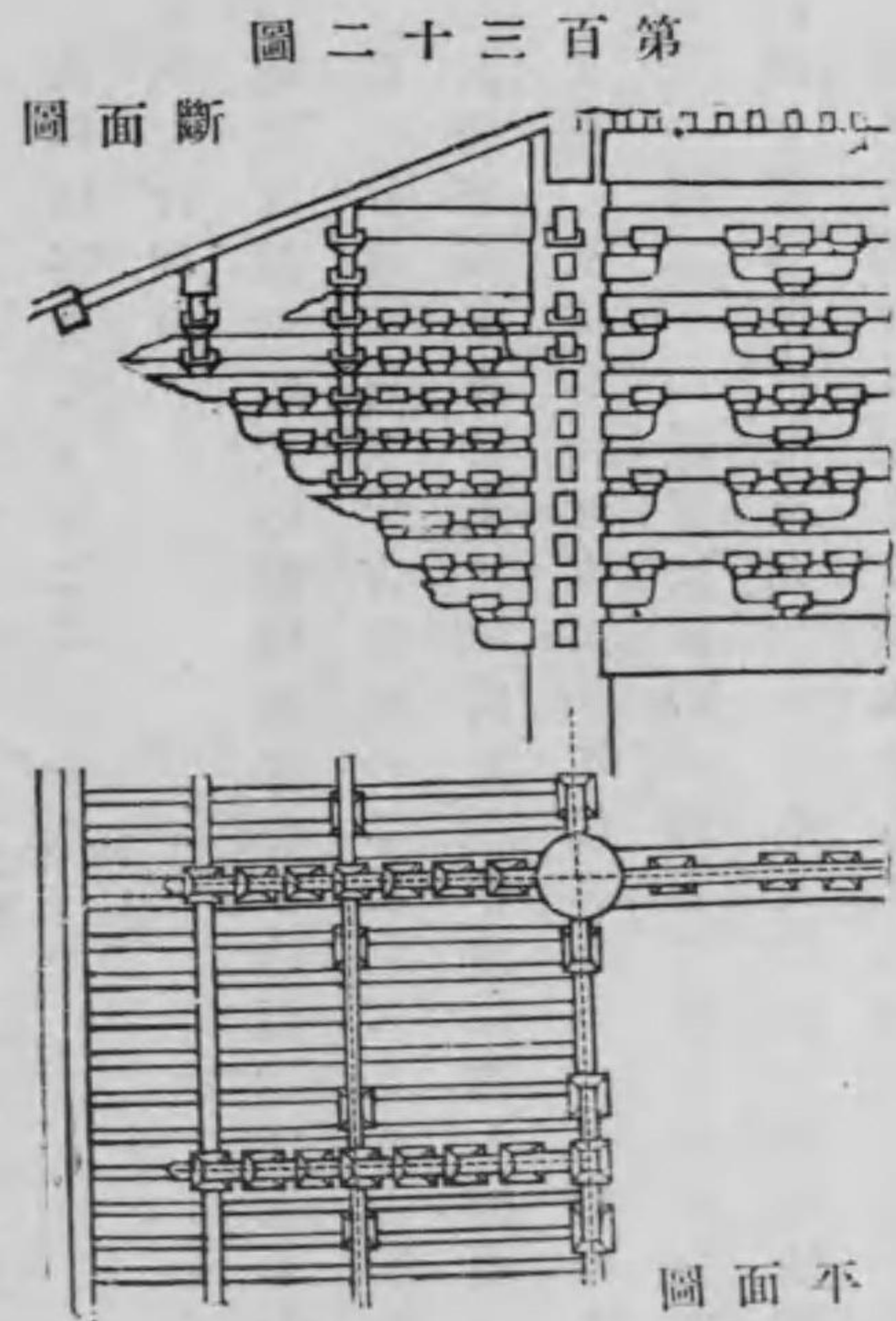
圓覺寺舍利殿

此堂は鎌倉時代の中頃建保長中の創建にして大倉の大慈寺にあり、弘安八年現  
 地に移建すと稱す方五間の二層造にして上層の屋根は入母屋茅葺なり又正面  
 に棧唐戸ありて上に欄間を設け透になし頭貫と飛貫間の欄間には弓形の格子  
 を附し吹抜きにせり又柱には粽ありて双盤の上に立て組物の尾極は裝飾的と  
 なり肘木下の線形は圓の一部となれり之れを唐様肘木と云ふ又二層目には扇  
 極を用ひ蝦虹梁エビコウリヤウ及大瓶束オウビンツカなるものあり其他頭貫の鼻飾尾極受けの持送りコシヨリ拳鼻  
 等あり此等は宋より輸入せられ此時代に新に起りし構造的及裝飾的新意匠に  
 して室町時代江戸時代を通じて現今に及ぼせり(第百三十一圖参照)

(b) 天竺様

(c) 混合派

前者は東大寺大佛殿を此時代に再建せし時宋風を加味して起りし方式にして



圖面平

東大寺大佛殿及南大門の如き其一例なり其特色は挿肘木を用ふることなり柱の中途より第三十二圖の如く肘木を差組になし卷斗の下に皿斗を置き第二卷挿圖參照多くは一軒にして茅負なく檼の鼻隠あり東大寺開山堂醍醐寺經藏東大寺鐘樓等

亦其遺例なり後者は組物に和様肘木及挿肘木を用ひ禪宗派と同一なる構造的及裝飾的新意匠を加へたり概言すれば從來のものに宋風を加へ手法自在に精巧となりしものなり觀心寺本堂の如き其一例にして最優美なる外觀を有す

圖二十三第

圖面斷

圖三十三第



東大寺鐘樓

(d) 平安派

此派は平安時代の連續にして殆んど構造上大差なく末期に至りて多少宋風を加味せり京都三十三間堂海住山寺五重塔大報恩寺本堂西明寺本堂室生寺灌頂堂及金剛三昧院多寶塔の如き其遺例なり

神社

此時代に於ては佛寺と同じく宋の影響を受け縁形彫刻を増加し殆んど寺院と大差なきに至り伽藍造充分に發達したり

宮殿及住宅

京都大内裏に時々火災あり大内裡

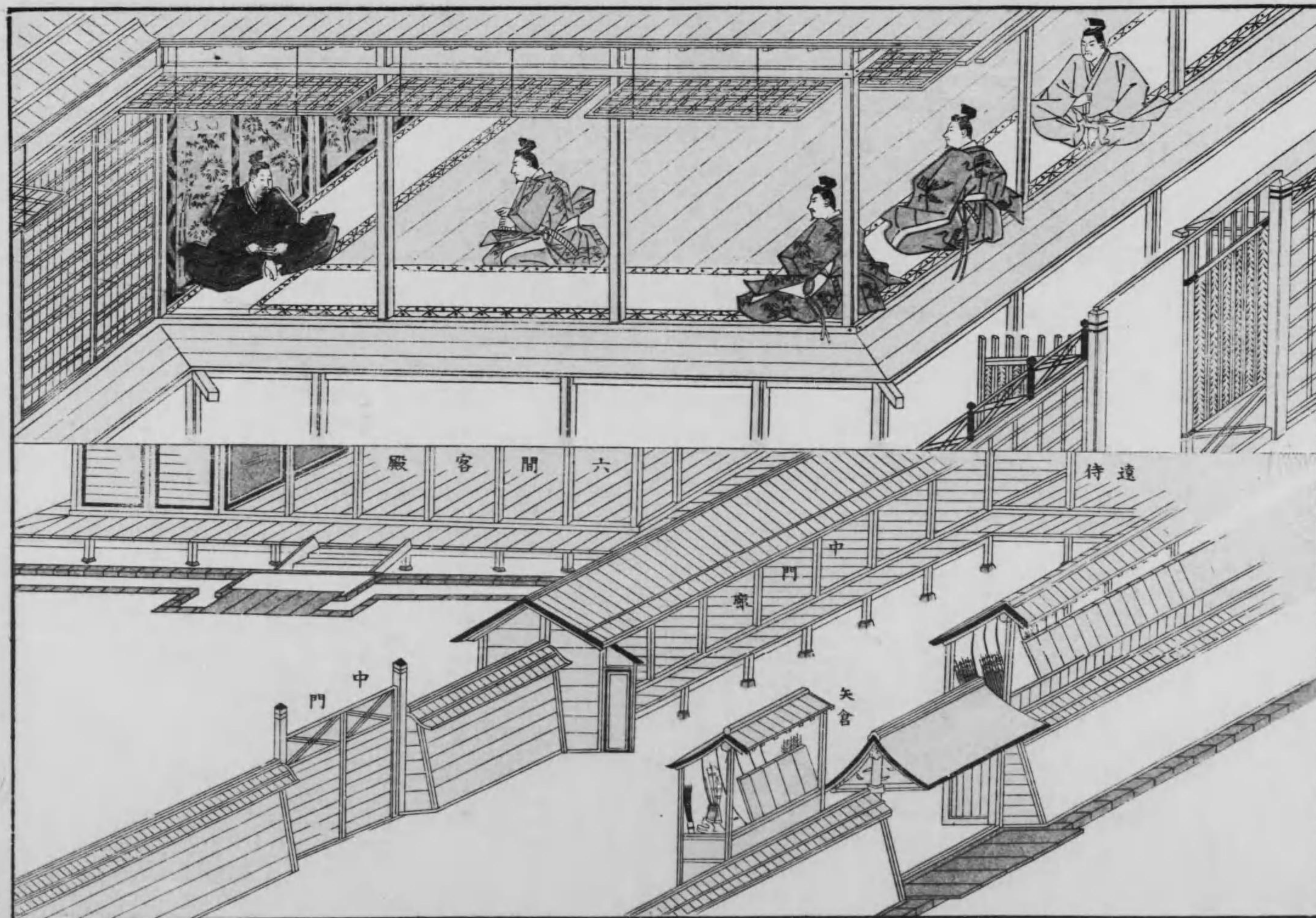
第三百四十四圖



の制は既に廢絶して所謂里内裡之に代れり里内裡は或は貴紳の邸宅を以て之れに充てたるものあり而して公卿其他は皆寢殿造に住むたりしが鎌倉に於ては武家造と稱する一種の形式を生ぜり其構造は寢殿造と其趣を異にせる極めて簡素なりしもの如く櫓門遠侍等あり櫓門とは門上或は其左右に矢倉を設け楯を廻らし番兵を置きしものにて遠侍とは明放し板敷の廣間にして兵士の詰所なり。

御殿内に勤務せるも外侍は遠しきものなれば交替にて遠侍に詰居りしものなり。

備考 此時代には領分内土着の農を兵士に使役せし者にして之れを外侍と云ひ領主の引連れたる家の子郎黨を内侍と云ふ而して内侍は



武家造之古圖



此時代の末には禪風に模して玄關書院等を設け又襖フスマを用ふるに至れり書院とは寢殿造の外に明障子アカリを附し一部造り出したるものにて書見するの用に供せり是れ後世に於ける書院造りの因となるものなり。

備考 第三百三十四圖鎌倉御所の圖は室町時代に於ける鎌倉武士の住居なるべし。

(5) 室町時代(足利時代)(延元元年室町開府より天正元年足利の亡ぶる迄二百三十七年間)

此時代には足利將軍京都に住し政權を掌握し殊に義滿、義政の如きは奢侈に耽り其邸宅を華麗に裝飾せり而して寢殿造は武家造と合し書院造に移り東山期に至りては點茶、聞香盛んに行はれ作庭の術、茶席建築等何れも此時代に素因を開けり當代遺構の重なるものは興福寺五重塔、東金堂以上和様(東福寺山門)唐様天笠様混合(鶴林寺本堂、金峰山寺藏王堂)混合派(鹿苑寺金閣、慈照寺金閣、東求堂及靈雲院書院等)にして東求堂内四帖半の書院は實に我國茶室建築の起原をなすものなりとす。

佛寺

前時代と大差なく禪風大に行はれ唯だ裝飾を増加せるのみにして墓股の如き

は内部を透彫の彫刻にて充たすに至れり而して天笠様は殆んど其の痕跡を止むるのみなるも混合派は益其の特質を發揮して建築界の中心勢力となれり。

二六〇

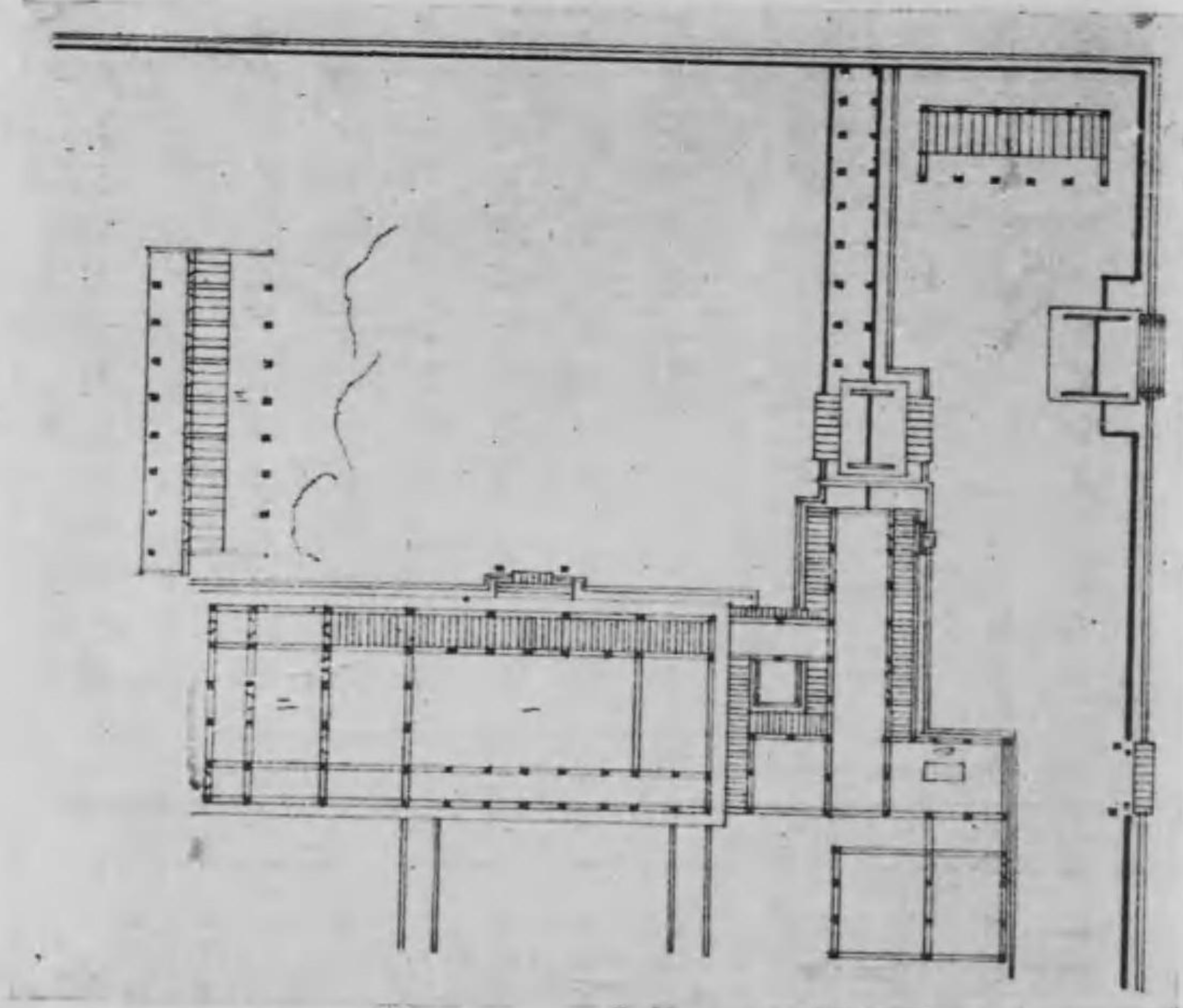
神社

鎌倉時代に於て不活潑なりし神社建築は當時代に入りて多くの重要な者を出し諸種の變態を生ぜり。錦織神社本殿が入母屋造に向拜を葺下し千鳥破風軒唐破風を有するが如き、御靈神社本殿が春日造の後部を入母屋とせるが如き、建水分神社が其中殿を一間社春日造とし左右殿を二間社流造とし後廊を以て連結せるが如き、今八幡宮社殿が其配置に新機軸を出せるが如き、吉備津神社が最奇異なる平面形態を作り出せるが如き其の最顯著なる者なりとす。

宮殿及邸宅

此時代の初期には足利氏權勢を有し義滿の如きは皇居を造營せしも其中期に至りては京師は戰場となり義政の如きは東山の別天地に在りて自から遊樂にのみ耽りしも奉公の念に乏しく亂治まりて還幸ありし皇居は修繕毫も行はれず左近の櫻の傍にて茶を煮て賣るものあり紫宸殿は小兒の遊戯場となり市街

第三百五十五圖  
高倉邸



(一) 舍身 (二) 寢殿 (三) 御殿 (四) 大爐

より宮内の燈火を望見し得たりと云ふ其當時の光景は實に想像の外なりしなるべし。  
足利氏の邸宅は大要公卿の寢殿造に倣ひ之れに必要なる武家造を加味したるものにして從來質朴を尙びし者此に至りて一變して宏壯のものとなれり而して末期に至りては純然たる書

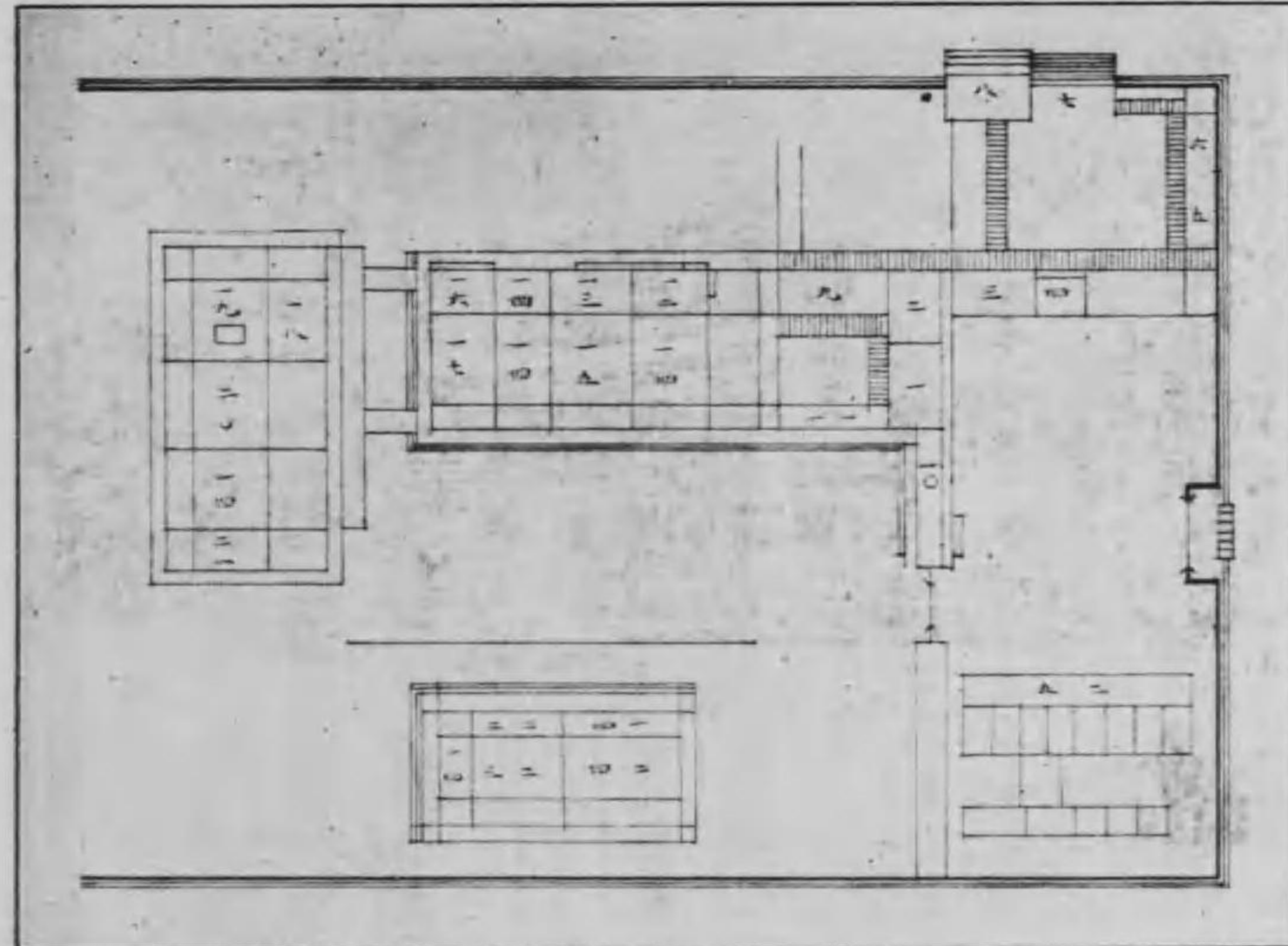
第三百七十七圖



金 閣 寺

ものは北山金閣寺鹿苑寺東山銀閣寺(慈照寺)等なり。  
**金閣寺**  
 義満の室町御殿は應永四年に造營せられ其規模宏大なりしものにして園を繞らし寢殿造の遺風を存したりしも惜ひかな金閣の外は皆焼亡せり。  
 金閣は義満の歿後寺となせしものにして下層は五間三面優雅なる三層造にして柿葺なり其周圍には濡椽ありて前に入側あり又内陣は極彩色其他は白木造鏡天井にて正面五間は

第三百六十六圖  
 近衛東洞院の邸

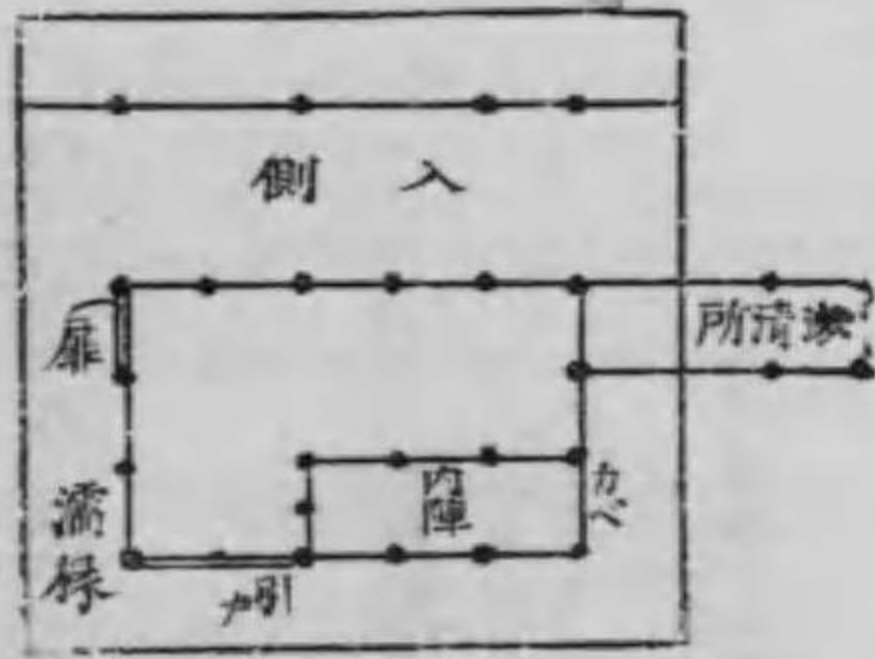


- (一)殿上の間
- (二)公卿の間
- (三)小侍の間
- (四)渡廊
- (五)宿直の間
- (六)隨兵所
- (七)大倉
- (八)天倉
- (九)御會所
- (十)中門廊
- (十一)渡廊
- (十二)御對面所
- (十三)御寢所
- (十四)御餐所
- (十五)御西向
- (十六)納殿
- (十七)御化粧の間
- (十八)御帳
- (十九)御對面所
- (二十)御便所
- (二十一)御上
- (二十二)内上
- (二十三)内上
- (二十四)内上
- (二十五)内上

二六二  
 院造となり次の桃山時代の大成したる書院の前驅とはなれり其中最有名な義詮の三條坊門萬里小路の邸義満の室町北小路の邸(四時花を絶ざるを以て花の御所と云ふ)義政の高倉の邸等なり而して創建の儘現今迄存する

部戸側面には扉あり又池に臨みて嗽清所あり(第百卅七圖及第百卅八圖參照)  
 二層目には中央に須彌壇ありて黒漆塗なり又天井は極彩色にして周圍に模様あり柱も黒漆塗にして三層目は金箔を塗り極彩色を施し唐様の三斗組あり軒廻りは二軒にして疎垂木なり又窓は瓦燈窓なり。

第百三十八圖



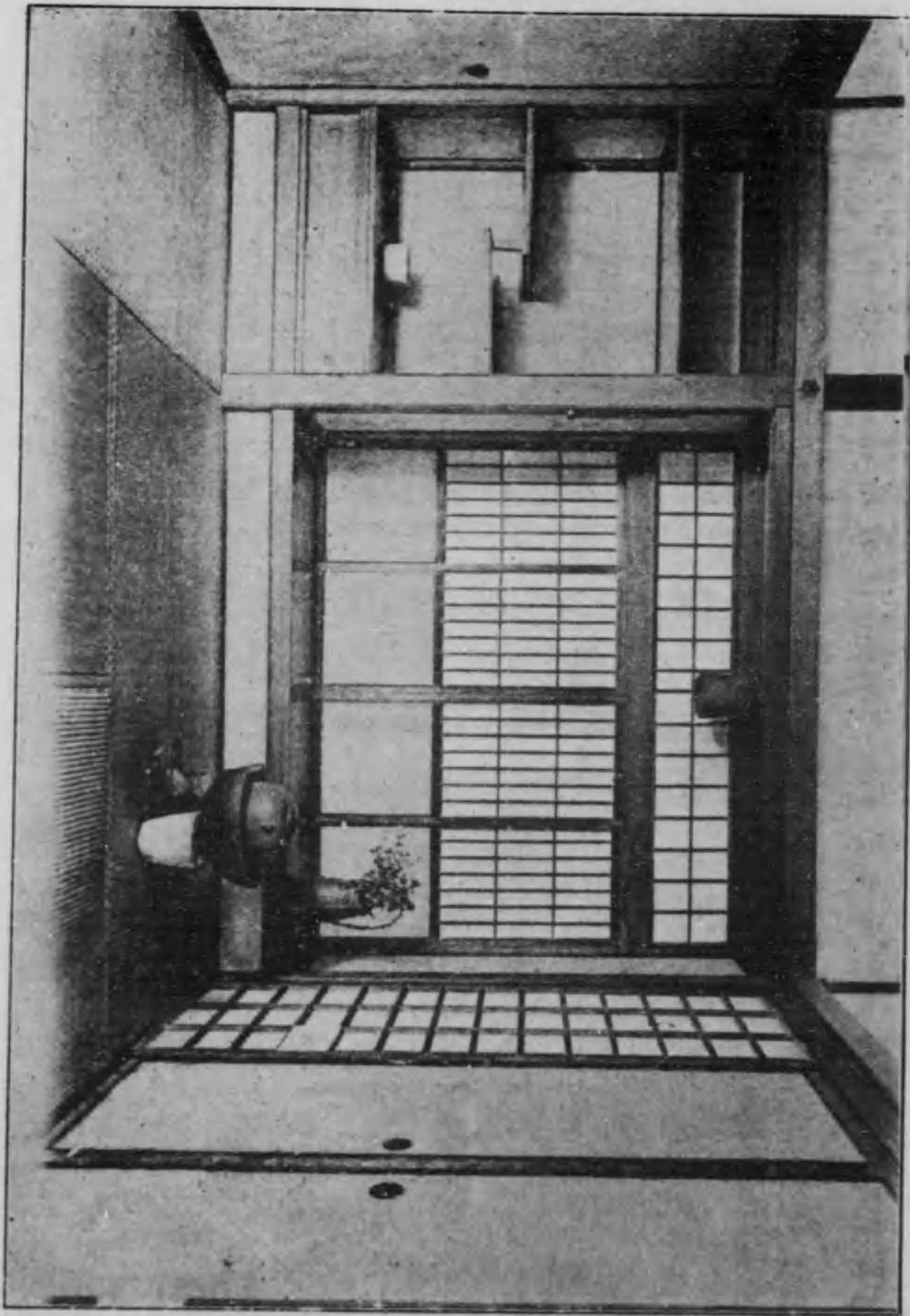
金閣の平面圖

銀閣寺

要するに金閣は凡ての木割華奢にして手法簡易淡白大に禪味を帯び其極彩色及金箔等の裝飾は天平時代に於ける寺院の手法を邸宅に復興せるが如く桃山時代に於ける裝飾の起因となりしなるべし又従來は普通平家なりしかば三層樓閣の構造は是れを以て嚆矢とす。

義政の東山山莊は文明十二年に造營せられ結構莊麗を極めしも凡て火災に罹り獨り銀閣のみを残せり其構造は金閣に模し二層建にして上層は漆塗なり又當初義政は銀箔を置くの計畫なりしも果さずして薨ぜり。

第百三十九圖

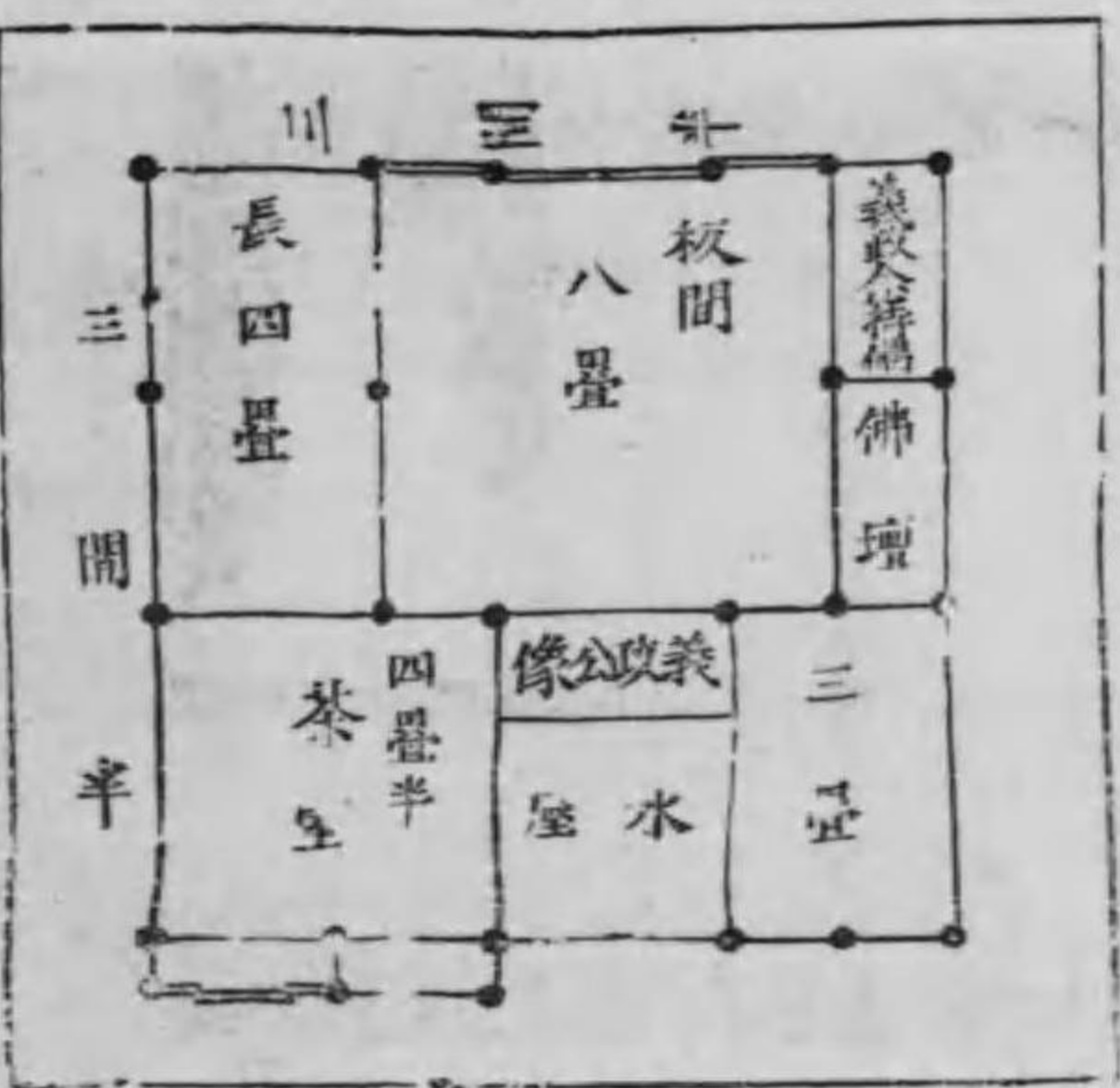


東山山莊の茶室

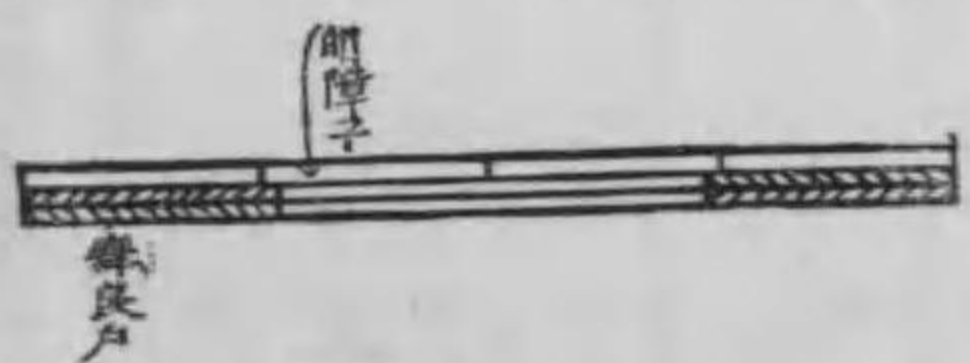
東求堂

此室は文明年間に建造せられたる義政東山々莊の持佛堂なりしが此時代の邸宅を研究するの好材料にして堂内四疊半の茶室は本邦に於て茶禮に要する特別なる建築の濫觴にして後世に於ける園なる名稱は其起原茲に存す(第百三十九圖及第百四十圖參照)

第百四十四圖



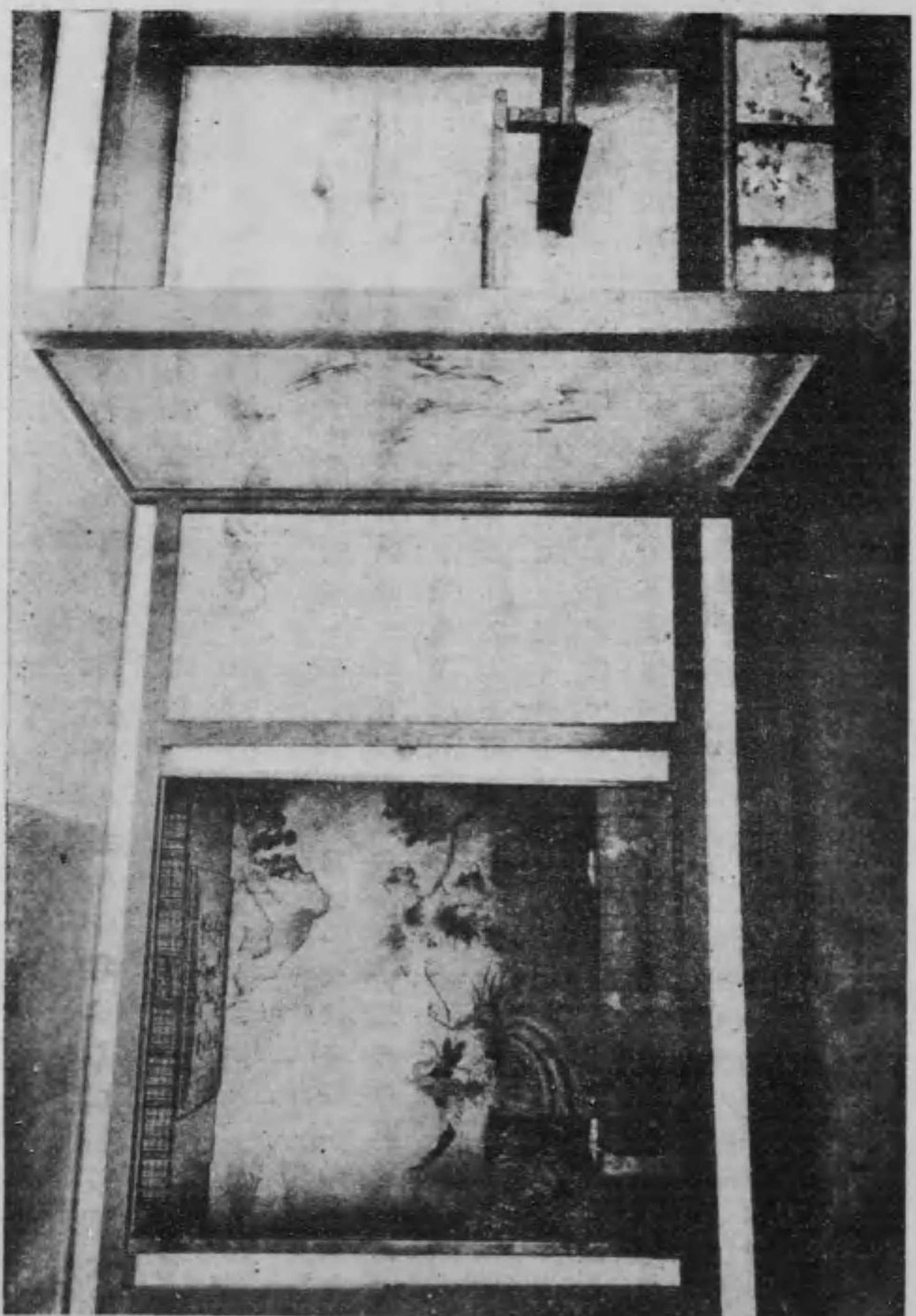
第百四十一圖



此堂は單層にして屋根は柿葉入母屋なり又破風の間には木連格子俗に狐格子と云ふ中村博士は妻格子の妻を爪と書し其狐と云ふ字に似たるより變化せしならんとの説なり或は語便

此堂は單層にして屋根は柿葉入母屋なり又破風の間には木連格子俗に狐格子と云ふ中村博士は妻格子の妻を爪と書し其狐と云ふ字に似たるより變化せしならんとの説なり或は語便

第百四十二圖



靈雲院書院の内部

の變化ならん)あり又柱は凡て角柱にして其上船肘木あり軒は一軒にして殊に出多く勾配は緩し要するに此構造は木割細く最も優雅にして書院造に移らんとする變化時期を示し未だ床の間なく唯だ出し棚袋戸及附書院ありて濡椽と室との間には舞良戸、明障子等を用ふ(第四百四十一圖参照)

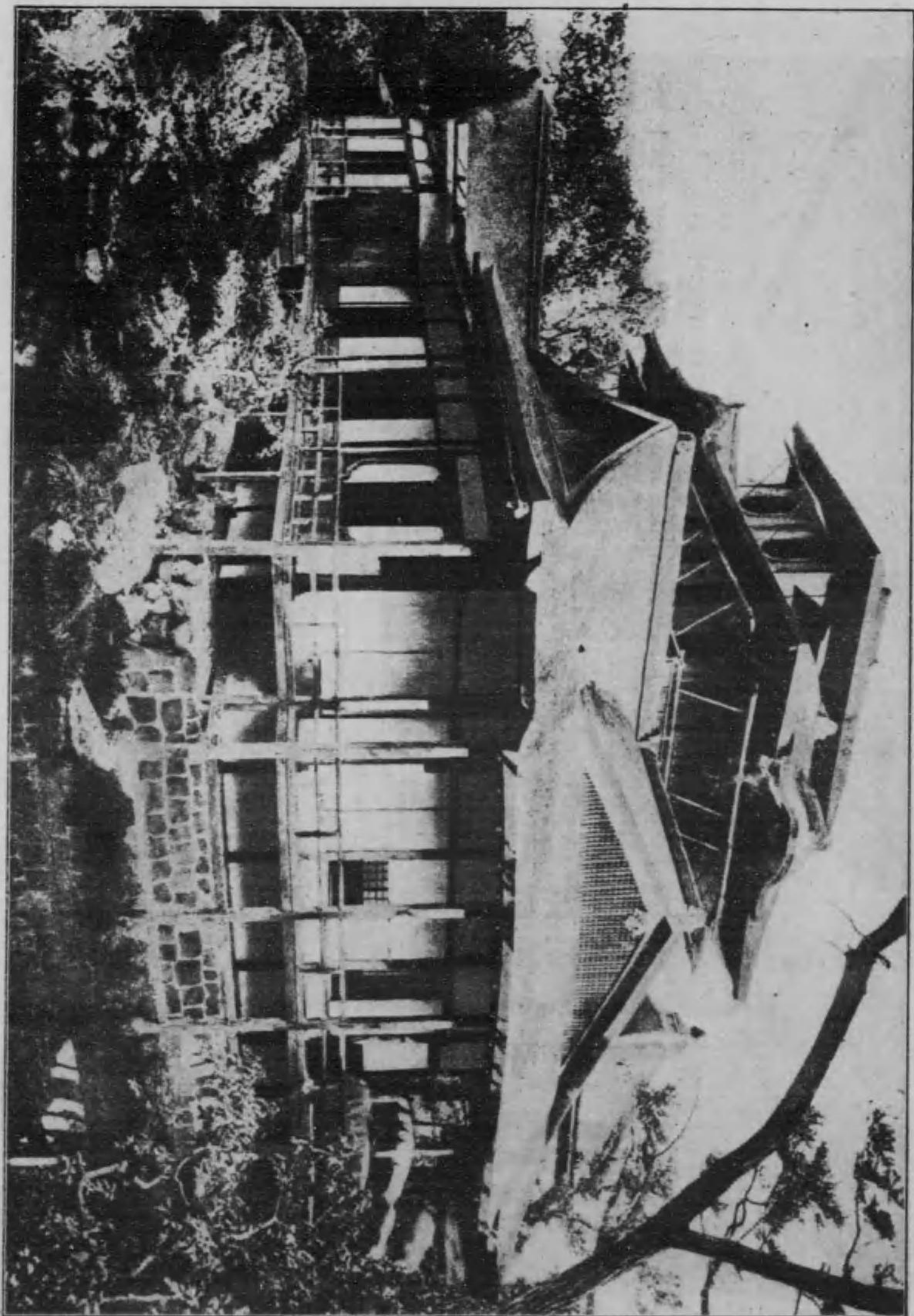
備考 床の間は寝殿造時代に御帳臺と稱し賓客の爲め一段高き臺に疊を敷き對面したるものの遺風なりと云ふ(建築雜誌第二百二十號前田健治郎氏の説参照)及考古學者は古代の横穴中の壁際に一段高き所あるを發見し床の間の起原にして寝所に用ひしものなるべしと云ふ其説當を得ざれとも甚奇なり或人は佛壇の略にして鎌倉時代の末には壁に佛畫を掛け其前に押板を置き板上は燭、香爐、花瓶等を載せたるより書院造となり床の間を設くるに至りても正式にては三福對を掛け香爐花瓶等を置くなりと云ふ又棚は厨子を壁に作り付になしたる者なりと云ふ舞良戸は(第二卷にあり)此時代に起りし者なり又明障子は腰高になし舞良戸の内側に設く應仁の亂以後即ち銀閣建設以後は公卿も武家も大方書院造となり一般に疊を敷き詰めたる床となりしが如し而して疊は寝殿造以來薄きものにて幾枚も重ね敷き貴賓の御座を造りしが故に室内全體疊敷になりたる後も御座敷とは稱するならん。

### 靈雲院書院

大永年間大休和尚の時創建後奈良天皇和尚に歸依し此處に臨御ありしと云ふ上段、下段、脇の間の三室より成り上段には玉坐を設け下段には袋戸棚あり共に猿頬天井を作り、脇の間には床を附し掉縁天井とせり、規模小なれども其の床の間、違棚を設け舞良戸、腰高障子、襖障子、帳台飾を用ひ、掉縁猿頬天井を作る等純然たる當代書院造の好模型なり、其の柱、長押、垂木等は頗る繊細にして屋根は柿板を以て葺き勾配極めて緩なり(第四百四十二圖参照)

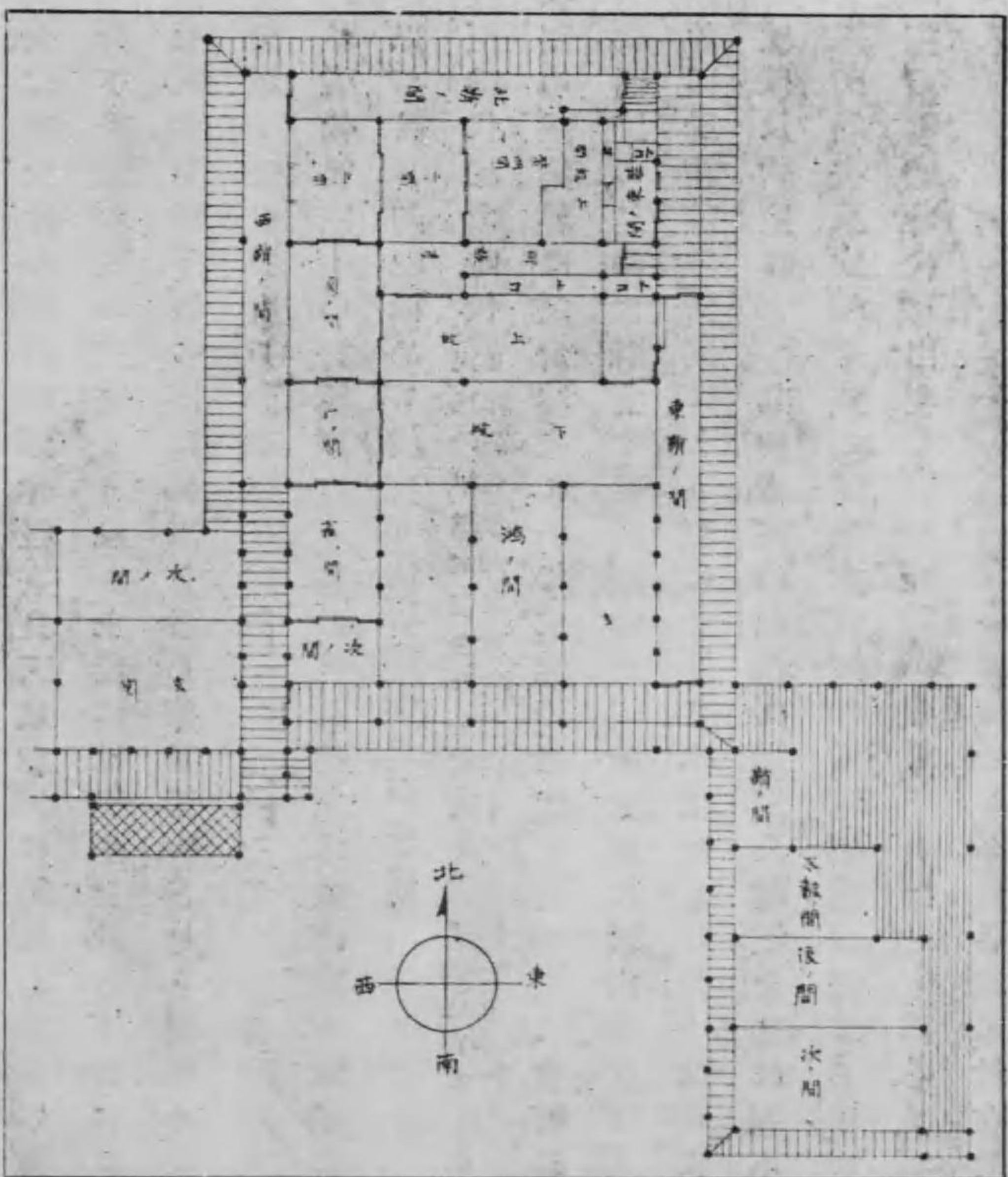
(9) 豊臣時代、桃山時代(天正元年織田信長の足利氏を亡ぼせしより元和元年大阪落城迄四十三年間なり)

我國の建築界は鎌倉時代に於て宋元の影響を受け以て室町時代に及び、其間漸次我國の趣味に肝養せられ、發達せり雖も、更に桃山時代に入り其急激なる積極的國民精神の活躍により更に一層日本化せられたり、此時代の建築は主として城壁及宮室にして、其の宮室の如きは彫刻及繪様を盛に適用し隨所に極彩色を以て繪畫及文様を施し障壁亦富麗なる極彩色に配するに金壁を以てし一面繪畫の障壁時代を出現し、豪華壯麗の氣象を發揮せり、而して其の遺風は次の江戸入りても猶ほ寛永寛文の頃まで持續せり、今日各地に散在せる聚樂第及伏見



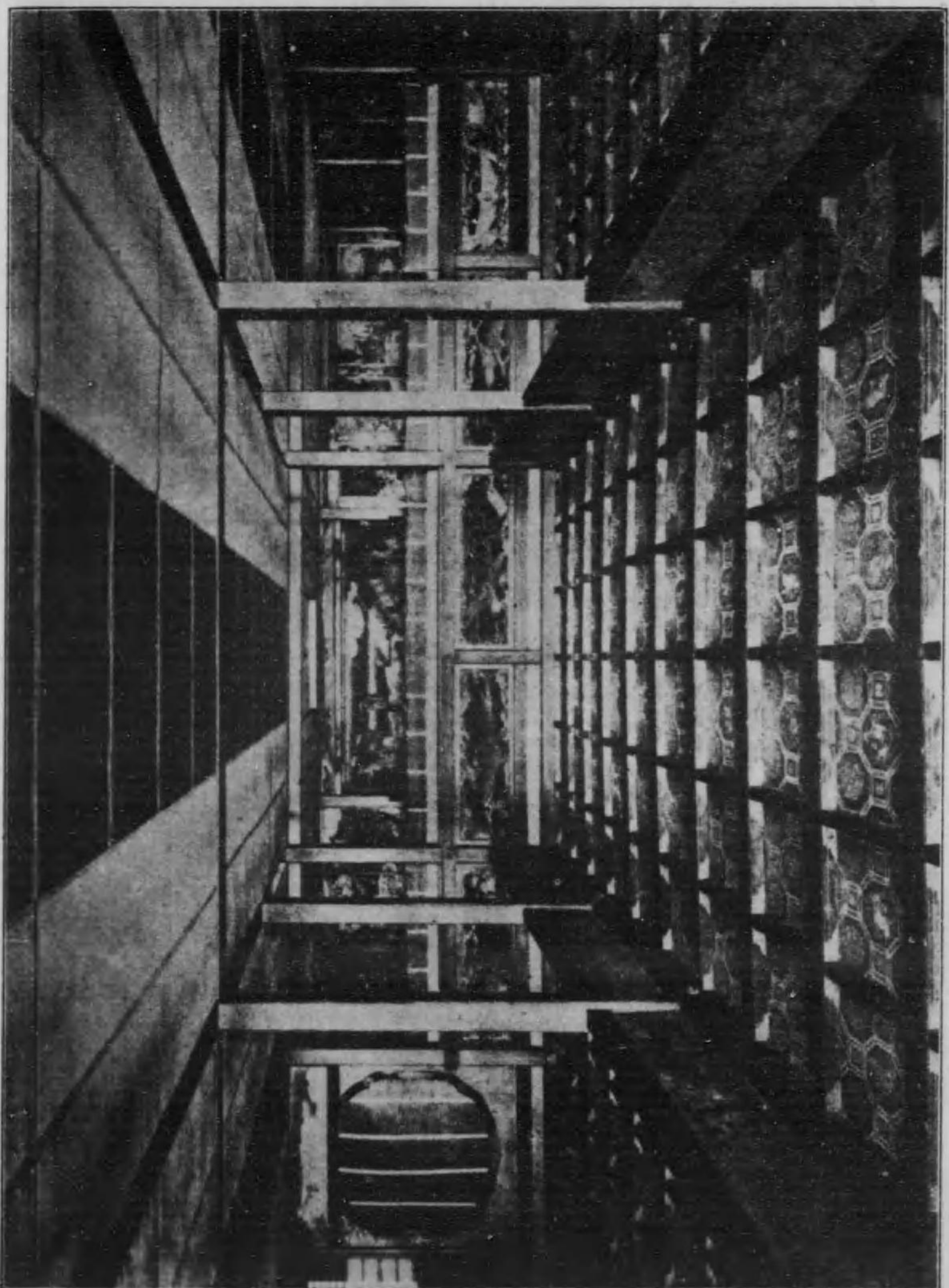
第百四十四圖 西本願寺飛雲閣

第四百三十三圖



西本願寺書院の平面圖

城の遺構は實に其眞髓を語て餘すなし而して當代の建築として城堡建築には大坂伏見の二城あり其の代表たるべく廟建築には



豊國神社あり後世の典型となれり。寺院建築に於ては方廣寺大佛殿の經營を以て特筆すべきものとし茶室建築にては有名なる千利休出で、風流簡卒なる趣味を興し以て斯道の範を垂れたり。遺構の主要なるものは、南禪寺方丈、仁和寺金堂、天正造營の紫宸殿、本願寺飛雲閣、同書院、唐門、豊國神社唐門、都久夫須麻神社拜殿、以上伏見城遺構、大徳寺唐門、聚樂第遺構、同三門、醍醐寺三寶院殿舎、瑞嚴寺本堂及玄關、大崎八幡宮社殿、北野神社々殿、相國寺法堂、教王護國寺金堂、山崎妙喜庵等なり。

宮室及城廓

永録十二年勤王の志深き信長は京都に入るや戦亂の爲め甚敷荒敗に委ねたる大裏を造營したり其後天正十八年秀吉も亦造營に従事せり城廓は此時代に非常の發達を爲し信長は近江國安土に堅牢無比の城を築き七重の天守矢倉を建て日本の築城術に一生面を開けり此計畫には當時渡來せる西洋宣教師も亦與かりしと云ふ而して其構造最莊麗にして最上層は布卷き黒漆塗とし金箱を置き種々の繪畫を盡さしと云ふ而して城堡の矢倉には大矢狭間塗込造と高欄付



塗込造と住宅風を加味せる火燈窓等を有せる塗込造の三形式を生ぜり。

備考 天守矢倉の形態は殆んどシヤム國數層の樓に彷彿たるものあり又天守の名は天主教より起るとの説あり横井文學博士も天主臺は葡萄牙の宣教師の幾分か南蠻風を模せしには非るかとの説を日本工業史に掲げられたり安土城の天主閣に關しては土屋工學士之を建築雜誌に詳述せり

又秀吉は京都に聚樂城を造り天主矢倉を設け城内には宏大なる殿舎建築を爲せり故に又聚樂第とも云ふ現存せず伏見城も秀吉の築く所にして元和年間徳川氏は之れを破壊して諸所に移せり。

當時代宮室の模様は先に記したる聚樂第伏見城の遺構に依り其規模宏大にして華麗比類なきを窺ふを得べしと雖とも今其の代表的一例を舉ぐれば京都西本願寺の書院なりとす。

#### 京都西本願寺書院

伏見城遺構の最大なるものにして其平面は第四百四十三圖の如く其主要なるものを鴻の間と稱し廣深各九楹の大堂中に二列の柱を配し豎に室を三分し其北端に上段を設く上段の中央に淺き床を作り其左に帳臺構を設く上段の右に更

に床を高くして大なる書院を附加せり壁及襖の繪畫天井の模様欄間の彫刻皆頗る美なり鴻の間の後に紫明の間あり上段より西に下りて二の間三の間に至り南に菊の間あり其の南に雁の間雀の間ありて鴻の間に接す其の柱大さ七寸面八分柱間の雖離六尺五寸書院に附屬して玄關浪の間太鼓の間等あり又桃山豪宕の風あり別に能舞台あり又當時の遺物にして最古の實例なりとす第四百十五圖は鴻の間の内部を示す。

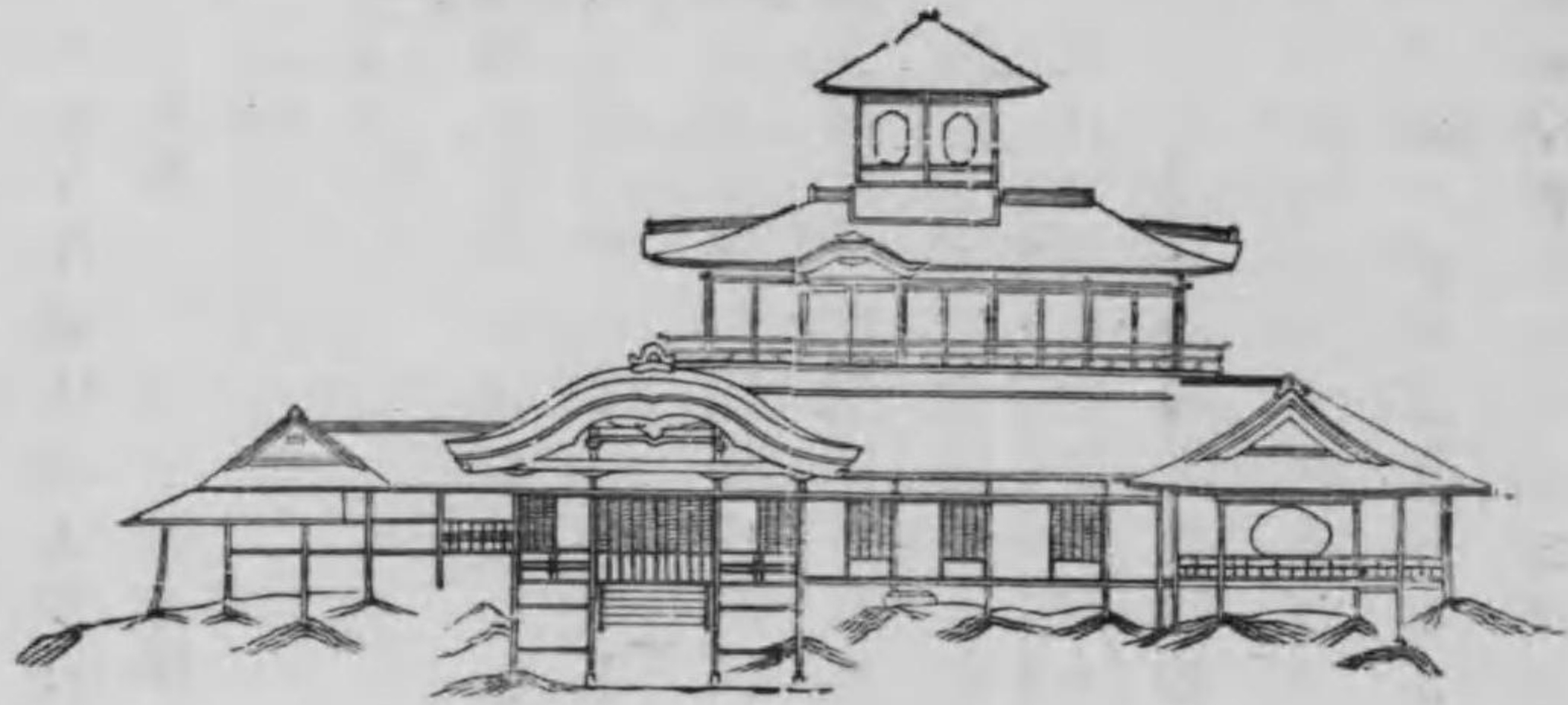
之の他園城寺光淨院客殿亦當代の遺構の一にして其形式は能く室町時代の主殿造りと稱する様式を存す。

備考 城廓に付ては建築雜誌第二百九號に大澤工學博士の和城と題せる演説あり宜しく參照すべし。

#### 邸宅

此時代の邸宅は書院造の漸く完成せるものにして建物の平面配置は不規則なり又角柱舟肘木蓐股等を用ひ屋根は多く檜皮葺なり又内部の裝飾に深く意を用ひ重要な室は上段下段と區別し床を段違となし房室は總て疊を敷詰むる

第四百七十七圖



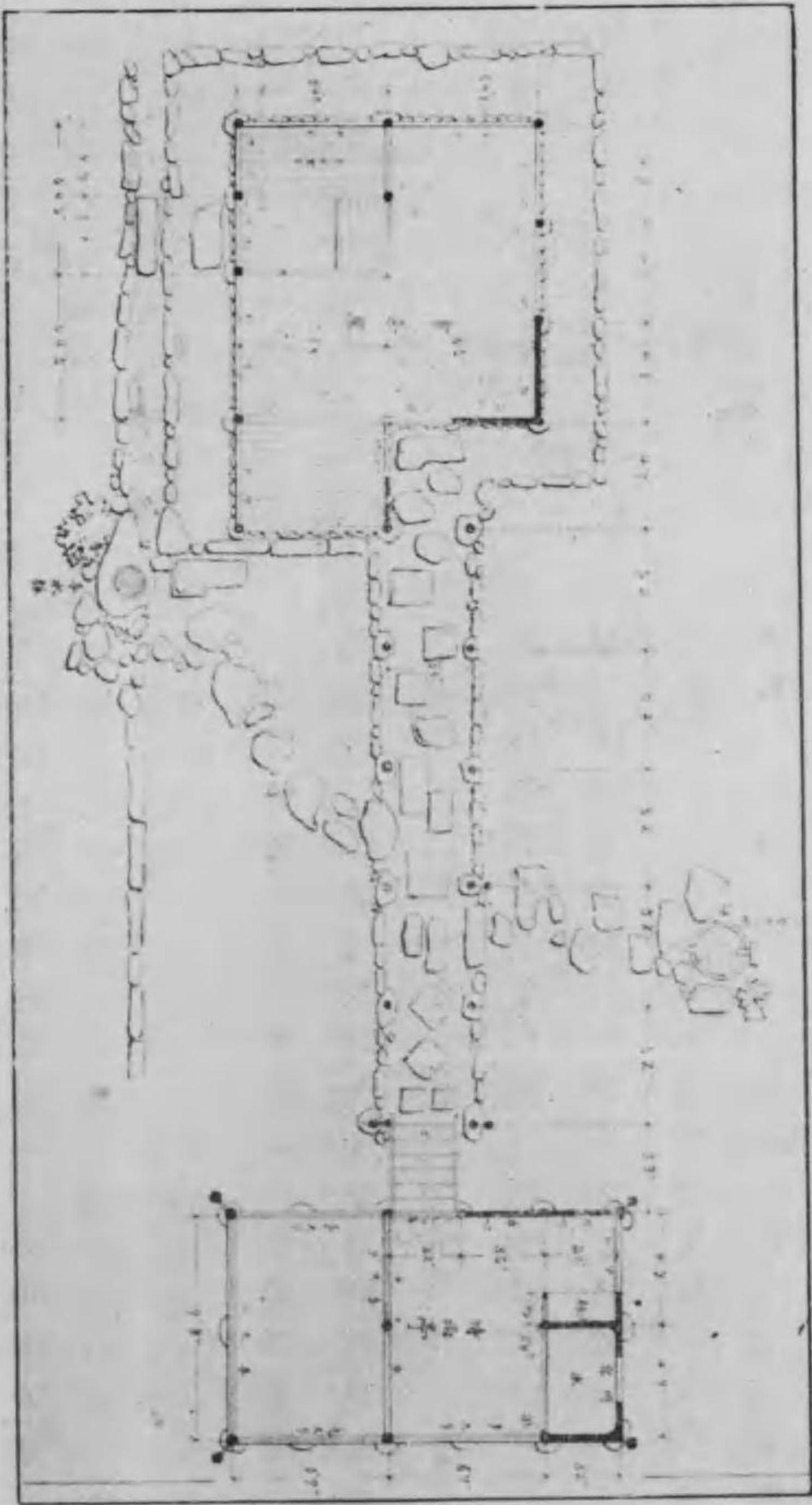
飛雲閣の圖

茶室

城の如きは瓦の端に黄金を塗り百間廊下に黄金の燈籠を釣りしと云ふ其壯觀想ふべきなり。然れとも其規模小なる邸宅の遺例は極めて稀なり。

茶道は禪宗と共に本邦に入り常に禪僧の間に弄ばれし以來足利時代には貴族的遊戯となり次で珠光紹鷗出て、富貴華麗の風を一變し淡泊靜閑の式法となし其後利休に至つて前人未發の機微に達せしなり茶室を數寄屋と云ふは此時代より起り其平面は最も幽靜閑雅便利に注意し其地相に應じて出入口を異にして天井の高さ床の高さ柱の大きさ腰張りの高さ及其の

寺雨亭及金茶屋平面圖



第六十四回 第

とし格は黒漆を以て塗り格間には彩色模様を畫き欄間、門扉等に彫刻を施す等金碧燦爛たりしは明かにして大阪城、聚樂第、伏見城等の建築皆此式に則り伏見

ことなり襖壁等には多く金箔を押し繪畫を施し天井は格天井又は折上格天井

色と壁色の配合等の如き利休の天才により大成せられたものといふべし而して佗の眞意を味はん小茶室は一帖半より四帖半にいたり尙ほ六帖十帖及上段付書院(十帖上段二帖)の如きものを作れり。

## 茶屋

茶室と邸宅と混合せし構造を茶屋と稱す京都に於ける桂の離宮は秀吉の正親町上皇の爲めに造献せるものにして高雅なる構造は一種の風致を生じ特に襖の引手高欄釘隠等の意匠頗る佳なり飛雲閣も亦此種に屬す(第四百四十七圖參照)飛雲閣は元聚樂第に在りしを元和元年西本願寺に移建したりと稱す三層の小閣にして滴翠園中に在り滄浪池に臨む其初層に二室あり左を招賢殿と云ひ上段には前に出書院窓あり入母屋の屋蓋を備へ右の次の間には前に船入の間あり其の上に唐破風を架く二層は上段下段より成り周圍に椽を設け勾欄あり屋の前面及左右に軒唐破風を架く三層は之を摘星樓と稱し寄棟造の屋根を載す全體の形狀奇巧にして輕快瀟洒の趣あり蓋し當代住宅建築等の好型たると共に書院造より出て茶席趣味を攝取したる當代の獨創的建築たり(第四百十

## 四圖及第四百四十七圖參照)

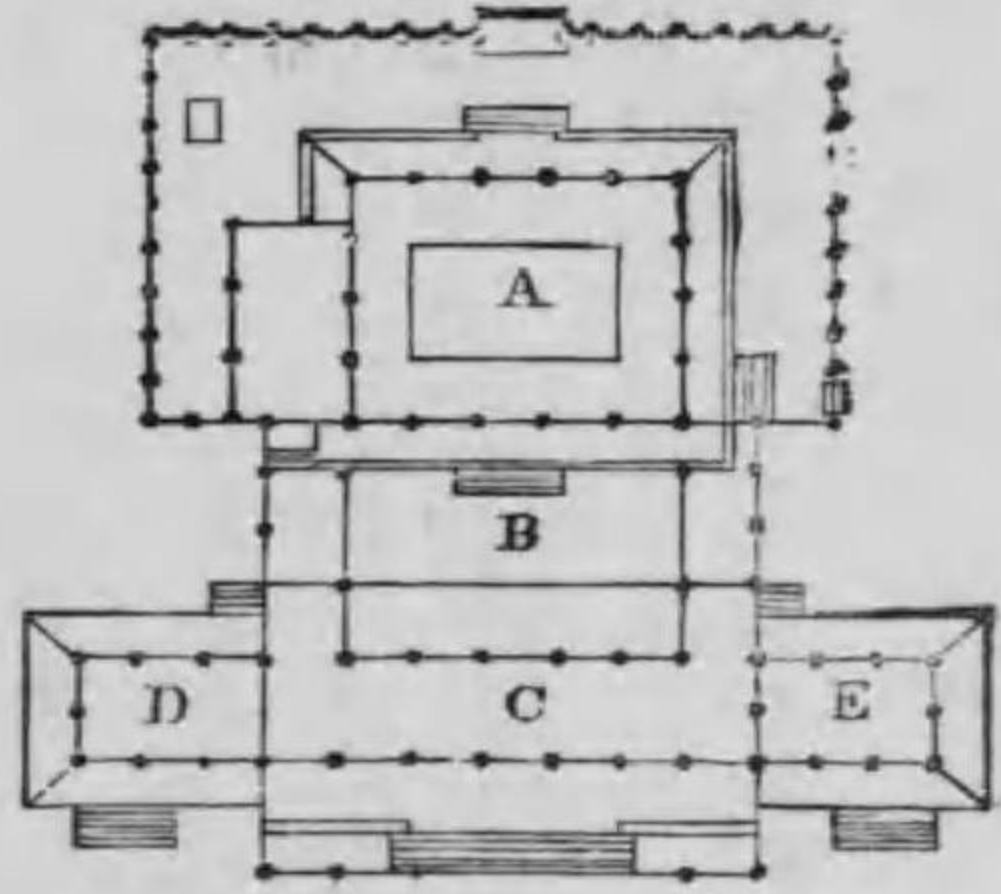
又別に一種の遺例あり時雨亭及傘茶屋之れなり時雨亭及傘茶屋は元伏見城にありしものなりと稱し南の二階造りの小樓を時雨亭と呼び北を傘茶屋と云ふ此の兩者の間を輕快なる土廊下を以て繋ぎ全體の調和甚だよく又頗る高雅なり時雨亭の階上は茶室とし下は内待合を用ひられ土間なり傘茶屋は平家造にして小屋組は自然の皮付丸太を以て組み化粧裏は竹を以て扇槌とす(第四百四十六圖)

## 神社

此時代も神佛融和せるを以て神社と佛寺の間に區別なく遂に新に權現造なる一様式を生ずるに至れり此形式にては舊來本殿と拜殿と各獨立せしを中殿にて連絡し一塊の建築物となしたるなり。

備考 中殿は後期に至り拜殿と同じ高さに床を張りしも初期には土間の上に屋根を設けしものにて石の間或は合の間と唱へしなり。

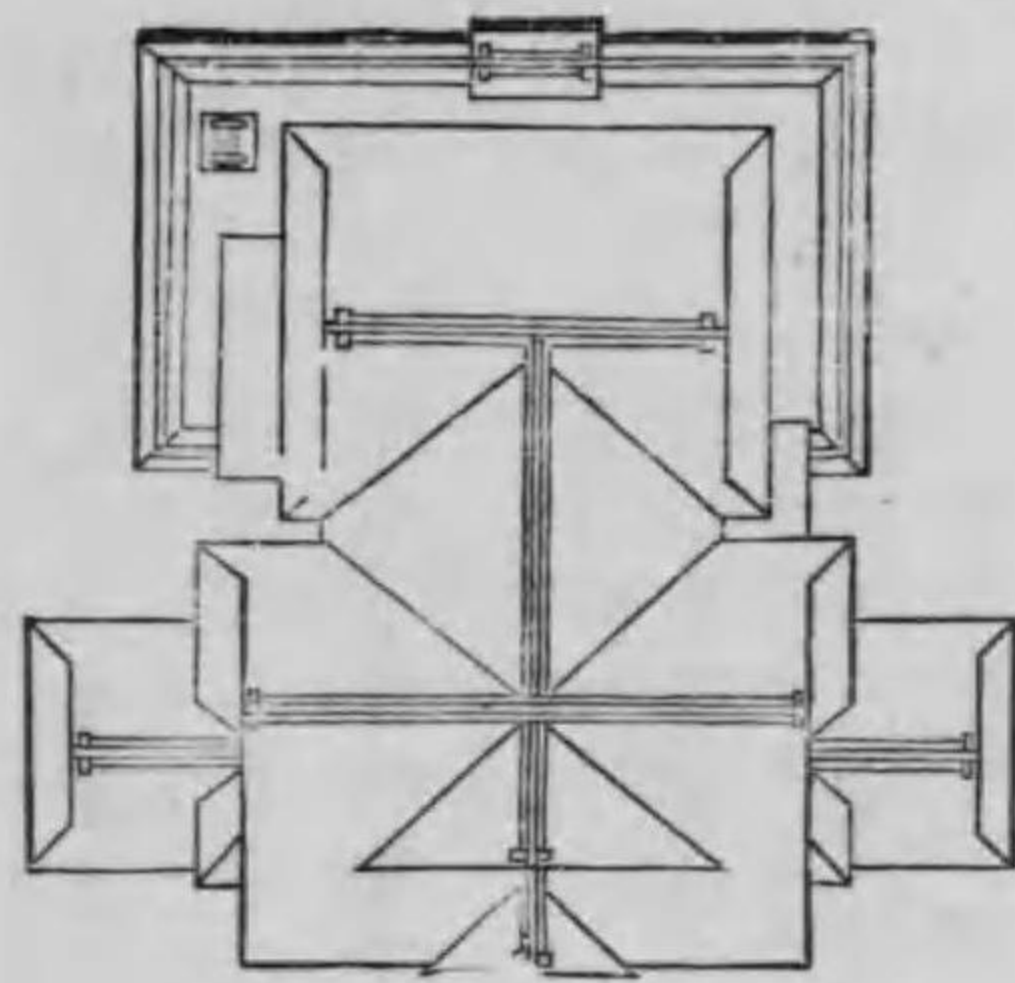
此時代に於ける權現造の一例は京都に於ける北野天滿宮にして應長十二年豊



圖面平 野北 A B C D E  
奏樂ノ間 拜殿 殿 殿 殿

臣秀頼の片桐市正を奉行として造營せしめしものなり而して此形式は樓現造の中にて八棟造と稱し普通の權現造と異なる所は拜殿の左右に翼ありて奏樂の間となり平面及屋根の取り様等第四百十八圖に示す如く我國神社建築中尤も複雑にして最も意匠に富みたるものなり。

圖八十四百第



伏根家の社 寺院

此時代には豊臣氏全盛なるを以て盛んに寺院の建立を行ひ方廣寺大佛殿の如き我國に於ける最大の建築物なりしが焼失し現存せる有名のものは左の如し。

東寺金堂(慶長十一年豊臣秀頼の再建に係り秀吉の方廣寺大佛殿を建立せる時試に造りし小規模なりと云ふ其構造二重屋根にして組物は大佛様を用ひ全體に

高臺寺開山堂(慶長十年豊臣秀吉の夫人高臺院嘗て建立する所の京都寺町康徳寺を東山に移し規模を宏大にし隱居せられしが其後改めて高臺寺と號せ及北政所の用ひたる開山堂の天井は秀吉征韓の時造りしものにて能く天井の色を示す)

同靈屋(靈屋内の厨子佛等は殊に有名にして豊臣氏の夫人高臺院湖月尼の創意せる高臺寺時繪あり後世模寫して賞翫せらるゝに至れり) 瑞巖寺(慶長九年伊達政宗の松島に造營せり寺に云ひ或は大同年間鎮守府將軍田村廣木匠は紀州の住人龜右衛門なりと云ふ)

この外當代に於ては南蠻寺の出現等ありしも日本建築史上に顯れたる重要な事項は(一)城堡建築の創建(二)宮室建築の勃興(三)住宅茶室茶席建築の發達(四)權現造の出現(五)南蠻寺の一時的出現(六)廟建築の萌芽等數項を擧ぐることを得べし。

(10) 江戸時代(徳川時代) (元和二年より慶應三年王政復古迄二百五十二年なり)

徳川氏海内一統の頃より明治維新に至るまで二百五十有餘年間の泰平は上下

奢侈に耽り華美を競ひし結果諸般の工藝美術は異狀の發展をなし建築の如きも前時代の繼續なるに拘らず其技巧緻密に赴き彫刻繪畫の應用其の極に達し寧ろ纖巧煩雜の弊に陥れりと云ふべし久能山、日光、上野及芝靈廟の建築は其の好適例にして、二條城及名古屋城に於ける書院の壯大なる當代初期に於ける時代精神の反映として見るべし。而して當代に於て盛に行はれたる木割法に至りては意匠の自由を束縛せるものにして一大障礙をなせしものと云ふべきなり。當代建築中主要なる者を廟建築とす實に初期を代表する當時工藝の精華を窮極せし者たり。次を神社及佛寺の建築とす、神社に於ては權現造を完成し、佛寺に在りては黃蘗宗に伴ひ明風の建築を輸入したるは顯著なる現象なり。更に儒教の發達に隨ひ聖堂の建築あり亦多少支那風の色彩を帶ぶ。而して城堡建築の全盛時代は去りて住宅化し宮室及住宅建築は前代を承け書院造を熟成せり。而も桃山時代豪華の俤は失せて簡雅瀟洒の風行はれたるも其の間取の熟成に至りては日本建築史上に住宅時代を現出せりと云ふも過言にあらず。茶室建築は前代を發達の頂點とし當代は其の餘流を守るに過ぎざるも其の手法の住宅建築

に渾然として融合したるは特に注目すべき點なりとす。

當代の遺構中重なる者を擧ぐれば久能山、日光、上野及芝の靈廟、教王護國寺五重塔、清水寺本堂、東大寺大佛殿、延曆寺根本中堂及大講堂、善光寺本堂、本願寺祖師堂及阿彌陀堂、大徳寺伽藍、妙心寺伽藍、南禪寺三門、萬福寺伽藍、湯島聖堂、京都二條城、名古屋城、桂及修學院離宮等なり。

#### 宮殿及城廓

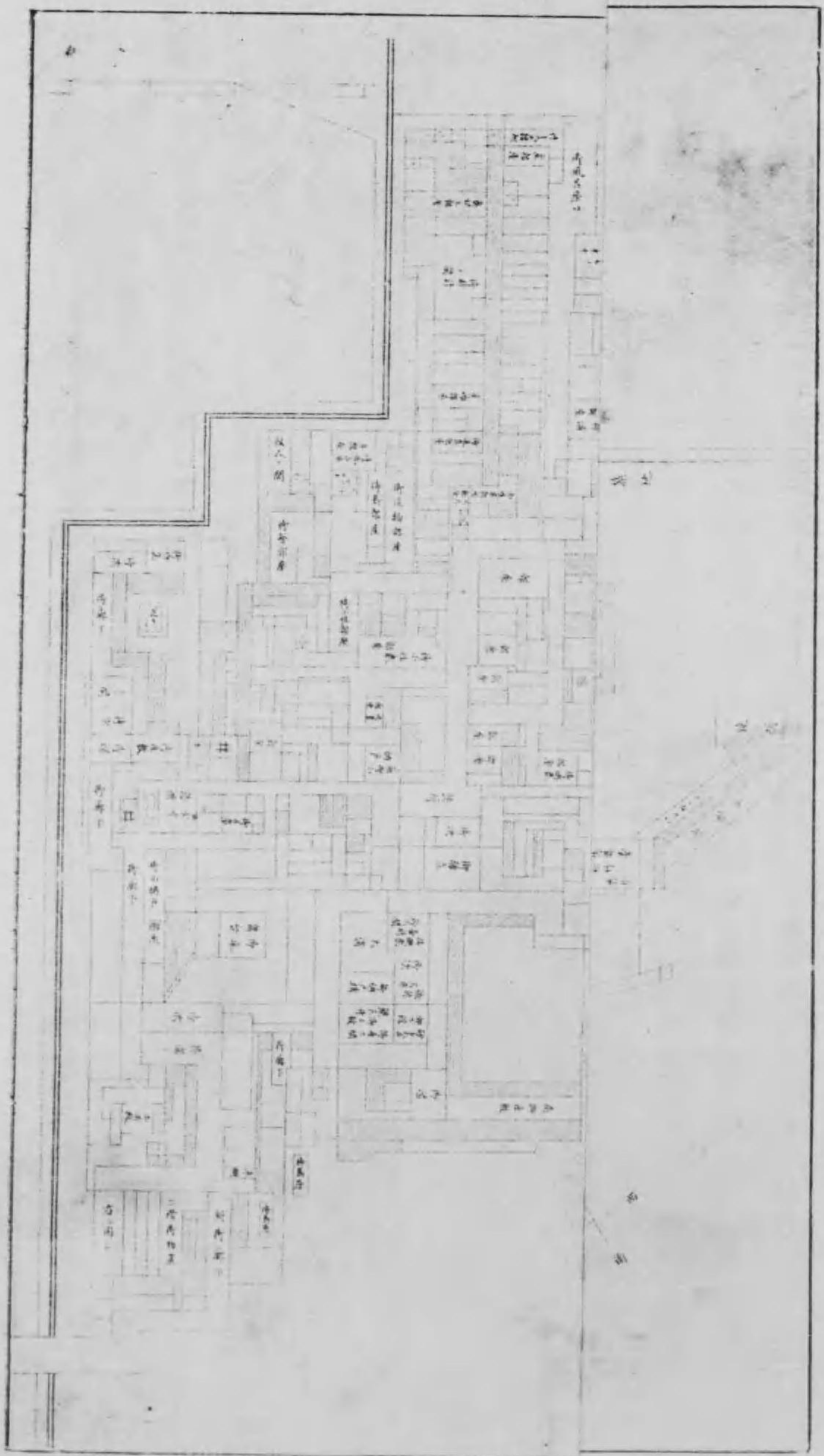
慶長十六年徳川家康内裏造營の工を諸侯に課し其封の大小に應じて功を分賦す。又寛永十八年家光内裏を經營す凡て前規模に則りしが如し天明八年京都大火焼亡拾九萬千餘戸に達し内裏亦其災に罹り寛政二年家齊松平定信に命じ大内裏の舊制に則り大規模に之れを造營す其後安政元年皇居火け翌年復舊し其制は寛政造營に則る現今存在せるもの即ち是なり。

城廓は前時代と異り徳川氏の政策として築城に關し嚴制を布きたれば其全盛時代を去りたれども幕府の城堡として二條城及江戸城の經營あり而して江戸城は從來小規模のものなりしを家康、藤堂高虎と議し之を擴張し慶長十一年其

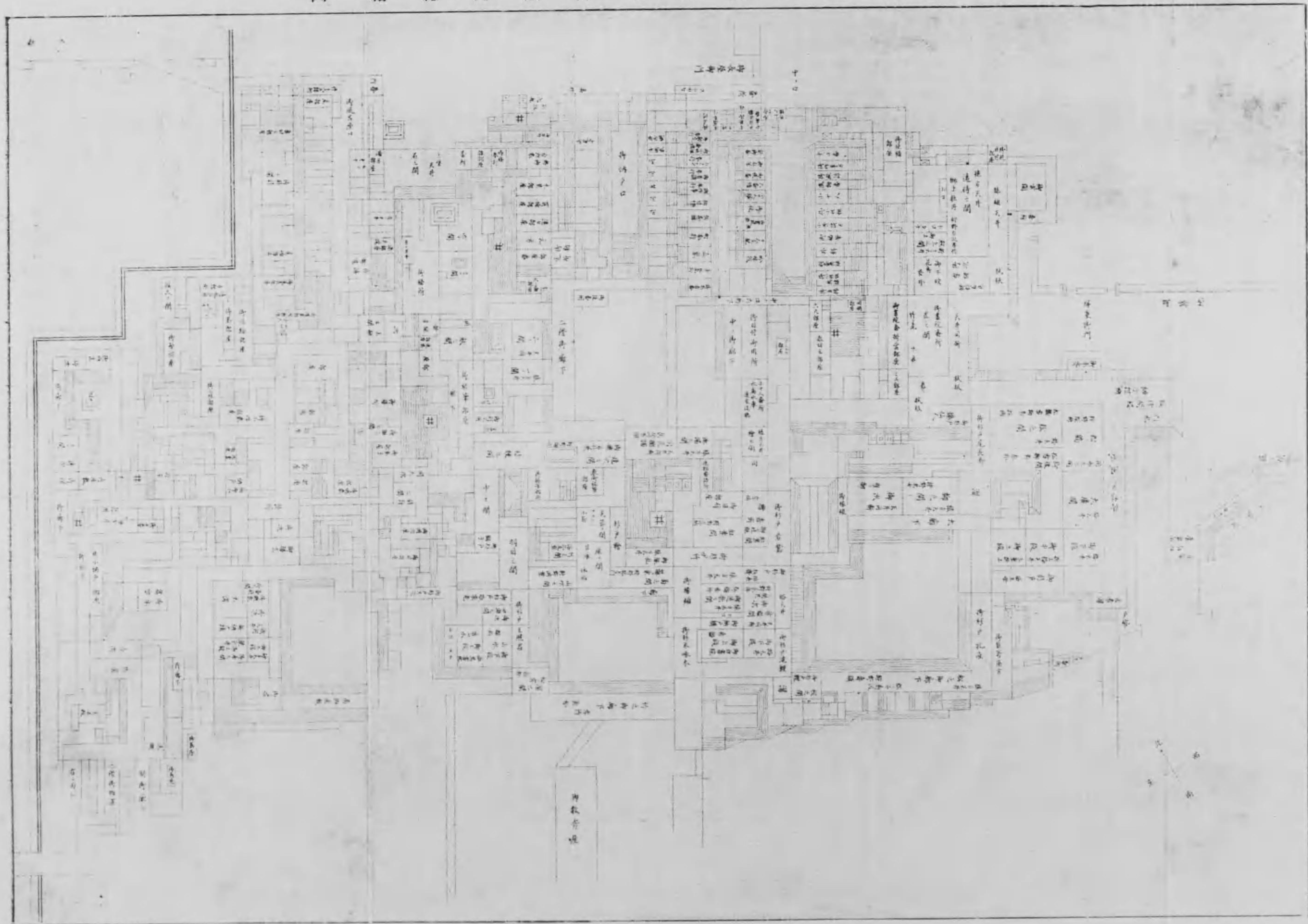
經營に従事し本丸及二三丸を築き寛永十三年に至り惣廓の造營を終へたり而して前時代の末期より諸國に築造せられたる有名なるものは伊達正宗の仙臺城(慶長四年)加藤清正の熊本城(慶長十六年)尾張大納言光友の名古屋城(慶長十六年)等なり其後嘉永年間に米國水師提督ペルリ軍艦を率ひて來りしかば此時より海防を重要視するに至り諸國に城塞砲臺を造營し十二代將軍家慶の時函館に五稜廓を築く其法全く日本の古式に法らずして専ら西洋嶄新の式法を用ひしなり。

邸宅

此時代の邸宅は書院造を住家に適せる方面に發達せしめしものにて二條城殿舎及江戸城殿舎の如き華美を盡し實に規模宏大なる書院造の典型たり。江戸城殿舎は本丸、西丸、二、三の丸の各所に建てられ又別に吹上の大林泉あり。本丸殿舎は之を表向、大奥向に區別し表向は又御殿向と中奥向に大奥は之を御殿向、廣敷向、長局向に別ち各多數の室より成る其總建坪數一萬七千餘坪に達せる時期あり。西丸二、三の丸亦各之れに準し漸次其規模縮少せるのみ、表御殿に於ける大廣



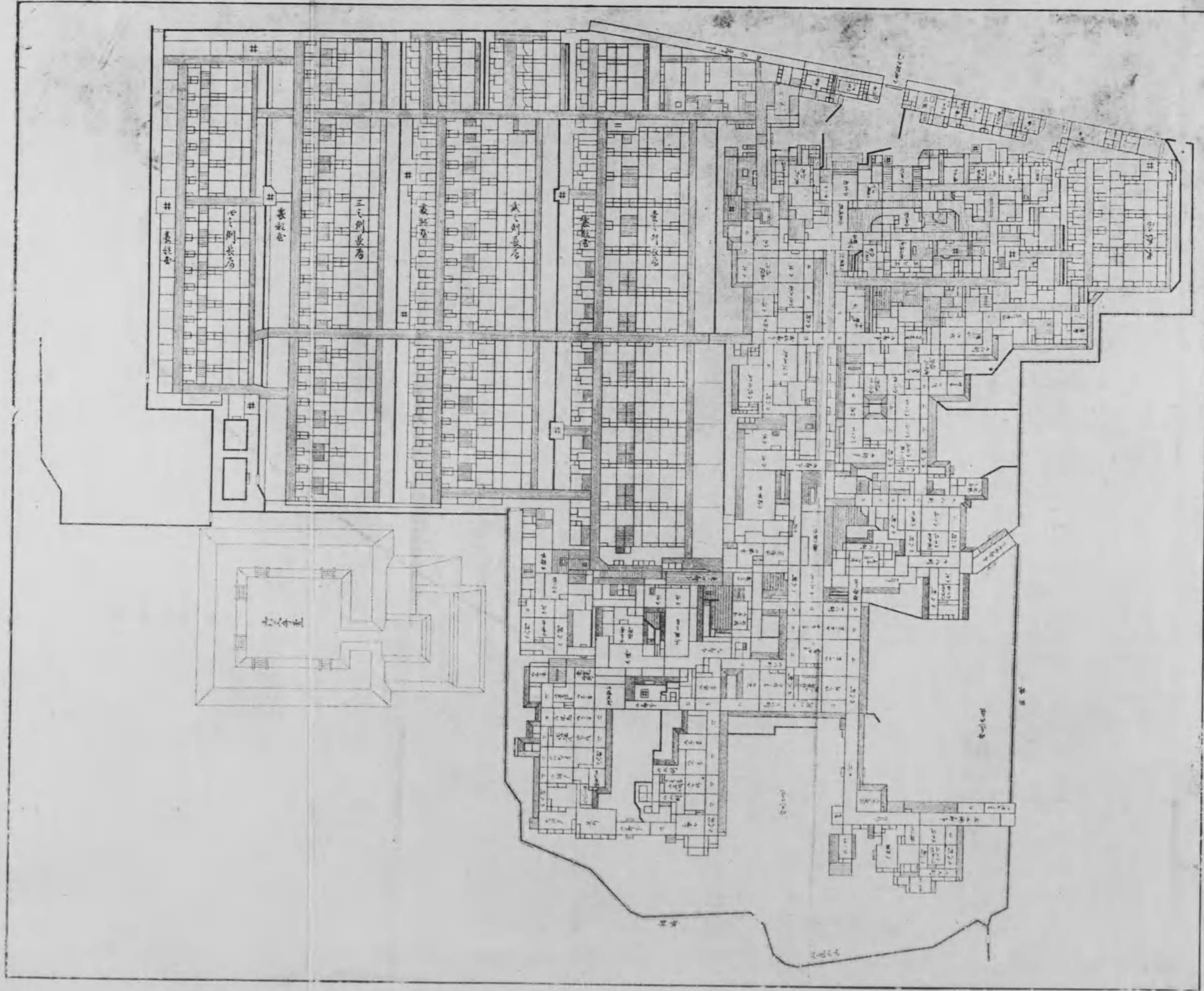
江 戸 城 本 丸 御 表 殿 向 總 繪 圖



邸宅

此時代の邸宅は書院造を住家に適せる方面に發達せしめしものにて二條城殿舎及江戸城殿舎の如き華美を盡し實に規模宏大なる書院造の典型たり。江戸城殿舎は本丸西丸二三の丸の各所に建てられ又別に吹上の大林泉あり。本丸殿舎は之を表向大奥向に區別し表向は又御殿向と中奥向に大奥は之を御殿向廣敷向長局向に別ち各多數の室より成る其總建坪數一萬七千餘坪に達せる時期あり。西丸二三の丸亦各之れに準し漸次其規模縮少せるのみ表御殿に於ける大廣

江戶城丸本御大向總繪圖





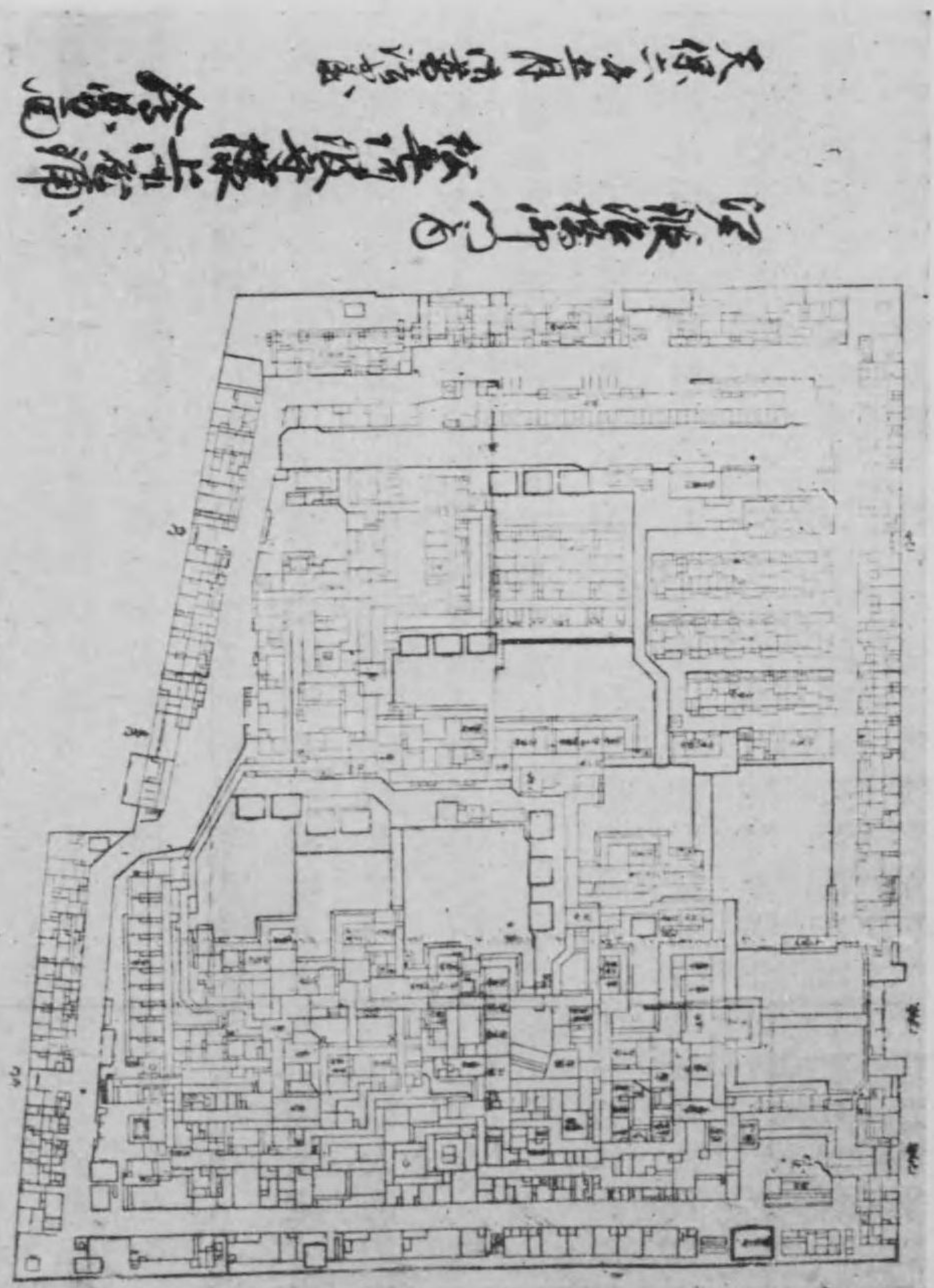


圖 九 十 四 百 第

大名屋敷の一例(間取惣繪圖)

間。白書院。黒書院は最も有名なるものにして實に整備したる書院なりしなり而して其の壁面には金箔を塗り欄間には精巧なる花鳥を彫刻し天井は二重折上格天井等を用ひ床棚は善美を盡せり其配置は挿圖により之れを想像すべく而して挿圖は江戸城最後の本丸殿舎たる萬延元年度造營のものにて各時代共に之れと大同小異なり。元和より寛永の頃江戸に於ける諸大名の第宅も奢侈を極め松平忠卿の造營せる御成門の如き柱に藤花を鏤め扉には仙人阿羅漢の像を彫み精微を盡し時人日暮の門と呼びしと云ふ。

備考 日光廟及聚樂第の門にも此名あり。

此一例に依りても其盛なるを察すべく獨忠卿のみならず一般に此風行はれしかば明暦の江戸大火を機會として幕府は格式嚴守。勤儉獎武。并に災害防止の方面より諸侯を初め庶民の住宅に至るまで嚴格なる制令を設けて之れに各々一定の制限を加へたり。爾來邸宅住家の外觀は又昔日の如くならず然れども其屋内に至つては屢々法令を替り贅を盡せるものありしかば幕府の改革ある毎に常に嚴格に取締られたり。從其の餘影は住宅の内面に於ける趣味に走れるが如

し。

備考 江戸時代の住宅に關しては「住宅建築」中の江戸時代住宅建築概論。又住宅の法令に關しては「建築雜誌」所載、江戸時代に於ける住宅に關する法令と其影響共に大熊博士所論にあり。

第四百十九圖は大名屋敷の一例を示す圖に就て見るべし。

茶室

茶道は前時代に於て利休の銳意なる改良に依りて黄金時代に達し從て茶室も意匠の超越したるものを出すに至りしが爾來利休の子孫及其流を汲むもの續出し古田織部(元和年間)藪内(寛永年間)小堀遠州(正保年間)金森雲州(明暦年間)片桐石州(延寶年間)兩千家(延寶年間)等(元祿年間)の流派を生じ意匠益々精巧を極め奢侈の風に感染して佗の好より次第に好奇心を起し古器弄玩となり流派に依り一定の式法定まり茶室建築の如きも特別なる一種の木割を制定するに至れり。

茶屋

茶室と邸宅と混合せし構造を茶屋と稱す京都に於ける修學院の離宮桂離宮の

如き當代に於ける遺構として貴重なるものなりとす。

廟

廟は此時代の創意に出でたる祖先を祭るが爲めの造營物にして日光に於ける東照宮を以て最完備せる代表的のものとす而して其規模は前時代に萌芽せる權現造神社の完全せるものにて本社、拜殿、神樂殿、神輿舎、神庫、神廐、鳥居、透塀、玉垣等を備へ且つ徳川初祖の遺骨を納めたる廟塔、佛式の祈禱を修する護摩堂其他念持佛を安んずる本地堂、一切經を藏する輪藏、鐘鼓を安ずる鐘樓、鼓樓並びに佛舍利を藏する五重塔等當期に於ける宗教的建築を悉皆集中したるものなり故に廟所建築は我國に於る宗教建築中最注意すべき建築たるものと云べきなり。

日光廟

現存して世の耳目を驚嘆せしむる東照、大猷二廟は實に寛永慶安年代に於て建造せられ前後十數年の星霜を費し爰に東洋に於ける一大偉觀を呈せしむるに至らしめしなり。

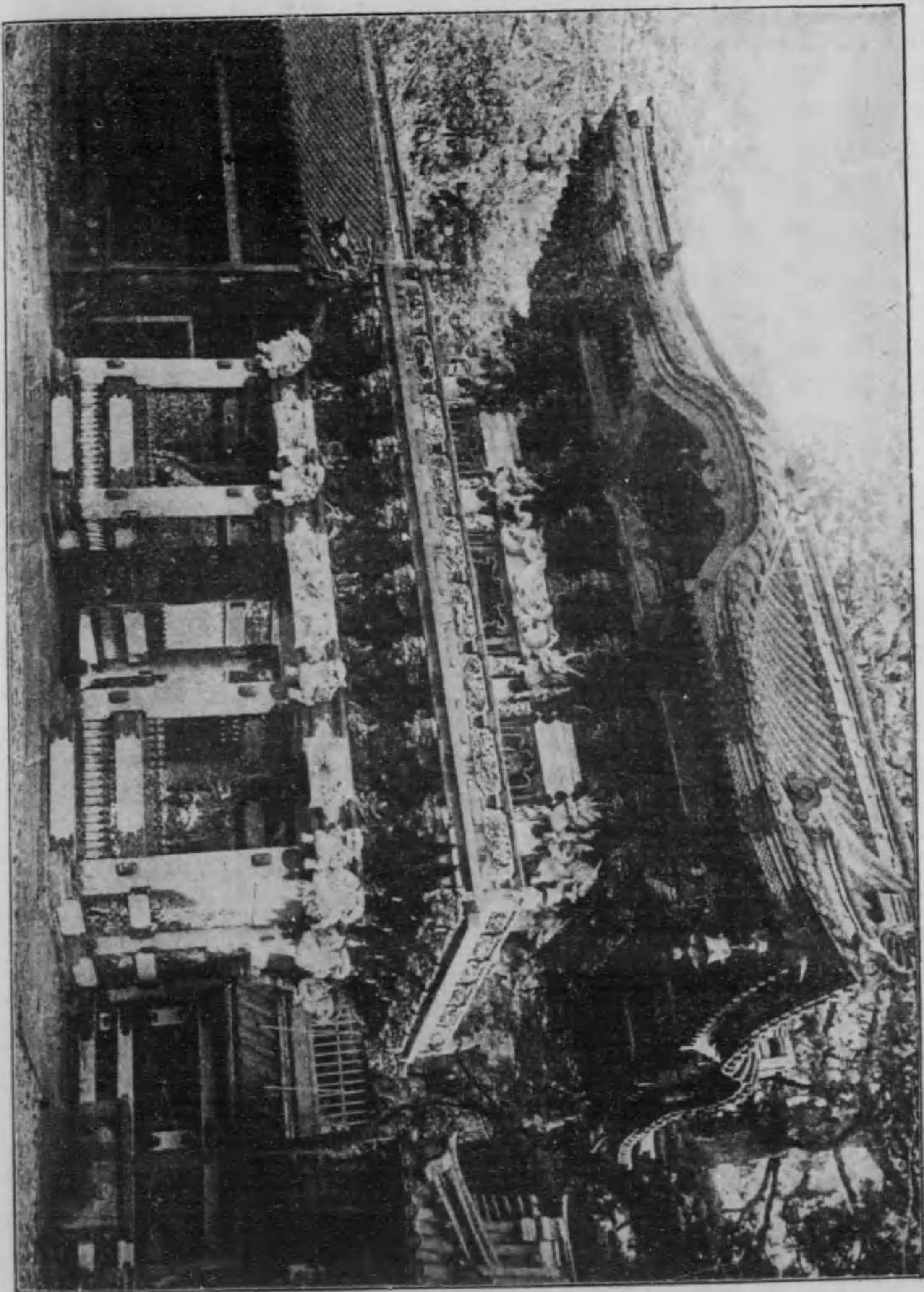
備考 元和二年創造せられたる當初の東照宮は小規模なりしが如くなれども寛永年

中改築せられたるものは大規模にして費を數百の諸侯に徴し千萬の工匠を役し特に大猷公(家光)自から工事を畫策せられたりと云ふ事の重大なるをト如するに足るべきなり。

東照宮の配置は禪宗寺院の如く整然たるものに非らずして山岳を切開き高低に應じて適宜の地形を造り建築物を極めて自由に配置したるものに係る而して諸堂宇は悉皆色彩を以て之れを裝飾し木地を表はしたるは神廐一字に過ぎず破風棟梁唐戸天井等に至る迄悉く皆彩繪或は彫刻を以て粧飾し其精巧壯麗なる視る者をして其壯觀を激賞せしめざるなし。

諸堂中最有名なるは陽明門(日暮しの門とも云ふ)にして構造は三間樓門なり其方位は南に面し屋根は入母屋造にして四面に軒唐破風を架したるは特殊の手法と云ふべく軒は二軒にして扇榦なり柱は椶の木地に渦形を彫刻し俗に之れを「グリ」と云ふ特に軒唐破風は通常のものとは異り故らに懸魚及鱗を添付せず破風板より繪様を彫出して之れに代へたる、上層柱間に設けたる繪様火燈口の如き其他鬼板高欄等に於ても歴々嶄新の手法を認むるを得べし而して此門の裝飾法は境

日光東照宮陽明門



内幾多の建築物に於けるが如く色彩の配合よりは寧ろ彫刻を以て主となせしもの如し(第百五十圖参照)

唐門は拜殿に達する最終の門にして柱間十尺妻の間六尺二脚にして後方に控柱を附したるは普通の方法なれども四面に唐破風を架したるは特殊の構造法と云ふべく方立、虹梁等に曲線を應用し裝飾に人物を用ふるは我國裝飾法としては奇と云ふべく模様は凡て唐木の寄木を以て彫刻を嵌せるものなり。

備考 陽明門と同一の意匠にして芝公園内台徳院水盤舎の切妻にも略同手法より成れる破風を見る。

坂下門は二脚の唐門にして全部木地を表はし胡粉を塗抹したるのみにて少しも色彩を施さず只金物を以て主なる裝飾とせり今其金物を見るに製作の精巧なる形状の變化に富める他に其類を見る事稀なり。

以上記せしが如く陽明門の彫刻唐門の寄木、坂下門の金物は共に三指を屈して普く世人の賞揚する所なり又阿蘭陀國獻備の燈籠及覆屋等も有名なり其他本殿に腰組を用ひたるも嶄新の意匠と云ふべし。

大猷廟

徳川三代の將軍家光を葬る所にして慶安四年家光の薨去と共に工を起し三年にして成りしが其諸堂の構造豪華燦爛たるは敢て東照宮と遜色なきの偉觀を呈す其諸建築中注意すべきは皇嘉門にして其構造俗に龍宮造りと稱する明様の者にして桁行七尺四寸梁間六尺の矮小なる建築物なりと雖ども其形の優美なる配色の宜しきを得たる本廟内第一位を占むるものと稱せらる其他水盤舎も亦東照宮に存在するものと其趣を一にすれども四隅三本宛の支柱八角にして上方少しく内方に向ひて傾斜し建築固定の精神に合し主柱と副柱と大さを異にし變化を與へたるは實に好意匠と云ふべし。

右日光廟の建築に關する精細は塚本工學博士と大澤工學博士の共著なる帝國大學紀要工料第一冊第二號にありて二冊の實側圖面を添へあり宜しく參照すべし。

神社

此時代の神社は重に權現造にして實に同形式を完成せる時代なり其例を舉れば日光に於ける二荒山神社静岡に於ける淺間神社東京に於ける麴町區永田町

の日枝神社神田の明神社根津の權現社湯島の天神社龜井戸天滿宮等なり而して古來既に在る所の神社建築の諸流派も亦一般に行はれたり特に再建に於て然りとす出雲大社攝津住吉神社大和春日神社宇佐八幡宮の如き皆當代に於て再建せられたる主要の神社なり。

佛寺

前時代の引續にて初期には傑作あれども元祿以後に至りては殆んど見るべきものなきが如し其初期の建築を舉ぐれば

智恩院山門、本堂、方丈

徳川氏代々の宗門淨土宗の本山にして慶長九年竣工莊嚴天下無双と稱せしが寛永十年本堂方丈等焼失山門鐘樓經藏等

織に北災を免ると云ふ其中山門は特に大に鐘樓經藏等も結構

南禪寺の山門と遜色なく並び稱せらる又鐘樓經藏等も結構

優雅なり其他本堂方丈は寛永の再建なり山門の出組に挿み

たる左甚五郎の忘傘と稱するものは精細部に注意せしめん

の爲めに特挿みしものなるべしとの説あり

東寺の五重塔

家光の建立にして高き百八十尺我國最高の塔なり其構造堅牢にして今日に至る迄毫も風撓することなく意匠自由なり

清水寺本堂

家光の建立にして家根の葺方に變化多

其他延暦寺中堂及大講堂大徳寺伽藍妙心寺伽藍南禪寺三門等當代の建築にし

て猶特別大書すべきは禪宗の一派ワッペンシヤク黄蘗宗の傳來なり而して其寺院建築は全く明様を移し純然たる支那寺院の趣ありて其完備せる特例は肥前國長崎の崇福寺と山城國宇治の萬福寺なり。

崇福寺

此の寺は寛永九年明僧超然の創建にして其配置は日光廟と同じく天然の地形に則りて堂を配置し結構他に比類少し今諸堂中の特點を舉れば  
總門は俗に龍宮造或は唐門造等と稱し日光大猷廟皇嘉門宇治萬福寺の總門と其種類を一にし斗組を設けずして直ちに屋根を冠す。  
山門は高く石階段上に聳え寺内第一の美觀を以て稱せらる其結構四脚門の一種にして六本の柱は共に地上より屋根裏に達し下に大鼓形の礎石を置く又楣以下の部分は全く丹泥を塗り上部は色彩を以て裝飾し斗組は前後兩面は一種の四手先にして大斗に敷面あり各大斗卷斗を通じて通肘木を加へ船肘木は前方及斜方に突出して卷斗を支ふ此手法は他に其例を見ず側面の斗組は三手先にして斜方に突出せる肘木を有せず概略普通の手法なり。

備考 崇福寺の詳細は建築雜誌二百十八號に探本工學博士の記事ありて附圖數葉を添ふ宜しく参照すべし又船肘木に付ては支那史の部を参照すべし。

萬福寺

此寺は寛文元年明僧隱元の創建にして七堂伽藍の範模を有し總門は龍宮造山門は牌樓に類し堂の棟には中央に水煙を置く其他諸堂何れも明風なり。

大佛殿

元祿年間には南都大佛殿再建の議ありて寶永二年四月上棟す抑大佛殿は聖武天皇の天平年間千百有余年前金銅盧舍那佛の大像を鑄更に之を被ふに偉大雄麗なる殿堂を以てせられしが一たび治承の兵燹に遭ひ鎌倉時代の再建も亦二たび永祿の戦亂に烏有となり僅に此元祿の再興に依りて昔時の宏壯を想起するに過ぎるなり。

塔

鎌倉以前に於る塔は中心柱を礎石の上に立て四方の構架を疊重し最上層の屋根に九輪を冠す又屋根の勾配緩にして各重の軒は垂木にて支へ其末端は其上

塔重五宮照東光日 一の圖一十五百第



層の軸部の重量にて壓せしが鎌倉以後に至り宋朝の影響を受け初めて楷木カキを用ひ檼ノ杆コの理に依りて軒を支ふるに至り屋根は比較的急勾配となれり而して江戸時代に至りても東寺の塔は中心柱を礎石の上に立てしが日光五重塔の如きは工作上の發達甚しく終に中心柱を礎石より遊離せしめ之を周圍の構架より垂下せしむるに至れり實に我國建築構造の一大進歩と認めざるべからず第百五十一圖の一参照東京上野谷中天王寺の五重塔も亦此法に則れり。以上の外當代に於て特に注意すべきものは劇場建築なり。慶長年間於國歌舞伎始めて行はれ尋て女歌舞伎若衆歌舞伎あらはれ演劇の濫觴となれり。當時の舞臺は多く假設的にして能舞臺より出でしが如き極めて簡單なるものなりしが寛永元年江戸に猿若座建てられしより演劇の隆盛に伴ひ劇場建築も大に發展し漸く廣大のものとなれり。

明治時代以向幕末より明治大正年間を含む

此時代は維新前後より明治大正年間を含める時代にして、二千年來涵養せられたる藝術とは全く其範を異にせる歐米の文物恰かも江河を決せる如く非常の

勢力を以て流入し來り、我建築界は爲めに大なる影響を受けたり、而も此新たに  
入り來れる洋風の建築は從來の我國の様式と相並行して行はれつゝあるも或  
は將來に於て相融和せるものとなるや未だ知るべからず、而して當代を代表す  
る中心建築は社寺にあらず宮室にあらず從來曾て見ざりし公共建築なりとす  
西洋式建築

徳川氏の末に至り一度海門の鎖鑰を解くや外國人俄に入り來りて鼎の沸騰す  
るが如き有様となり西洋式の建築も必要に逼られて其端を啓くことゝなれり  
西洋館は文久二年に舊幕府にて辻内近江を大工棟梁として品川御殿山に木造  
の五箇國公使館を建設したるを嚆矢とす此公使館は公使の移住せざる前に浪  
士の火く所となる文久三年長崎天主堂佛人ヒウレ設計成り次に芝の田町に外  
國人接遇所を木造にて建設せしと云ふ又其頃薩摩の島津家にては米國技師を  
雇入れ紡績工場を鹿兒島城下の磯邸に切石を以て建設せり(文久元年着手し同  
じく三年落成す)  
明治時代の西洋建築は種々の方面より觀察して之を次の三期に分ちて記述す  
るを便利とす。

第一期維新前後の西洋建築。明治七年工部省設置以前幕末に溯る。

第二期工部省時代の西洋建築。工部省設置より獨逸建築家來朝頃迄。

第三期明治時代本期の西洋建築。明治廿三四年以後。

### 第一期

幕末に於て西洋諸國との國交開かれしより泰西の文物は非常なる勢を以て東  
漸し建築に於ても亦洋風のものを見るに至り既に文久年間に五箇國公使館の  
洋風を以て建設せられたるは前に記したるが如し、而して當時に於ては建築專  
門にあらざる外人技師の手に依り設計施工を見たるも本邦の技術家並に職工  
は之れによりて其技能を修得し又各自考案を廻らし一種獨特の洋風建築を出  
現せしめたり、然れども其多くは木造若くは木造にして塗家又は瓦張、或は石材  
を混用せるものなりしを以て現存せるもの甚た少く其形式も亦本邦固有の趣  
味を混したるもの少からざりしが、明治初年頃に至りて煉瓦の如き新材料を用  
ひて築造するものあるに至れり、今當期に於ける重なる西洋建築を掲ぐれば次  
の如し。



遠遊館。外賓接待用として芝の濱御殿内に施設したる平家建洋館にして慶應三年大工棟梁鈴木彌五兵衛の設計施行せるもの。後ち毀たる。

横須賀造船所工場其他の建築

幕末に於ける幕府の創設にして佛國技師「ウエルニイ」を始め四十名の職工を招聘して工事に當らしめたるものにして當時の造船權頭は平岡通義なり。今舊蹟を止めず。

築地ホテル館。築地海岸にあり木造瓦張の一大洋館にして明治元年清水喜助の設計及施行に成りしものにして同五年焼失。

舊横濱及新橋停車場。明治五年竣工したる木骨石造の建築にして、米人「ブリジンス」の設計なり。

永樂町舊分析所。東京に於ける古き煉瓦造の一にして龍の口にあり建坪六十八坪五合二六にして明治四年の建築に係ると云ふ。二十四年毀つ。

以上の外新橋の東なる蓬萊橋詰なる蓬萊舎米人ブリジンス設計舊第一國立銀行清水喜助設計施工等亦當期の西洋建築として屈指のものたりしと共に最も

記憶すべきものは即ち新橋京橋間の改築なり其竣成は次期に屬せりと雖とも其計畫は寧ろ當期にして「ウオトルヌ」及平岡通義は本文化的事業の功勞者にして其建築は煉瓦造二階建にして又建築規格統一の嚆矢たり。

## 第二期

明治七年各省の建築工事を工部省に於て管理せり以來其廢止に至るまで諸官衙及び之れに附屬せる建築は總て工部省營繕局の手に依り施行せられ明治十七年に至り官公私工事の區別なく單に設計監督に當り且つ民間及地方廳の建築設計監督をも引受くるに至れり。從て當期に於ける西洋建築の主要なるものは四五の例を除きては何れも工部省技術家の手を煩したるものにして其數五十餘個を數ふるを得れば當期は實に工部省時代と稱して可なるべし。

而して其初期に於ては外國人を聘し其の技能を藉りしこと少なからざれども十二年工部大學の卒業生を出したる以來西洋建築として誇るべきもの亦外人の手を藉らずして能く建築するに至れり。

斯くして明治十八年工部省廢止せられ其の建築事務は擧げて内務省に移され

翌十九年四月臨時建築局の設置せらるゝや獨逸政府と締結して、エンデ及ベツクマンをして議院及諸官衙の一切を彼等が手に委することとなし十數名の獨逸建築家を招聘し該工事の一部を實施せしめたり此舉たるや一に政府の政策に出たるものなりと雖も多數の外人建築家を聘すと共に多數の邦人を獨逸國に留學せしめ建築術の實際を習得せしめたるものにして實に我國建築界に一  
新紀元を劃したと云ふべきなり然りと雖も帝國假議院日比谷に於ける司法省  
裁判所海軍省の三建築の竣成を以てこの制度を廢止したるは我建築界の幸福  
にして爾來本邦建築家は自由に活躍することなれり之れ本期に於て最も注  
意すべきことなりとす今當期に於ける主要なる建築數種を擧ぐれば次の如し、

神戸東税關(明治六年(工部省))

紙幣寮即ち現印刷局(明治九年竣工)舊工部大學(明治十年(佛人ボアンビル)永代

橋際開拓使(明治十年)訓盲院(明治十年)北白川宮邸(明治十四年)有栖川宮邸即ち

霞ヶ關離宮(明治十五年)鹿鳴館即ち今華族會館(明治十六年)東京帝國大學法文

科舊館(明治十六年)海軍大臣官舎(明治二十五年)深川岩崎邸(明治二十年)以上英

人コンドル)

築地海軍兵學校生徒館(明治十四年)横濱ベンネット邸(明治十四年)以上英人  
イアツク)

銀座通煉瓦家屋(明治九年)電信中央局(明治十年)大阪造幣寮(明治初年)以上英人  
ウオトルス)

芝赤羽工作局(明治四年(佛人レイ、フェリキス、プロラン))

遊就館(明治四年(伊太利人カペルジ))

裁判所(明治廿九年)(獨人エンデ及ベツクマン)主任 妻木 頼黄

司法省(明治廿八年)(同上)主任 河合 浩藏

海軍省(明治廿八年)(英人コンドル)主任 船越 欣哉

假議院(明治廿三年)

以上の外赤坂豊川稻荷社殿(明治二十年)東京府集會所(明治十九年)富山縣會議事  
堂(明治二十年)同新川郡々會議事堂(明治二十年)橋本綱常邸(明治十九年)等何れも  
當期工部省の手に成りしものなれども其の最も大なるものは皇居及宮内省の

建築なりしなり。

### 第三期

當期は明治建築史上に於て本期とも稱すべき時代にして西洋建築は外人の手を藉るゝことなく全く本邦建築家の手に依り設計施行せられし時代なり而して建築に使用せられし材料並に構造亦頗る發達し鐵骨構造發展の氣運亦本期に於て熟せり。當期に於ける建築物は宮殿官公署の建築及び一般公共建築を初め住宅建築に至るまで其の數頗る多數にして其種類亦多様なれば其の主なるもの四五を掲げ他は之を省略すべし。

上野博物館參考館(明治二十三年)

帝國ホテル(明治二十三年)

東京府廳(明治二十六年)

日本銀行本店(明治二十八年)

丸ノ内三菱建物(明治二十八年)

東京商業會議所(明治三十二年)

日本勸業銀行(明治三十二年)

三井銀行(明治三十五年)

横濱正金銀行(明治三十七年)

表慶館(明治四十二年)

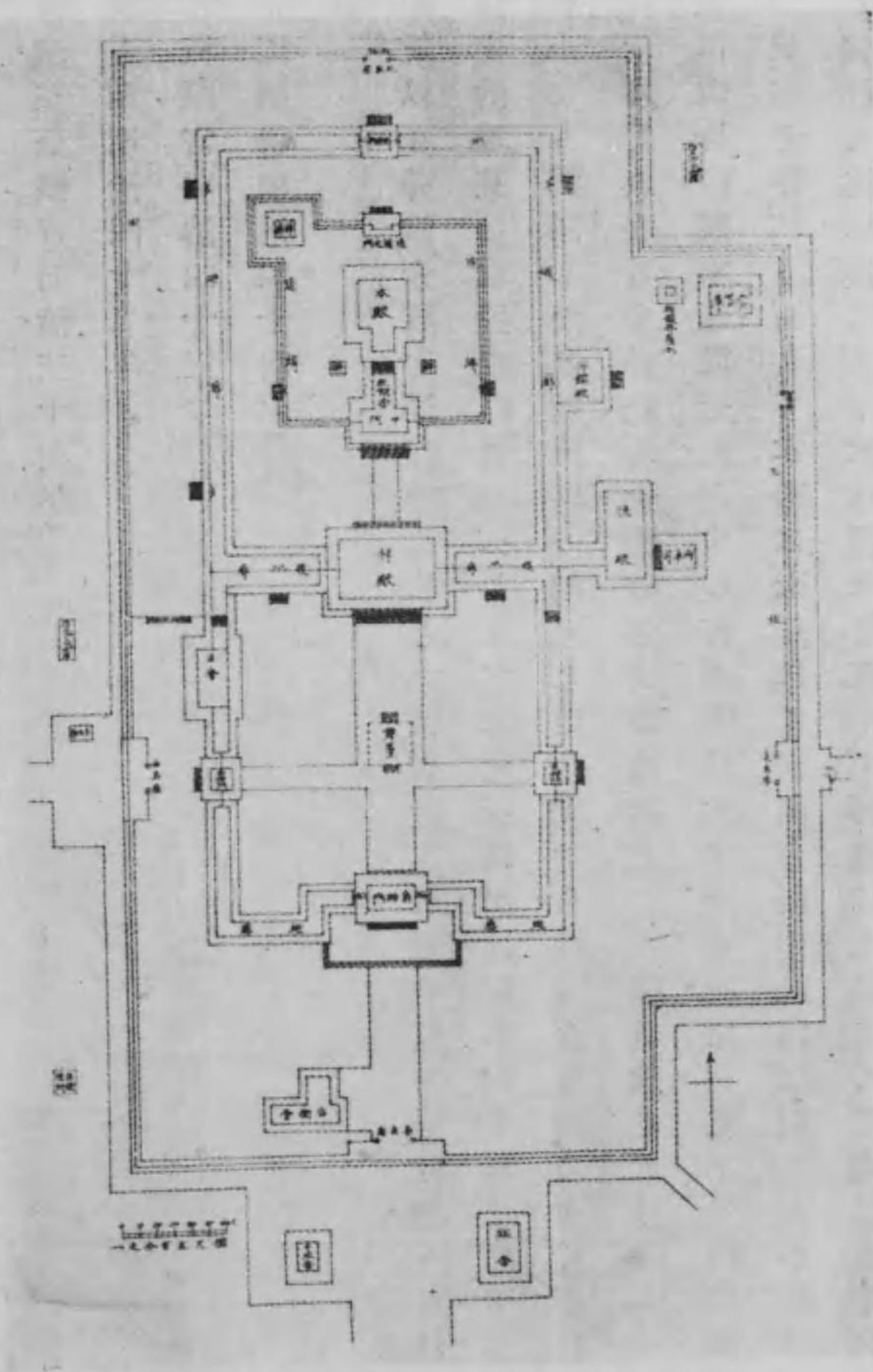
赤坂離宮(明治四十三年)

帝國劇場(明治四十四年)

### 神社

維新以降神佛分離を勵行せられしかば神社に於ける別當寺は廢せられ境内の佛寺的建築は取毀たれ惜むべき堂塔は大抵消滅に歸したり然るに千年以來精神上より混同したる神佛は一朝にして分離せらるべきものに非らずして一二の堂塔を取去るも神社の大體の形式は依然として佛教的なるは争ふべからず故に政府は將來建設せんとする官國幣社大中小の社格を定め夫れに適應する一規定を作り而して本殿は大社にて三間三而中社は三間二而小社は一間四方何れも流れ造にて千木勝男木を置かず拜殿は大社にて三間二而中社は三間

第百一十五圖



明治神宮平面圖

三面小社は三間二面何れも入母屋造とせり要するに社殿の徒に尨大浮華に流

第百一十五圖の二



明治神宮本殿及中門

- 大極殿
- 明治神宮
- 臺灣神社
- 吉野神宮
- 靖國神社

れざる様にとの注意なるべし而して當代に於て建設せられたる神社建築の重なるものは次の如くにして明治神宮は明治聖代を永遠に記念すべき代表的神社建築なりとす其の平面は第百五十一圖の如くにして第百五十一圖の一は其内部の一部なり

年を以て終に大内裏の樞府たる八省院中一部の建築を模造し以て古代の盛典

圖 二 十 五 百 第



圖 の 樓 虎 白 殿 極 大

を追懐するの料に供されたり  
 其規模たる應天門あり龍尾壇  
 あり蒼龍白虎の高樓ありて中  
 央五尺の土壇上に聳ち其棟地  
 盤を抜く五十有五尺廣袤東西  
 百十尺南區四十尺碧瓦と金銅  
 の鴟尾燦爛として人目を眩ま  
 すものを大極殿と名く此設計  
 者は木子清敬氏と伊藤博士に  
 して特に蒼龍白虎の兩樓には  
 屋の四隅に小樓ありて中央別  
 に又一樓あり形稍大なり而し  
 て其手法精緻織巧に失するに  
 似たれども其織巧は能く大極

佛寺

殿の粗大と相對照し却て一種の妙配合を爲すを見る。

圖 三 十 五 百 第

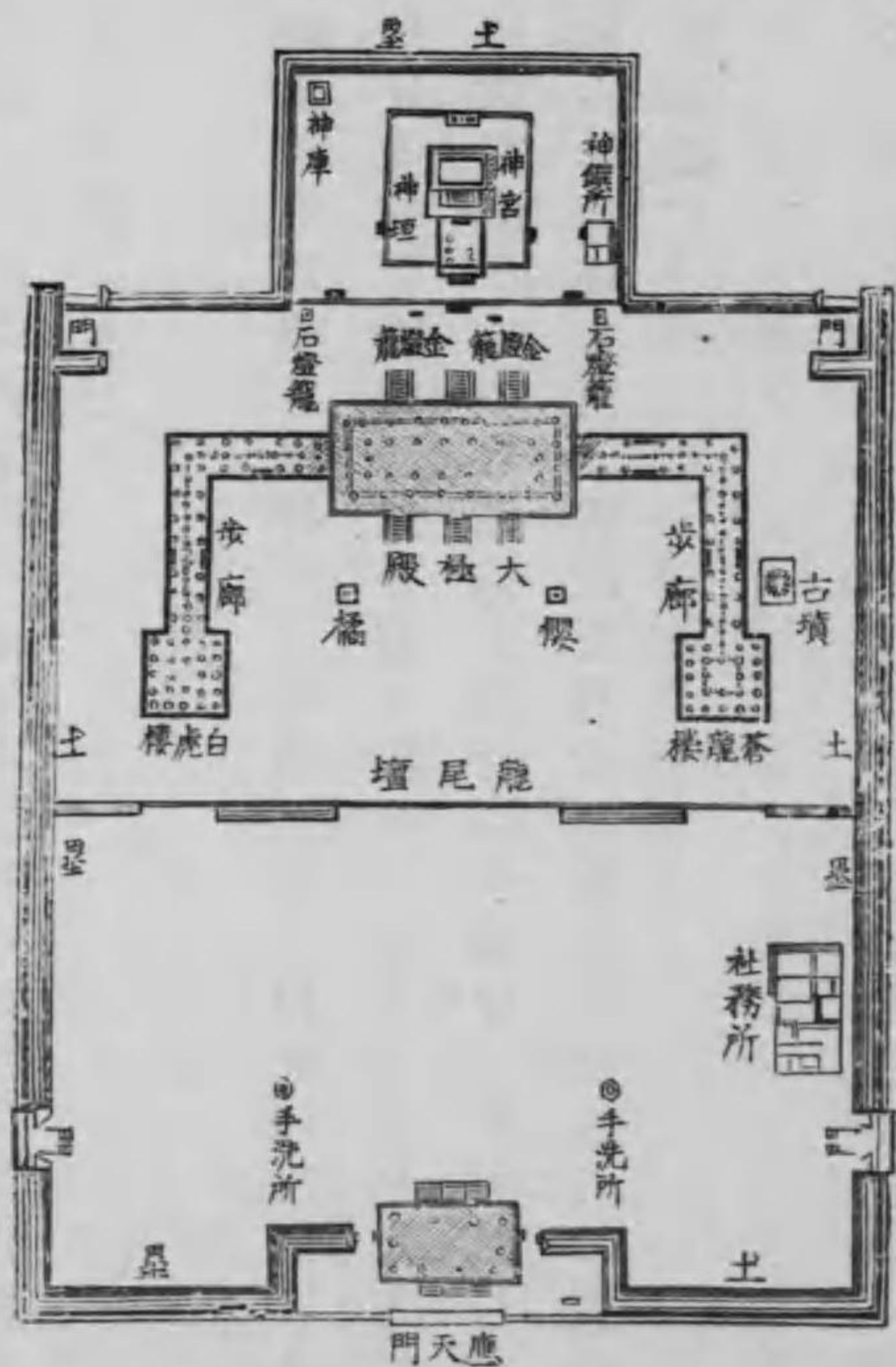


圖 面 平 殿 極 大

維新後佛教も亦振  
 はず更に大寺院の  
 建設せらるゝもの  
 なく京都東本願寺  
 の祖師堂伊東平左  
 工門氏設計及阿彌  
 陀堂故木子棟齊氏  
 設計の如きは稍曉  
 星の感なしとせん  
 や而して當代佛寺

建築として注目すべきものは東大寺大佛殿の大修理にして其外觀は修理を機  
 會として天平時代の古制に復し構造に於ては近代科學の應用を以て外觀に變

更を加へざる限り鋼材架構構造法に則りしは後世に傳ふべきものなりとす、此の外佛寺建築に防火的構造を使用したる、鐵筋コンクリト造りの北海道本願寺別院並に西洋式構造の傳通院本堂等の如き亦當代佛寺建築に洋風構造を攝取したり一例なりとす。

## 塔

維新後神佛分離を勵行せる結果として神社内に於ける塔は悉く破却され伽藍に於ける塔も亦此餘波を被り現今に至りては殆んど塔を造立するものなく其僅に遺存するものも漸次廢頽腐朽に歸せんとす而して近時古社寺保存の法施行せられ古塔も僅に古式を存るを得るに至りしは實に吾人建築者の歡喜に堪ざる所なり。

## 邸宅

當代に於ては前期に於ける書院造りより出發せる住宅形式を襲踏すると共に維新以來泰西文物の輸入と共に東漸せる歐風住宅の建設を見たり而して其の初めに於ては歐化主義の旺盛なりし爲め純洋風住宅を單獨に建設するの狀況

にあると共に一方に從來の住宅と無關係に洋風住宅を設けたり之れ和洋獨立の時代にして、其後和風住宅に連ねて洋風住宅の一部を建設するの風起れり之れ和洋併置の時代なり、然れどもこの習慣は漸次和洋折衷に傾きたり之を和洋折衷の時代と稱すべく而して近代に至りては住宅に目覺つゝある結果和洋住宅の渾然たる融合を高唱するに至れり。

### 第十一章 西洋建築史

世界最古の文明は埃及のニール河畔及び西部亞細亞のチグリス、エウフラト兩河の流域バビロニアに起り何れも農耕夙に開けて人口繁殖し早く國家を形成したり、其後治亂興敗相次ぎ何れも波斯及希臘の侵寇征服する所となり次いで希臘は波斯と數次の海陸の激戦を爲して遂に大勝を得て西洋文明の基礎を確立するに至れり。従て西洋建築史は先づ希臘の時代に始まるべきも前述埃及及び西部亞細亞の古代建築は希臘建築の先驅を爲したるものなる故順序として先づ之等古代建築より述べんとす。

#### 第八十三節 埃及建築史

國勢一斑

埃及は北アフリカ、ニール河岸の狹長なる國にして亞熱帶に屬し毎年期を定め

て汎濫するニール河は上流の沃土を流し來り兩岸に推積して豊穰なる土地を作れり。此處に建國したる古代の民族は天文、數學、哲學に達し僧侶は特別の權勢を有し又一般に未來を信ずるの念深く現世を以て假の宿と思ひ墳墓を永久の



第五百四十四圖

住居と信ぜしを以て帝王に至りては多數の捕虜を使役してピラミッドの如き萬代不易の大記念物を現出せしむるに至れり。其建國の紀元は非常に古るく確然たるものなけれども多くの考古學的考證によれば其文明は凡そ西曆紀元前五千年以上に遡ると云ふ。西曆紀元前千四百年乃至千三百六十六年の間に君臨せる第十九王朝ラメセス一世の治世を埃及建築の最も光彩ある時期とし、其孫ラメセス二世は有名なるテーベ (Thebes) の殿堂を建設せり。第二十六王朝即ち西曆紀元前五百二十七年には波斯人の爲めに此國を攻取せられ

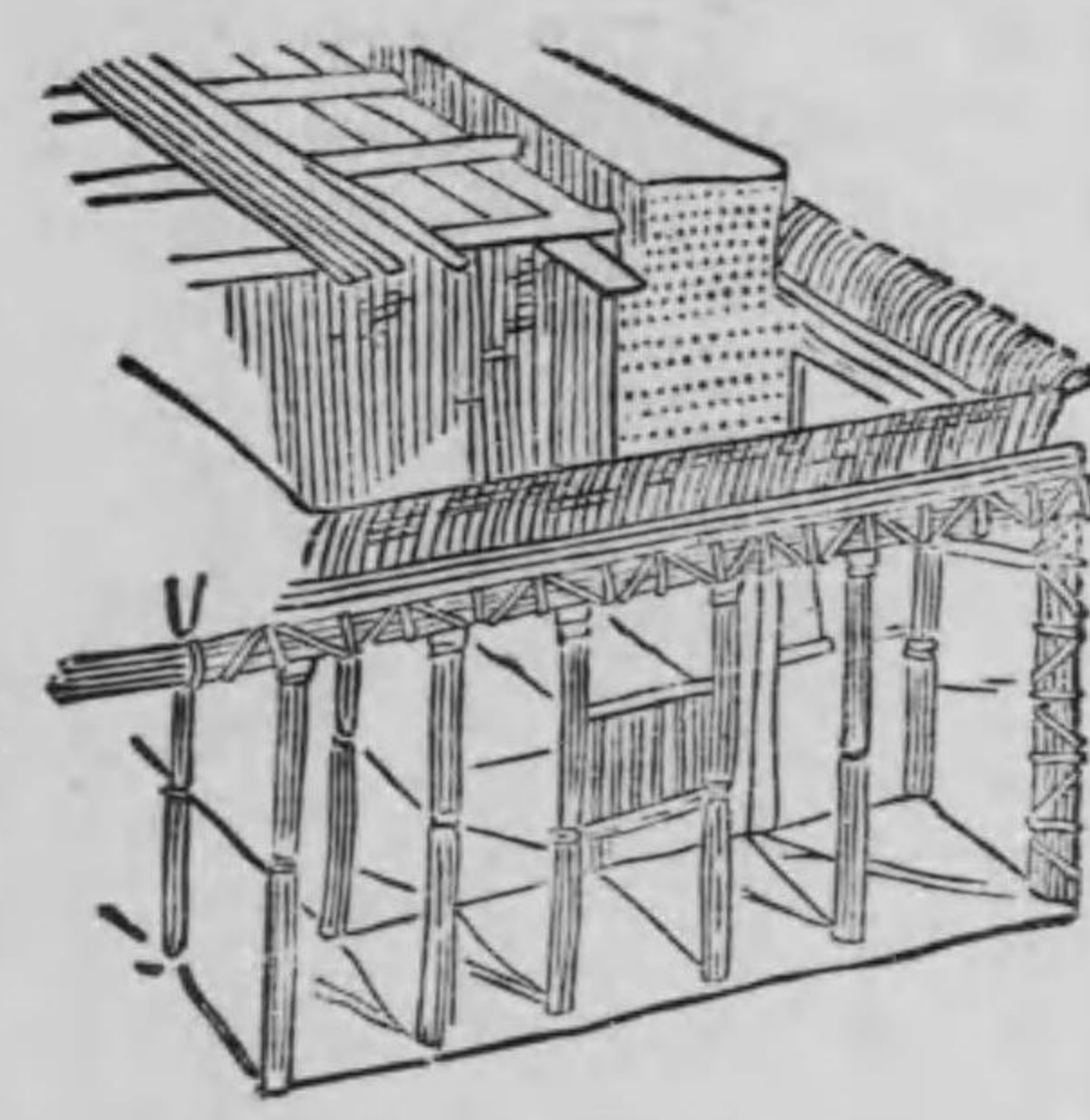
同三百三十二年には希臘王歴山大王の手に落ち其歿後は宿將トレミーの領する所となり。女王クレオパトラの歿後は全く羅馬の屬國となり其後數多の回教

建築の記念物を残せるアラビヤ國民の攻取する所となり終に後土耳其古領となれり。

建築總論

埃及古代の最も幼稚なる時代の建築はバピルス(Papyrus)と稱する蘆の一種の植物の莖を束ね之れを地上に或る間隔をおいて真直に建て隅は殊に堅牢に造り此蘆の上に上部軒の位置に

第五百五十五圖



埃及及蘆泥建築想像圖

て横に蘆の束を結び付け互に柱頭を連結せしむ埃及特有の軒蛇腹は古昔屋根に置たる粘土が軒先の蘆を壓迫して屈撓したる形の残りしものなりと云ふ。第百五十五圖參照。此軒蛇腹へは粘土を塗り又窓入口等の周圍は普通以下の家に

ては蘆にて造りしが上級の家にては椽欄の木を用ひたりと言ふ故に埃及建築の原型は石造に非らずして寧ろ蘆の類及び泥土を以て築造したるものなり。埃及建築の壁の面が傾斜せる事に就いてヴィオレルデニク氏は傾斜ある壁は埃及王朝後代のものにして其構造はピラミッドより來りしものなりと云へり。泥を主體とする普通家屋の周壁が垂直なれば地震等の爲めに重心が壁外に出る時は傾倒するの虞あるが爲め安定なるピラミッドの形を採れるなりと云ふ。フレッサヤ氏は其原因を蘆泥構造に歸し蘆の束ねたる柱を堅牢に爲すため周壁の面に少しく内側に傾きを附けたるにて横断面を見れば恰も迫持の如くになり自然の原理に近しと云へり。

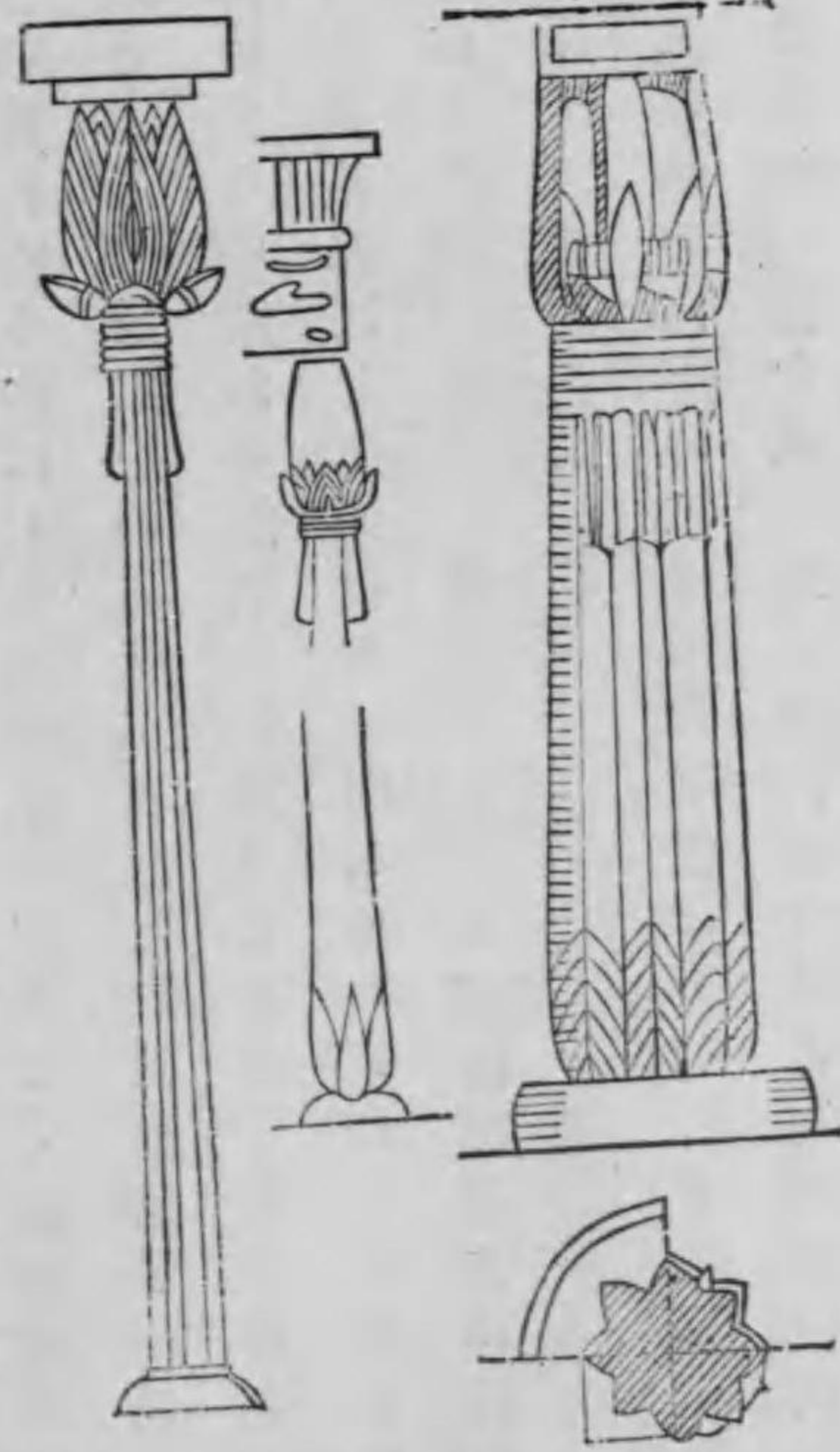
埃及建築の内部の柱は太古は蘆を束ね所々を縛し其上にロータス(Lotus)蓮に似たる植物の莖を載せたり後世建立せる花崗石の柱及其の柱頭部裝飾に明らか其の痕跡を残せり。殊に西曆紀元前五千年より二千三百年に至るの間即ちテベ王國の時代には已に石材を用ひて柱及び柱頭を造りしも尙ほ木材或は蘆より進化したる様式を有し例へばベニハッサン(Beni-Hassan)の石窟墳墓に使用せ



第 百 五 十 七 圖



第 百 五 十 六 圖



石 柱 蘆 柱

にある淺き裝飾彫刻は元來太古の泥壁に行はれたるスグラフイターより由來せるものなるべし。泥壁には高肉彫りの彫刻等を爲す能はざれども其上に漆喰類を塗れば裝飾的の好材料となり埃及の象形文字(Hieroglyphics)繪畫模様等を畫き

る石柱には蘆或はロータスの幹に類せるものを四本宛頭部にて縛し柱頭は外方に脹出せるロータスの荅に擬したるものを載す。斯る柱は元來木造建築に用ひられたること明かにして木造の場合には屋根は輕き木材にて構造し乾燥せる埃及の氣候に適する様に些少の勾配を有せり。此様式を帶たる柱は埃及の後期には風鈴型の柱頭と共に盛んに行はれたり。埃及の後期に於ける花崗石の建築の壁面

たるが後石壁となりて之れを淺き陰刻として表はし壁面の裝飾としたるなり  
(第百五十七圖參照)

振き出し

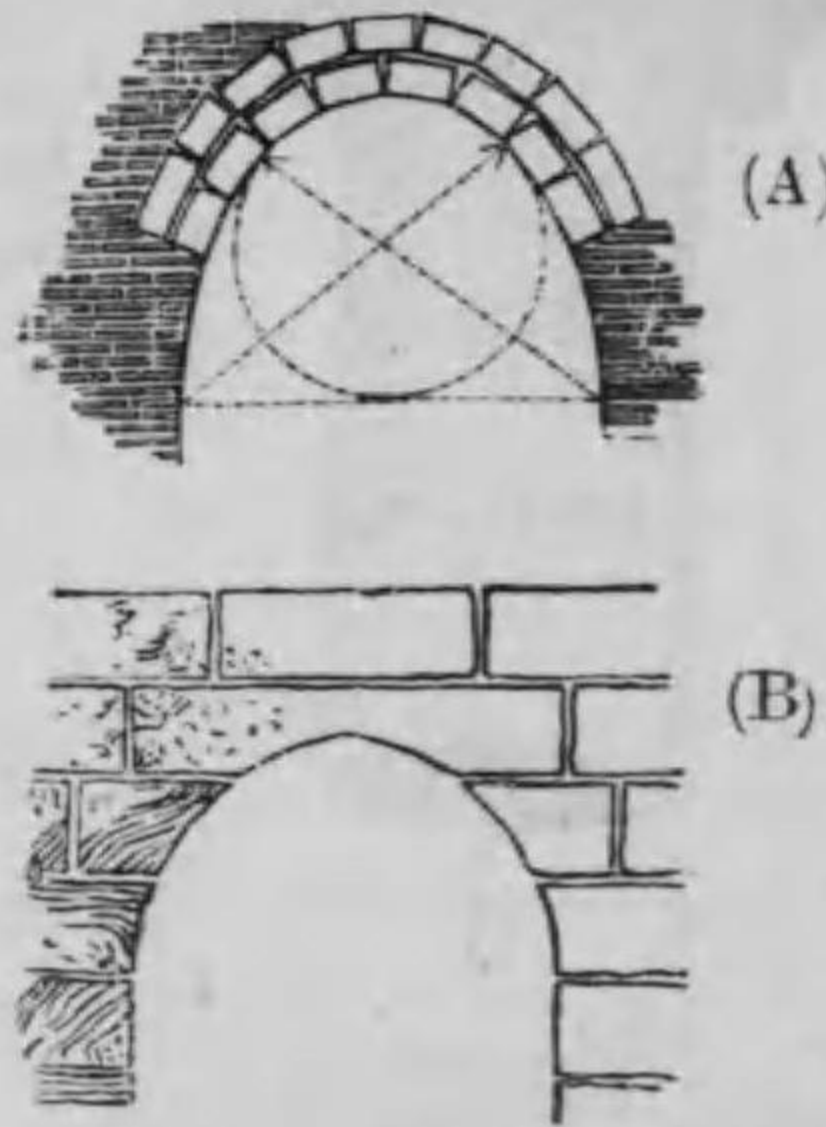
スクラフイター(Sgraffito)は又グラフィター(Graphito)と稱し、漆喰裝飾の一つにして、先づ或る色の漆喰類にて下地を塗り其上に他色の漆喰類の薄層を塗りて其上層を模樣的に掻き下地の色塗を顯はす方法なり。又埃及の文字は物象を直ちに文字として使用せる象形文字にして、第百五十七圖壁面に見ゆる鳥獸等の小なる繪の如きものは皆文字なり。

古代埃及時代の建築技術は概して幼稚なるも又其中には今日の學理を以てして想像出來ざるものあり殊に外觀に至りては單調なれども雄渾莊大なる點に於ては他の建築様式の到底企及し能はざるものあり。

埃及の建築に用ひられたる建築材料は石灰岩、砂岩、花崗石、臘石、煉瓦、木材等にして煉瓦には日光にて乾せしものと窯にて焼きたるものとあり。其れを積むモルタルは石灰にして其中に少量の砂と藁とを混和することあり又接手に金屬或は木製の太柄を植込み壁の内外とも漆喰塗になせり。

彫刻は石材を積みたる後に施せし例あり。又テールベ時代の建築家は長廿五呎乃至三十呎の石楣を切出し殿堂に使用せるが如く、其構造法は重に楣式なれども

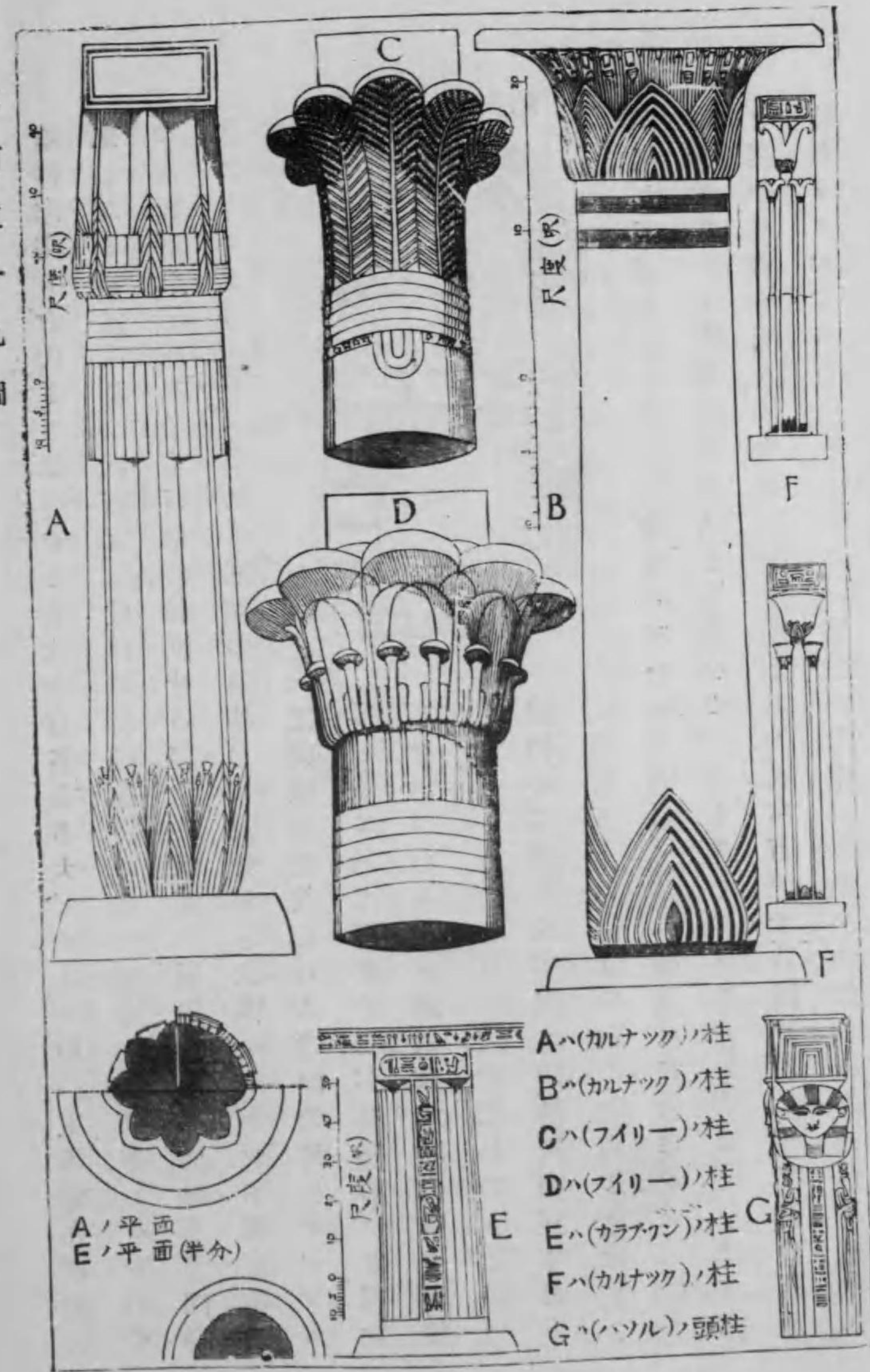
第百五十八圖



埃及迫持構造法

迫持穹窿も古代より使用せらる。彼の有名なる大ピラミット中の王の室には上に架したる粗造なる二枚石より成れる荷受迫持の如き構造あり又デンデレ殿堂には西曆紀元前三千六百年に建設せる粗造の煉瓦三層迫持あり。又殆んど同時代にラホテプ(Rahotep)にも貳個の迫持を架設せりと云ふ。マリエツト氏は第六

王朝頃に架設したる半圓迫持をアビドス(Abydos)に於て發見せしが其楔石には石灰石を用ひありしと云ふ。又同處のセチ殿堂(Seti's temple)には穹窿を架したり。之等の迫持の形體には半圓、尖頭、缺圓、楕圓等あり。第百五十八圖(A)の如く左右より煉瓦を積出し張間を減じ其上に煉瓦の平を表に向けて積み煉瓦は互にモルタルにて附着せしむ。又穹窿は二層以上に積むこと多くラメシウム(Ramesseum)にては穹窿を強むる爲め所々に控迫持積を爲しあり。又第百五十八圖(B)の如き平積の石迫持ありアビドス(Abydos)に於ける殿堂の七室は皆此方法に依れり此の構造は純



粹の迫持構造に非ず従て横壓力を迫臺に及ぼさゞれども廣き入口には架する能はず。

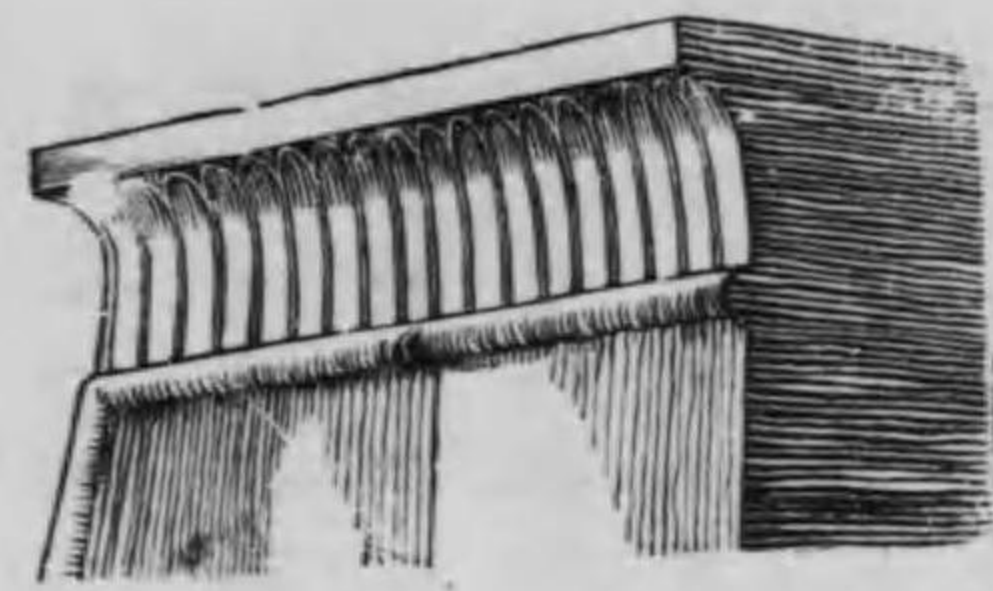
柱は一本の石にて造れるもの稀にして多くは數個を積上げたものなり大柱に至りては各層又二三個の石を用ふ有名なるカルナツクに於ける中央の柱は高六十五呎にして其他は四十三呎なり其直径と高さの比例は1と5或はりなるが故に希臘のドリツク範柱と大差なし又多くは圓形の礎盤上に置かれ柱身は漸次上部に至るに従つて細く種々の彫刻或は色彩を施し下部に丸味を付したるもの多し(第百五十九圖参照)

柱頭はロータスの蕾花、風鈴形、椰子の葉等の形を模し此等の形體は既にピラミット建設當時の殘片に彫刻しあり。

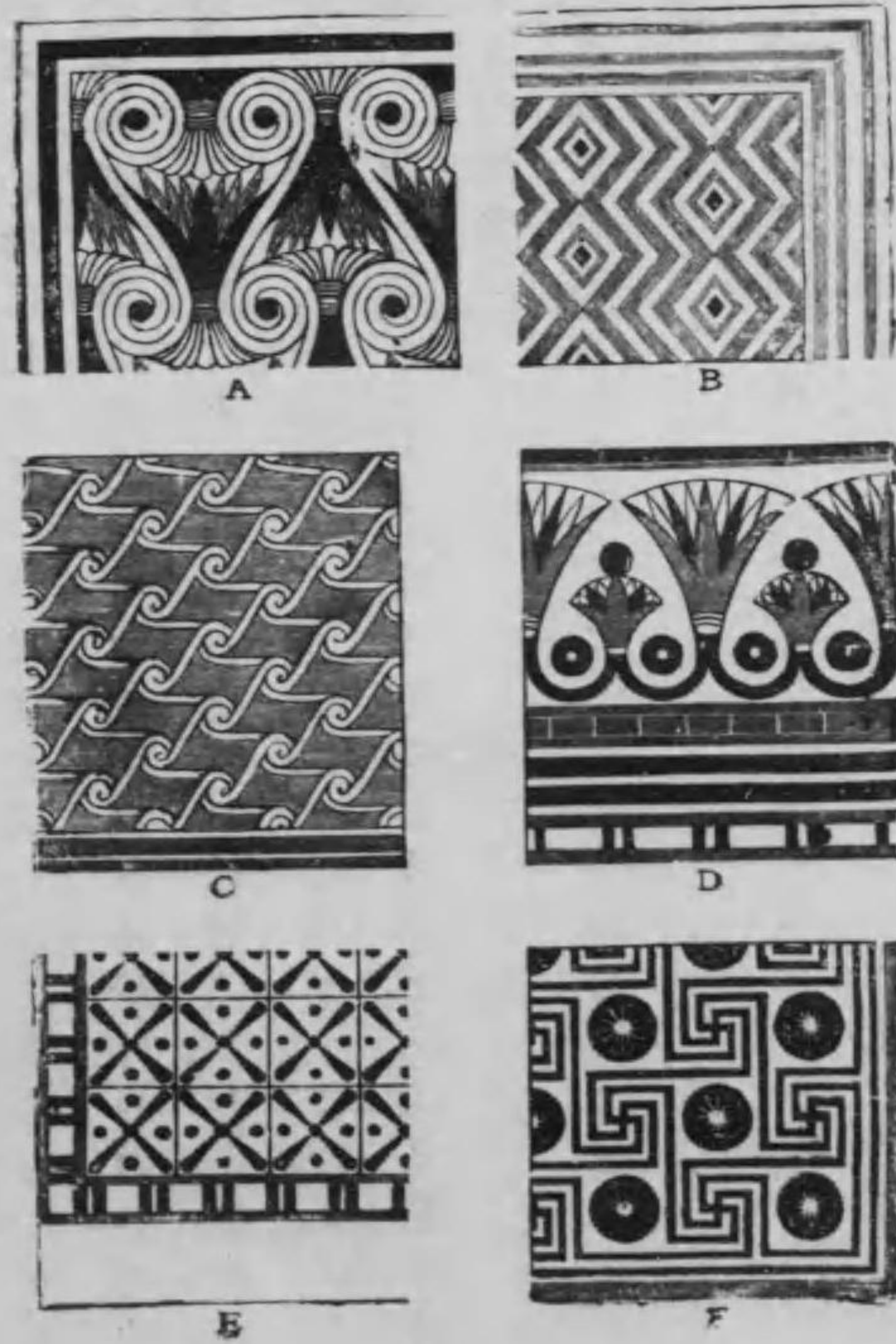
線形は稀少にして最多く用ひらるゝはゴルヂ(Golji)と稱する者なり(第百六十圖)壁面の裝飾は平面的なるものと彫刻せる立體的なるものとを問はず彩色を施すを通常とし、色彩は綠、青、赤、黃等を用ひ模様には第百六十一圖の如き種々の埃及模様を案出せり。

埃及建築の重なる遺物はピラミッド(金字塔)と殿堂となり、而してピラミッドは國王の墳墓にして規模極めて雄大之れに要せし勞力經費、材料等の量に就きて比較

第百六十圖



埃及及線形  
第百六十一圖



埃及及裝飾

すれば後世の建築にして之れに及ぶものなしピラミッドを積疊せる無數の石材は各巾六呎長二十呎以上なる立方體に成形し琢磨したる後据付けしものなり

如何にして古代の埃及人が斯る多量の大理石材を切出し數千哩を運搬し、現今の如き機械の裝置なく且つ鐵類をも知らざりしに萬古朽ちざる大石工事を精密に竣工せしめしか殆んど吾人にとりては謎なりとす。

殿堂の建築は一種の特色あり例へば正面より漸次後方に至るに従つて高さを減じ種々の大きさを爲せる構造の集合體とも云ふべく稀には他の時代に建増を爲せしものあり。

墳墓は各種の畫及び象形文字にて被はれたる神秘の室と廊下より成り觀者をして冥朦として神聖なるの感あらしむ。

年代に依て埃及建築を大別すれば左の如し。

(1) メムフィス時代(Memphite) 西曆紀元前四千年乃至三千年の間、すなはちメムフィス(Memphis)を首府とせる帝王以下十代間の治世にして之の時代重にピラミッドが建設せられたり。

(2) テーベ時代(Theban) 西曆紀元前三千年前乃至千百年の間、即ちテーベ(Thebes)を首府とせる帝王以下十代間の治世にしてオペリスク、殿堂、王宮等多く建設せら